

3.18

500



始



6p80



賜天覽
賜台覽

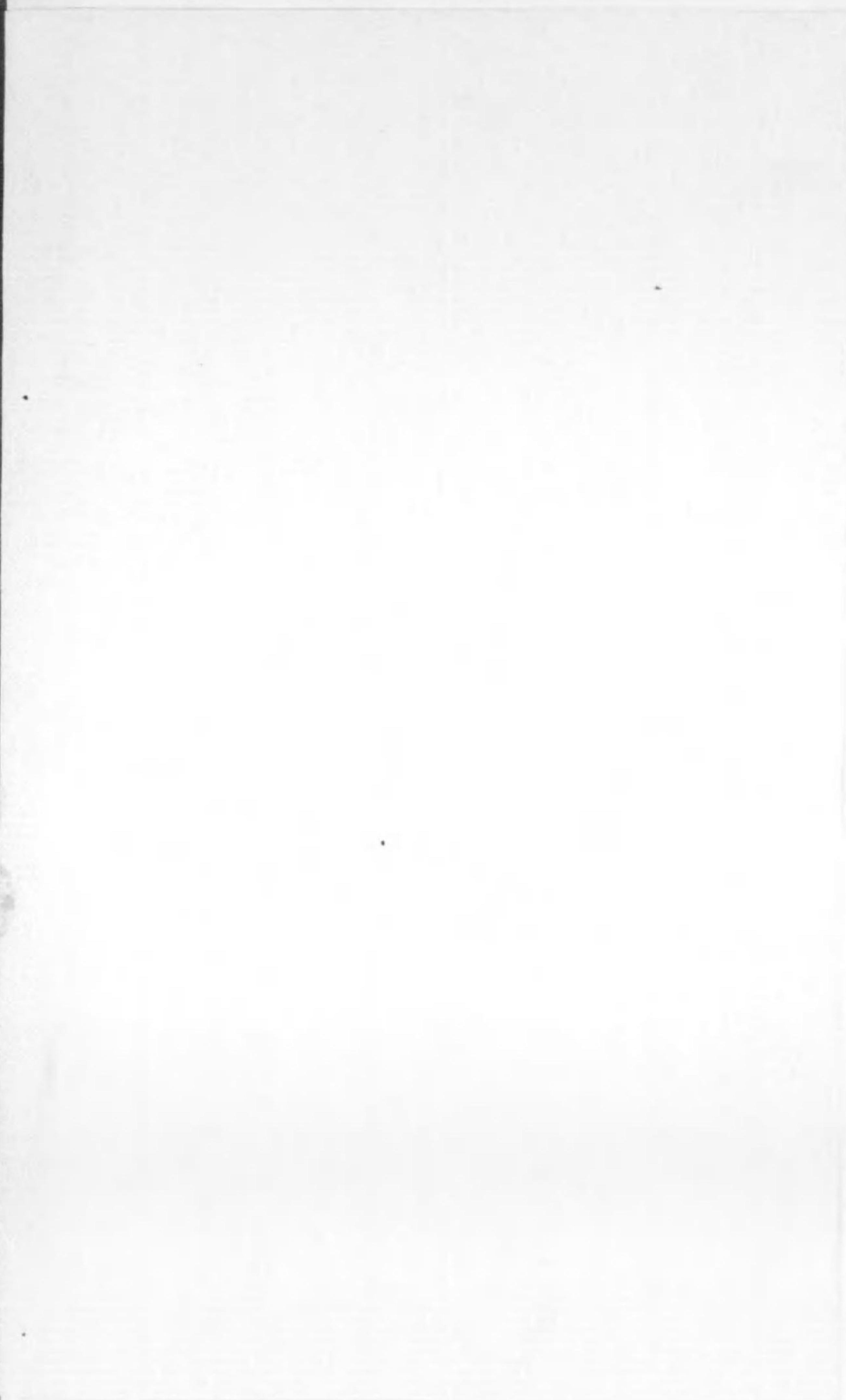
本書

天皇陛下天覽

皇太子殿下台覽

ヲ賜フモノナリ

宮内大臣



3/8-500

陸軍大臣山梨半造閣下序文
元帥伯爵長谷川好道閣下題辭
參謀總長元帥子爵上原勇作閣下題辭
陸軍大將一戶兵衛閣下題辭
故陸軍大將男爵福島安正閣下題辭
故陸軍中將山田隆一閣下序文

步兵第十三聯隊史

(大正十二年版)

附下士優遇及其志願心得

步兵第十三聯隊本部校閱
帝國聯隊史刊行會編纂

大正
12. 3. 7
内交

秋存



々長

元帥伯爵長谷川好道題



鑄 百

上原題 鍊

下閣作勇原上爵子帥元長總謀參

鑄 百 鍊

皇發



兵衛謹題



威揚

陸軍大將一戶兵衛閣下

一死鴻毛
斷不移

安正題



故陸軍大將男爵福島安正閣下

序

海ユカバ水漬ク屍山行カバ草ムス屍ト二千年
以前大伴ノ兵ドモガ歌ヘル處ハ今日帝國軍隊
ノ精神トシテ古今ヲ通ジテ謬ルコトナク又地
方ニ依テ異ルコトナシト雖モ九州男子ニ九州
男子ノ氣風アリ關東男子ニ關東男子ノ氣概ア
ルガ如ク聯隊ニハ聯隊ノ氣魄アリ此氣魄タル
ヤ一朝一夕ニ成ルニアラズシテ其軍旗ニ依テ
代表セラル、光榮アル歴史ハ何レモ忠勇義烈

ノ碧血ヲ以テ染メラレザルナシ聯隊歴史ノ如
キハ眞ニ軍隊教育ノ活資料ト謂フ可ク之ヲ讀
ム者感奮興起愈々其歴史ヲシテ光輝アラシメ
其氣魄ヲシテ旺盛ナラシムコト吾人ノ望ナリ

大正六年八月

陸軍中將

山梨幸造

序

國ニ國史アリテ國民精神ヲ涵養シ家ニ家系アリテ
子弟ヲ奮起セシムルカ如ク聯隊亦忠魂義膽ノ結晶
セル歴史アリテ報國ノ大義ヲ獎諭ス

聯隊ハ此ノ歴史ニ基キ獨立セル和樂ノ一家庭ニシ
テ又鞏固ナル精神的團結ナリ此ノ光輝アル歴史ヲ
シテ更ニ一層ノ美ヲ加ヘシムルハ將卒ノ奮勵努力
ニ待タサルベカラズ頃者各聯隊歴史ノ編纂セラレ
ルヲ聞キ其ノ企畫最モ宜ニ適セルヲ喜フ讀者伍ニ

アルト郷ニアルトヲ問ハス是ニ依テ修養感奮シ國
軍ノ強ヲ致サシムルハ吾人ノ望ナリ茲ニ一言以テ
序トナス

大正六年八月

陸軍中將

白田隆一

歩兵第十三聯隊史

目次

- 第一章 聯隊の創設及編制
 - 一、聯隊となる迄の沿革
 - 二、聯隊の創設
 - 三、軍旗親授
 - 四、旅・師團の編制
 - 五、機關銃隊の増設
- 第二章 皇室と吾聯隊
 - 一、緒言
 - 二、御名親署の勅諭
 - 三、御殊遇の一斑

一三二〇九七四三一

四、皇太子殿下行啓	一六
五、御大喪と御踐祚	一七
六、昭憲皇太后御大喪	一九
七、御即位大禮並大觀兵式	二一
八、御眞影及御寫眞拜受	二二
九、皇太子殿下行啓	二三
十、朝香宮殿下御成	二三
第三章 神風黨の變	
一、暴動の起因と其急襲	二五
二、營内の戦闘	二七
三、軍旗の亡失及奪還	三二
四、鎮 歴	三三
五、志士の精神	三五
第四章 西南の役	

一、西郷隆盛叛す	三六
二、守 城	三七
三、聯隊長戦死	四二
四、段山の激戦	四五
五、第一大隊の突圍	五〇
六、重 圍 解 く	五四
七、健軍附近の激戦	五七
八、豊後口の戦闘	五九
九、賊徒戡定・凱旋	六三
第五章 日 清 戦 役	
一、開戦の事情	六七
二、動員及出征	七〇
三、威海衛の攻略	七四
四、平和克復・威海衛駐屯	八二

第六章 日露戰役

- 一、日露開戦の事情 八六
- 二、動員及出征 九一
- 三、上陸及蓋平の戦闘 九五
- 四、大石橋並海城の占領 九九
- 五、遼陽附近の會戦 一〇一
- 六、首山堡の激戦 一〇三
- 七、沙河附近の會戦 一一二
- 八、浪子街の戦闘 一一三
- 九、沙河附近の對陣 一一九
- 十、奉天附近の大會戦 一二二
- 十一、魚鱗堡附近の戦闘 一二八
- 十二、木廠附近の滯陣 一三二
- 十三、平和克復・凱旋 一三五

十四、凱旋大觀兵式 一三八

第七章 忠勇美談

- 一、軍人龜鑑谷村計介 一四一
- 二、武勳拔群の三將校 一四六
- 三、感狀八勇士 一四八
- 四、團結の花 一五一

第八章 平時歴史

- 一、特別大演習 一五四
- 二、三事變と聯隊 一六〇
- 三、對島及沖繩分遣 一六一
- 四、臺灣守備 附土匪討伐 一六二
- 五、韓國守備 一六五
- 六、中支交代派遣 一六六
- 七、第六中隊の轉出並補填編成 一六九

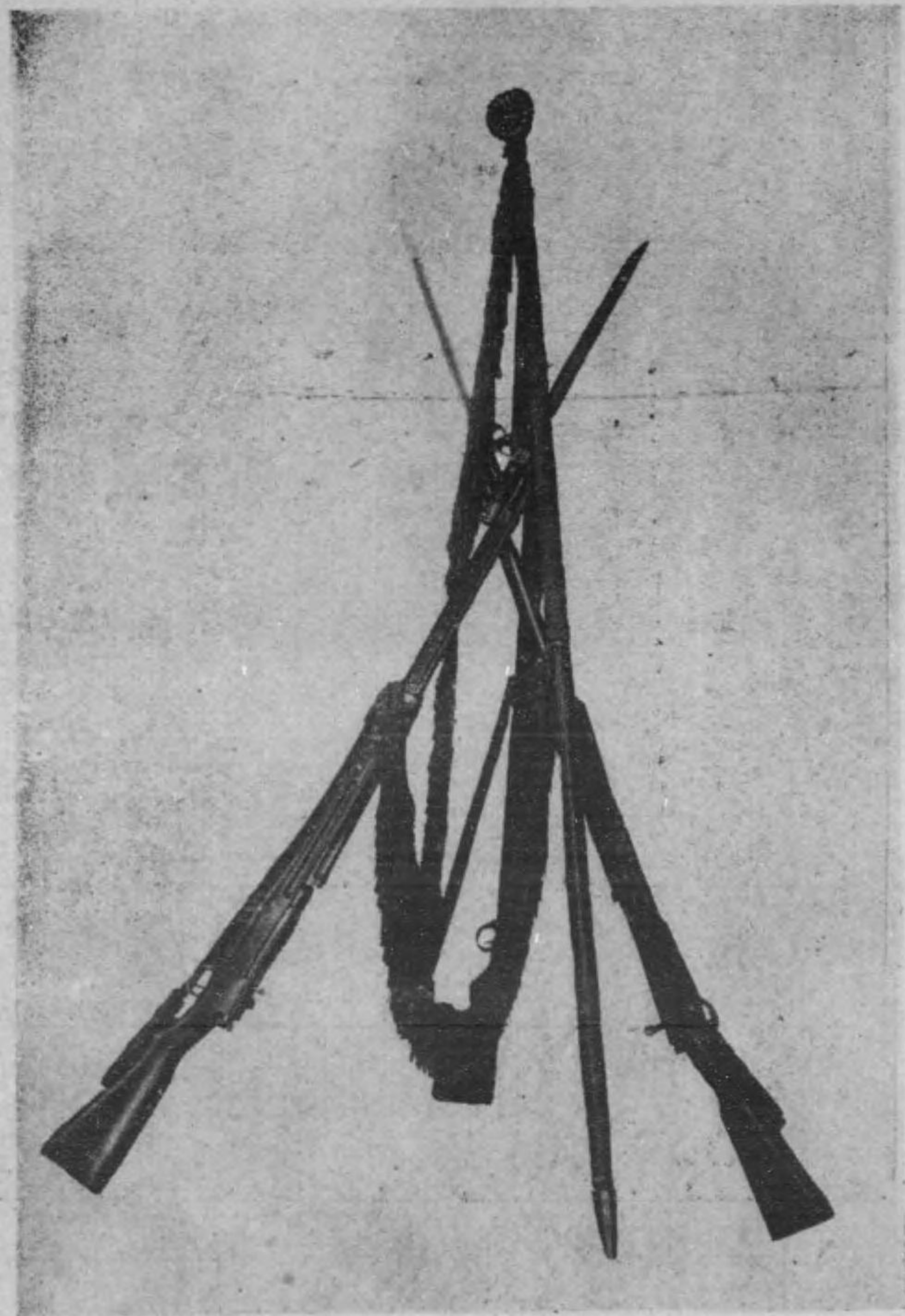
師團長	旅團長	聯隊長	大隊長	中隊長	班長
陸軍中將	陸軍少將	陸軍歩兵佐	陸軍歩兵佐	陸軍歩兵尉	陸軍歩兵尉

閣下	閣下	殿	殿	殿	殿
----	----	---	---	---	---

在隊中ノ直屬上長官

隊銃關機	隊中三第	隊中二第
隊長 大尉 藤田 宏	隊長 大尉 湯田 典三	隊長 大尉 笠原 三郎
中尉 村田 皎三	中尉 湯田 佐吉	中尉 笠原 政彦
同 安 鍾寅	同 西村 勸次	同 坪島 文雄
同 小野 正雄	少尉 高田 喜久人	同 好田 藤一
同 久米 眞多男	特務 高原 秀信	特務 杉田 熊平
	隊中七第	隊中六第
中尉 林 正直	隊長 大尉 片山 謙	隊長 大尉 牧野 智博
少尉 林 勇藏	中尉 榎原 無事	中尉 牧野 四郎
特務 後藤 勝太郎	同 河喜多 藤基	同 布上 照一
同 山田 忠次郎	同 宇野 喜一	同 柴田 藤平
	隊中一十第	隊中十第
	隊長 大尉 北川 貞次	隊長 大尉 有富 親藏
	中尉 野口 琢磨	中尉 畑 亮介
	同 米本 勝男	同 千知波 幸介
	同 柴田 正男	同 山川 常軒
	少尉 鍛冶 一	同 松山 儀一
	特務 加來 一	特務 寺尾 今朝雄

軍 旗



★ 隊 聯 三 十 第 兵 步 ★

形 原 旗 隊 聯 兵 步

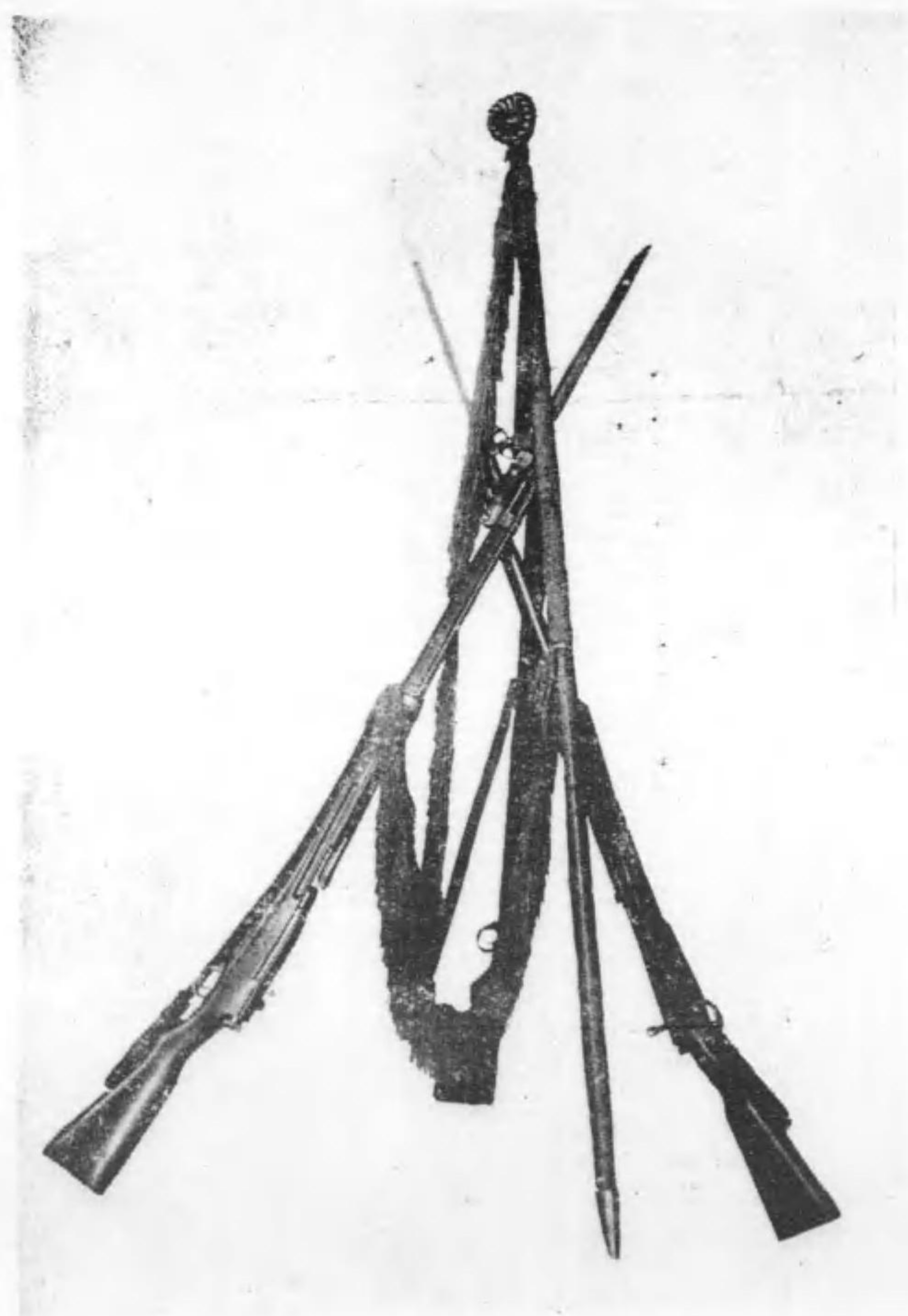


一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一

註 記

旗の長二尺六寸四分、幅三尺三寸
 幅を記する所の長さ七寸、幅八寸
 周囲は金メダル表裏二枚を合す
 旗の地は紫色の絹織（後備隊旗は赤色）
 乳は旗地と同じ絹にして別に革製の帯あり
 竿冠は三面の菊花章にして金色なり
 竿と冠とは紙にて留む、此紙には表に駐座
 あり裏は帯を成形す
 此帯と旗の革帯とを紫色の絹紐にて結
 若し旗の位置を定む
 竿はセダン巻を施し黒色に塗す
 竿の下端には石ヅキあり
 軍旗の上覆は黒羅紗の袋なり

軍 旗



★ 隊 聯 三 十 第 兵 步 ★

形 原 旗 隊 聯 兵 步

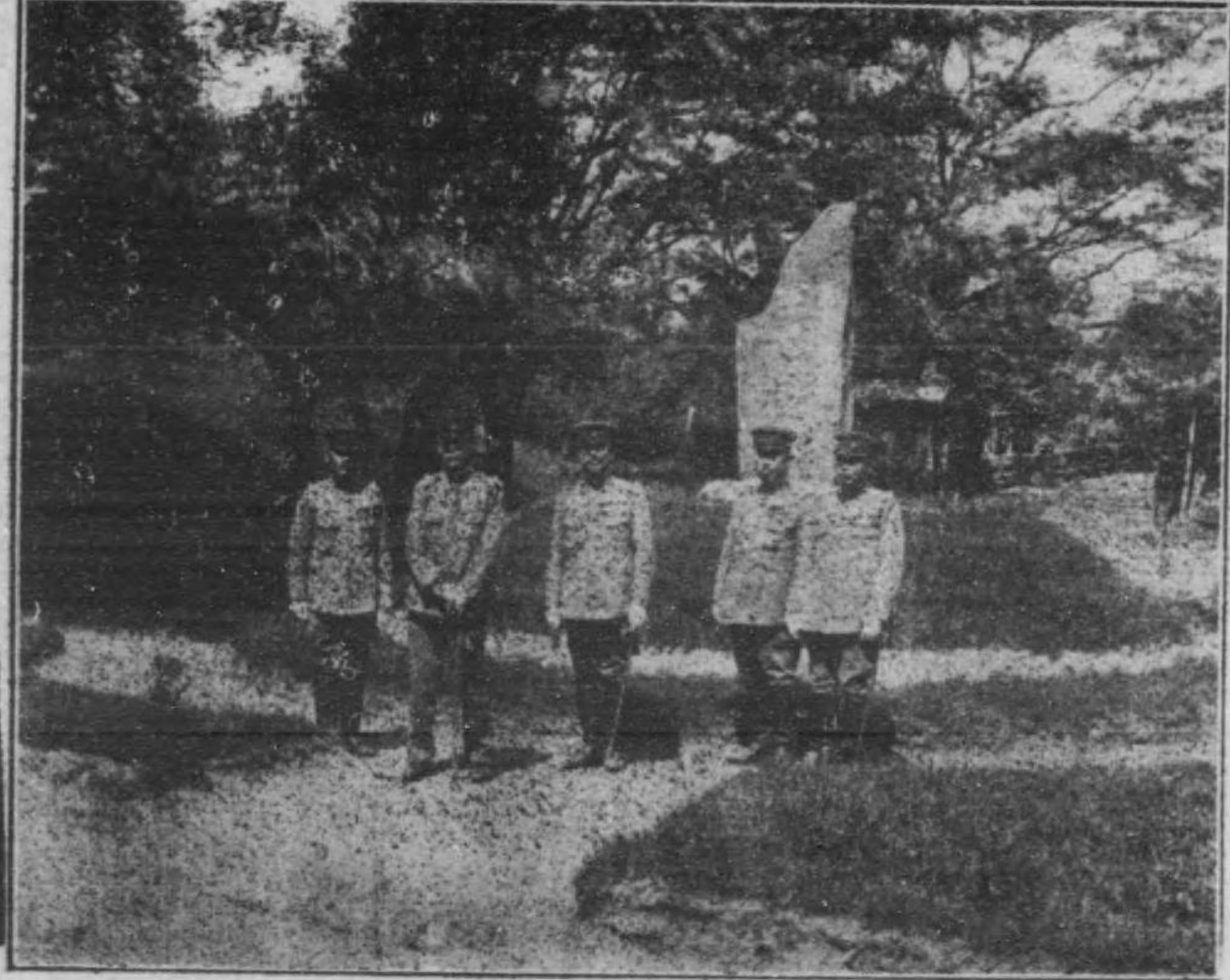
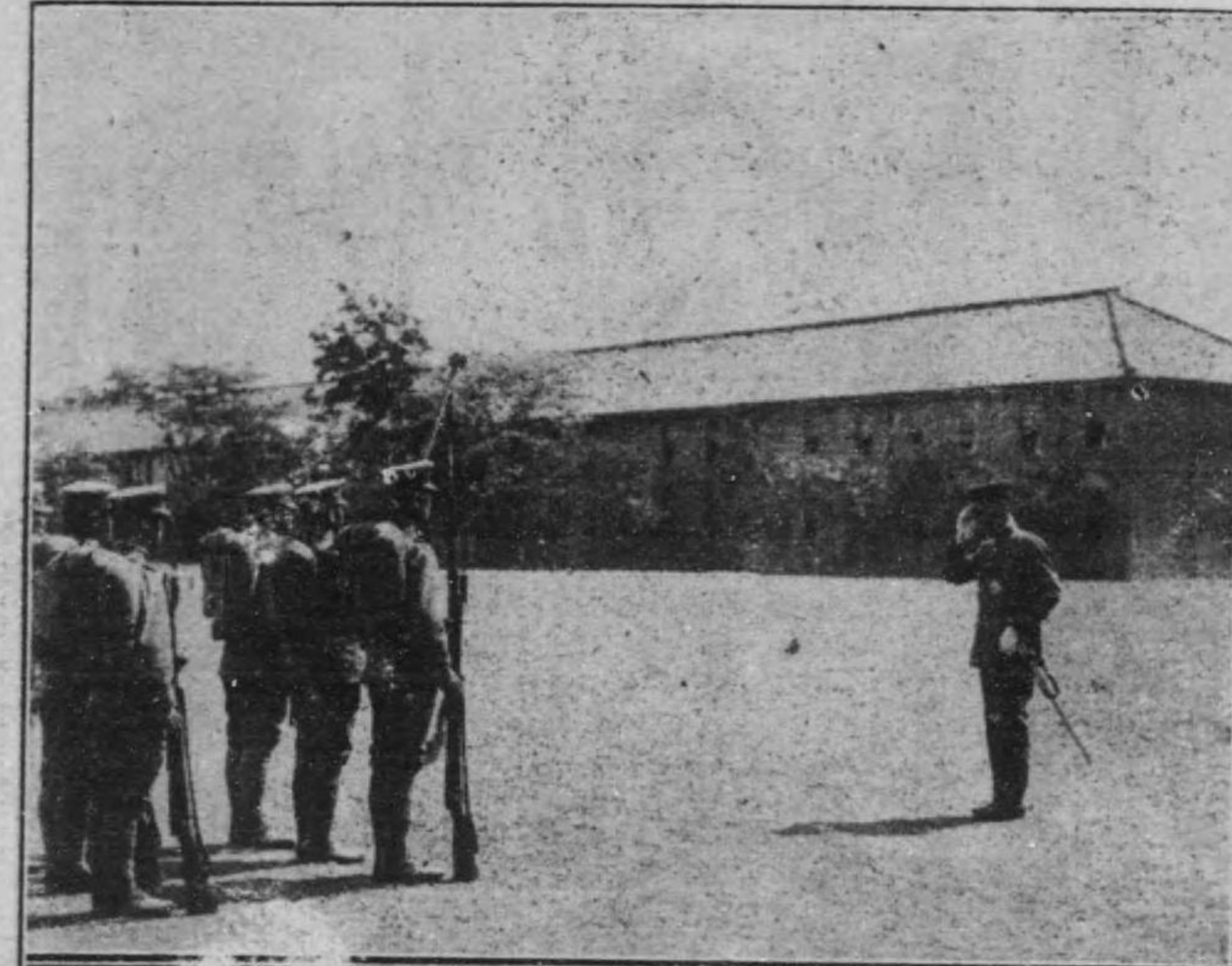


一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、

註 記

旗の長二尺六寸四分、幅三尺三寸、
 隊號を記する所の長さ七寸、幅八寸、
 周囲は金モール表裏二枚を合す、
 縁の總は紫色の絹糸（後備隊旗は赤色）、
 乳は旗地と同じ絹にして別に革製の銀あり、
 竿冠は三面の菊花章にして金色なり、
 竿と冠とは鉄にて留む、此鉄には表に駐座
 あり裏は銀を成形す、
 此環と旗の革環とを紫色の絹紐にて結
 着し旗の位置を定む、
 竿はヘンダン巻を施し黒色に塗す、
 竿の下端には石ヅキあり、
 軍旗の上覆は黒羅紗の袋なり

陸軍大臣來隊記念
(大正十一年五月)



岩井旅團長 (勳六)
 細野少將 (長雄)
 山田師團長 (虎夫)
 山梨陸軍大臣 (半造)
 多田聯隊長 (康雄)

與倉中佐 八明 二十日 戰死
 川上操六 中佐 十一月 戰死
 堀尾聯隊長 三月 病死
 坂井重季 中佐 五月 戰死

歷代聯隊長



第一代
 與倉知實 中佐
 明治八年四月十五日 就職

第二代
 川上操六 中佐
 同十一年十二月四日 就職

第三代
 坂井重季 中佐
 同十三年五月十八日 就職

第四代
 坂元純熙 中佐
 同十五年三月十一日 就職



第五代
 堀尾晴義 大佐
 同十九年六月三日 就職

第六代
 川崎宗則 中佐
 同廿一年三月廿八日 就職

第七代
 長谷川良之 中一大佐
 同廿二年五月廿一日 就職

第八代
 冲原光孚 大佐
 同廿六年四月廿八日 就職

長 隊 聯 代 歷



第九代

師 岡 政 宜

同廿八年四月

就 職

第十代

松 居 吉 統

中一大佐

同卅年十月十一日

就 職

第十一代

吉 弘 鑑 德

中一大佐

第十二代

奥 村 信 猛

中 佐

第十三代

片 倉 千 萬 多

中一大佐

同卅九年五月廿八日

就 職

第十四代

五 十 君 弘 太 郎

大 佐

同四十年七月廿六日

就 職

第十五代

山 崎 義 重

大 佐

大正二年八月廿二日

就 職

第十六代

佐 多 武 彦

大 佐

同四年二月十五日

就 職



前 聯 隊 長 及 現 聯 隊 長

第十七代

大 島 良 三 郎

大 佐

大正七年十月十八日

就 職



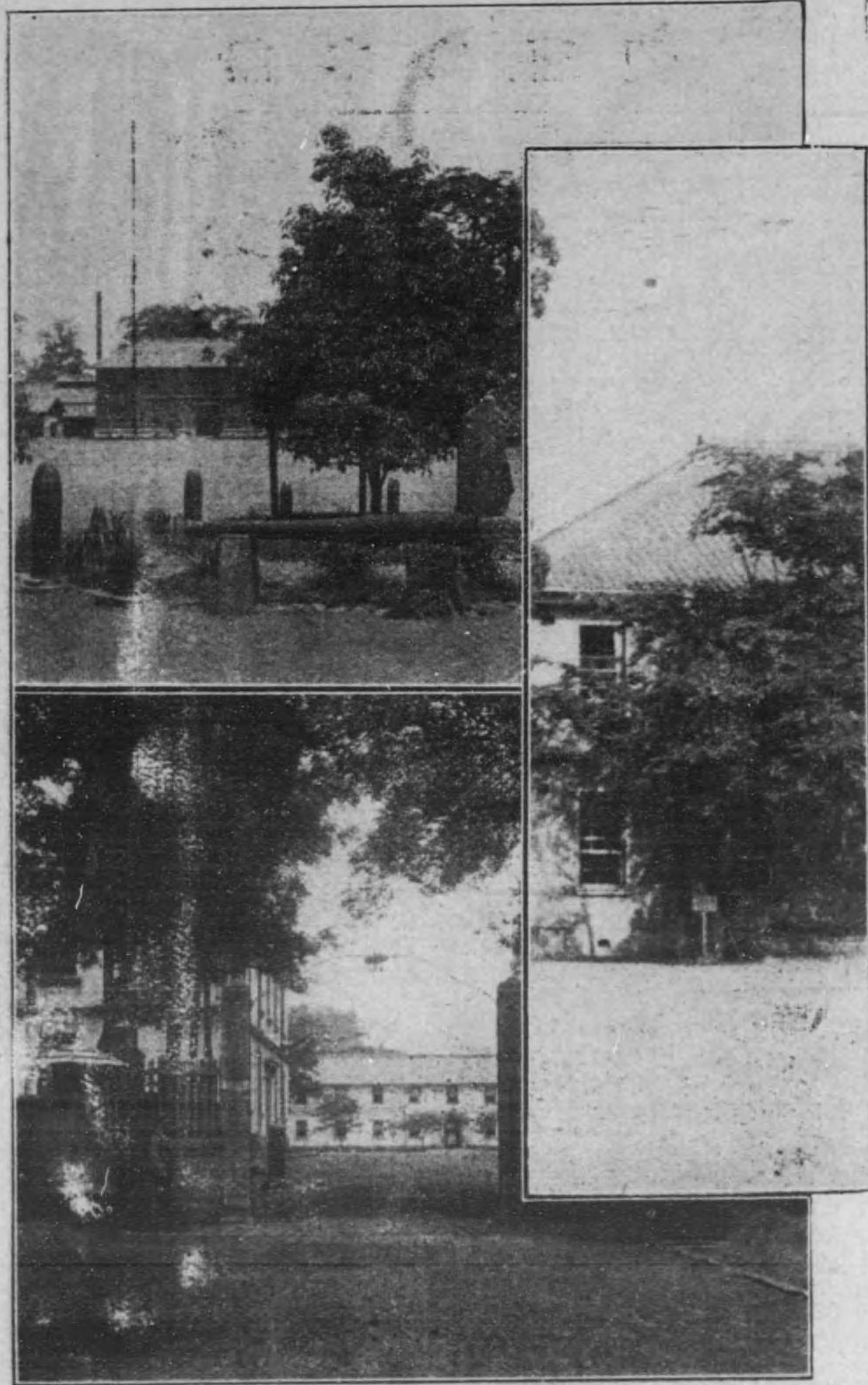
(代 八 十 第)



陸 軍 步 兵 大 佐 多 田 庫 雄

(大 正 十 七 年 七 月 廿 日 就 職)

葉茂枝繁



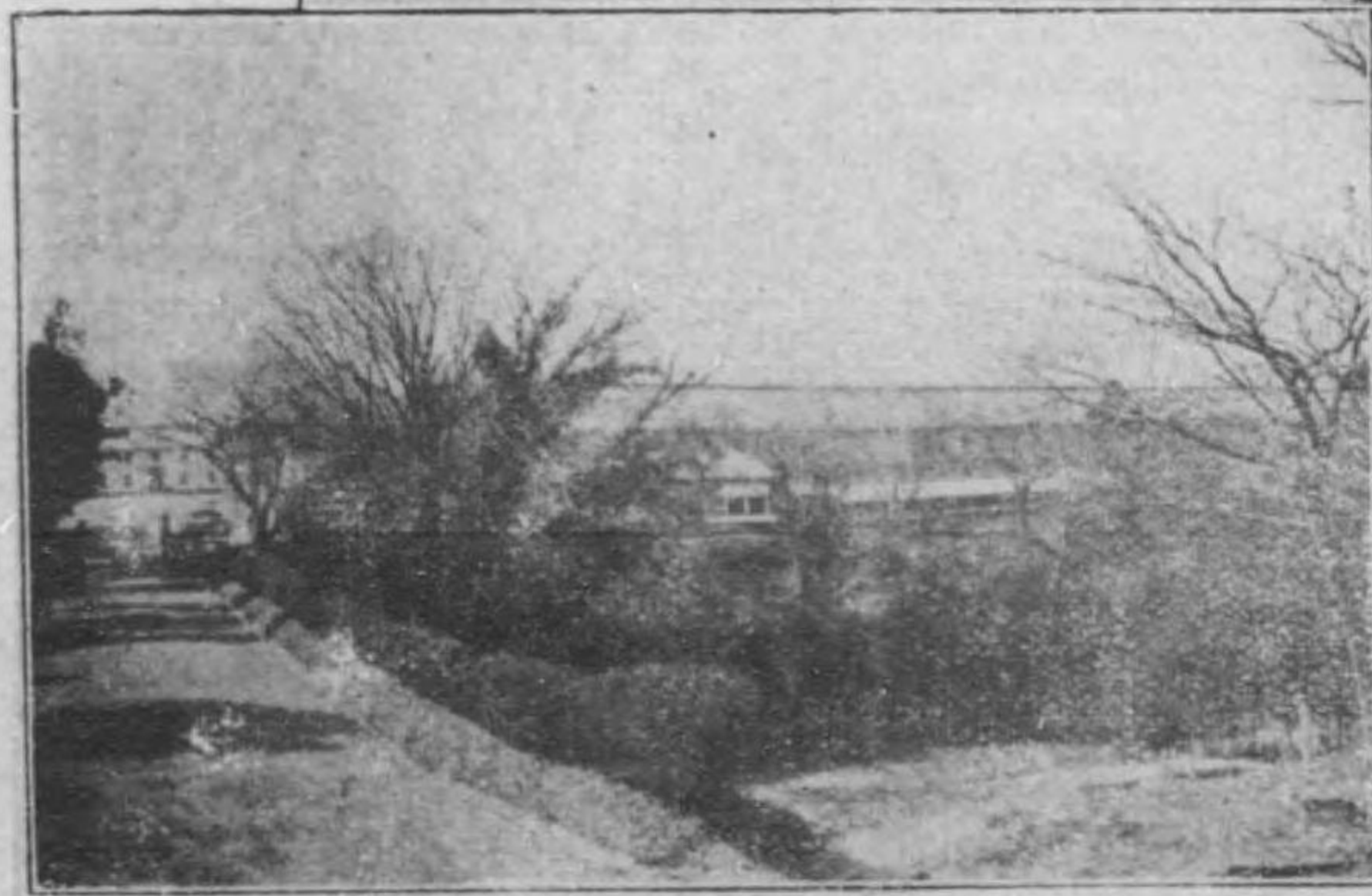
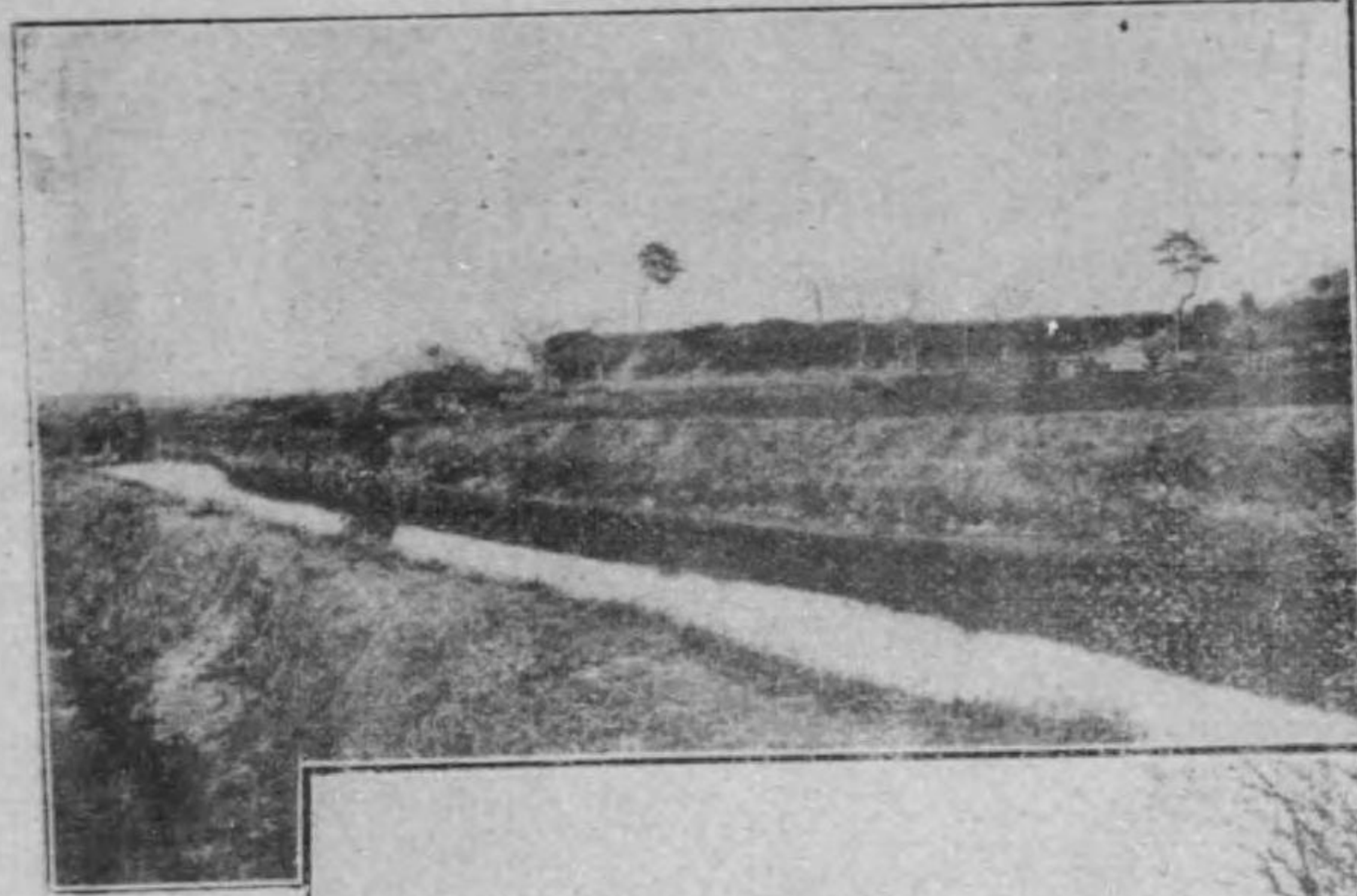
營下 手天中 御皇上
 門 植ノ松樹 手皇陛下 手太子殿
 下 樹 御 下 樹

校將死戰役戰露日



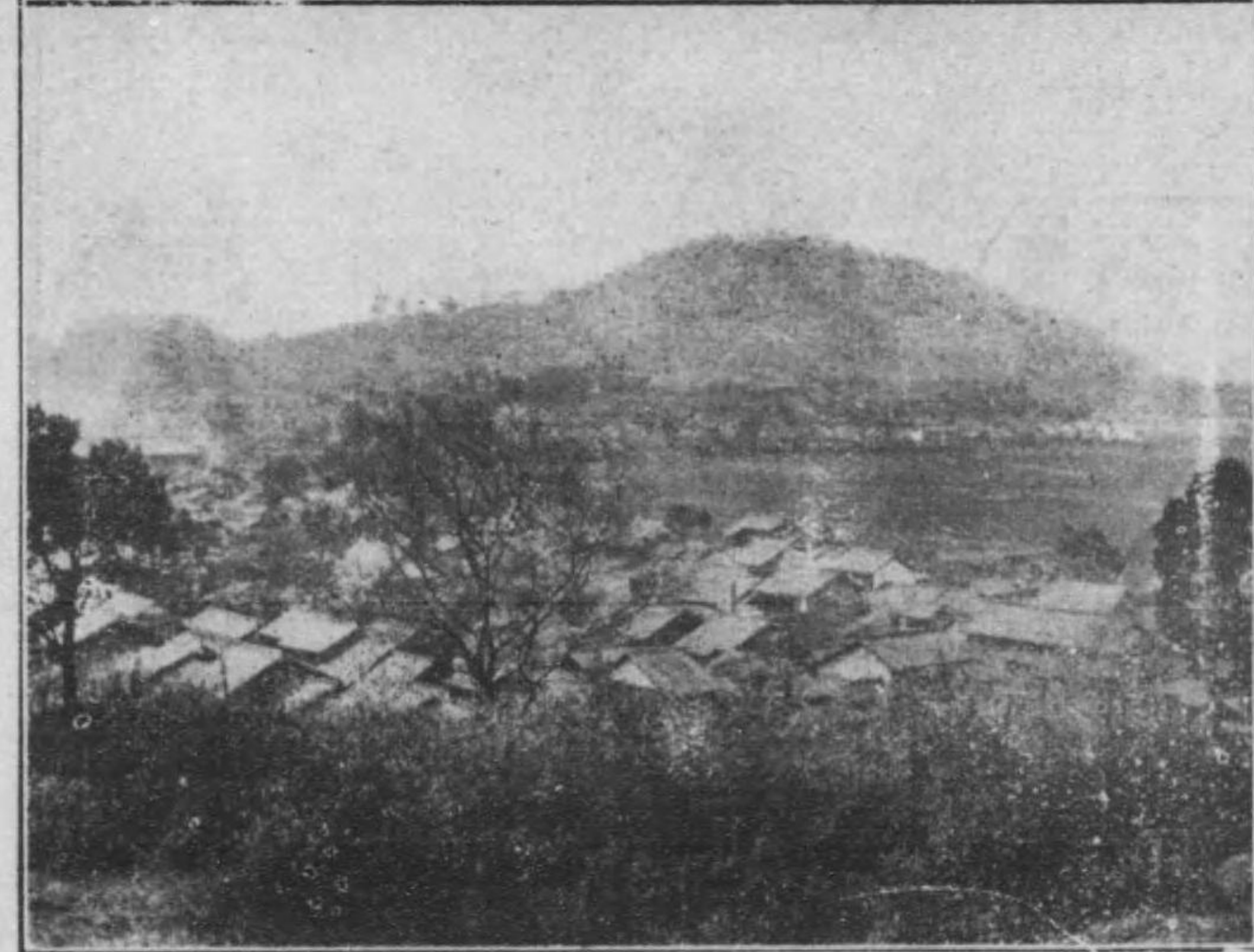
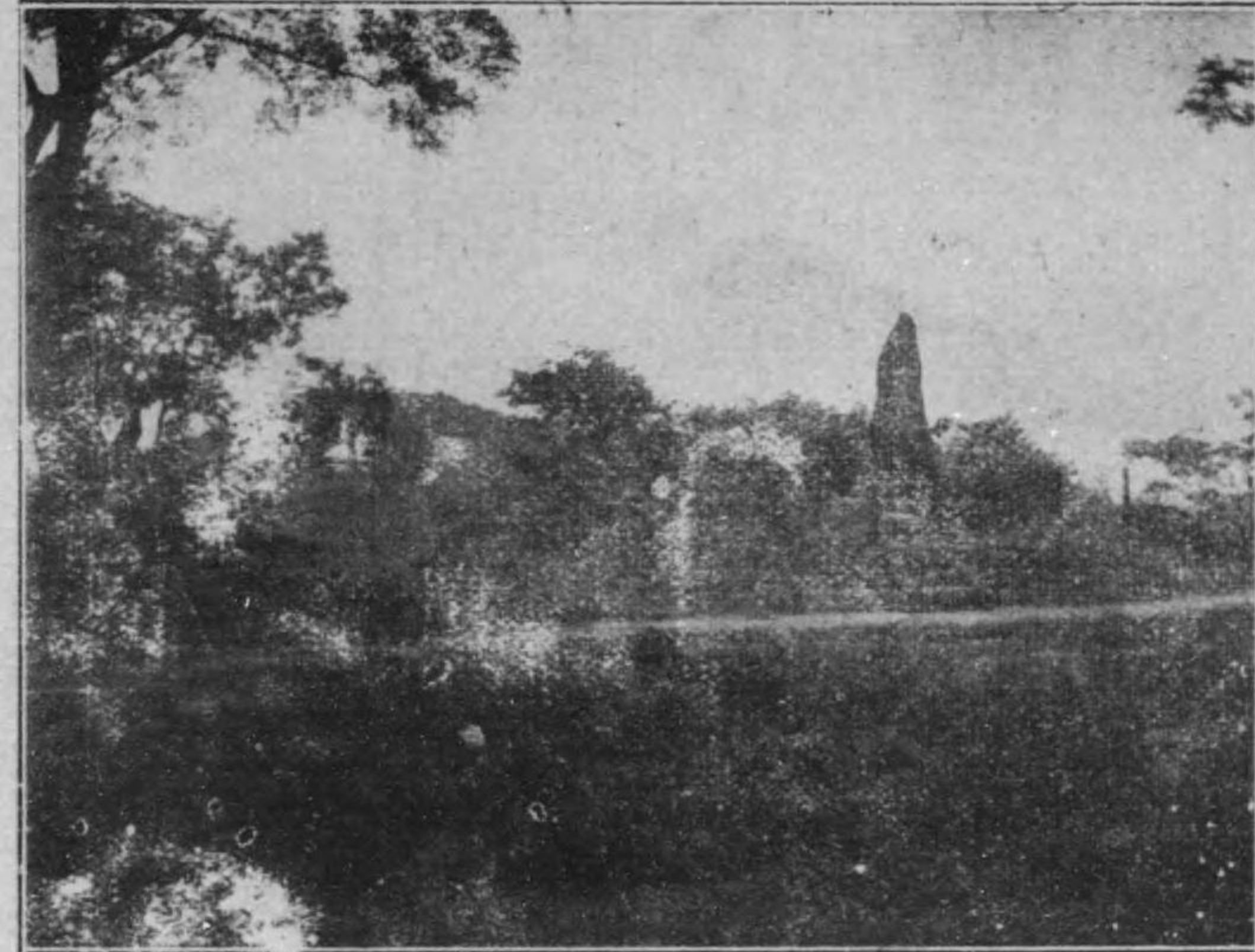
高同日同林同千少
 藤下部 昌胤 佐
 正衛 介 恭
 證 衛 介 恭
 鈴同宮同丸大田少
 同內山祐四郎 佐
 木盛一 繁治
 學 一 繁治
 郡同萩同小同平中
 山原山木 尉
 正宗色邦平
 雄弘次 平
 守同高同池同松中
 永田邊嘉一 尉
 正喜四郎 直家
 雄 四郎 直家
 山同村同福少
 之城上又 尉
 純又次郎
 夫 又次郎

十 年 役 戰 蹟

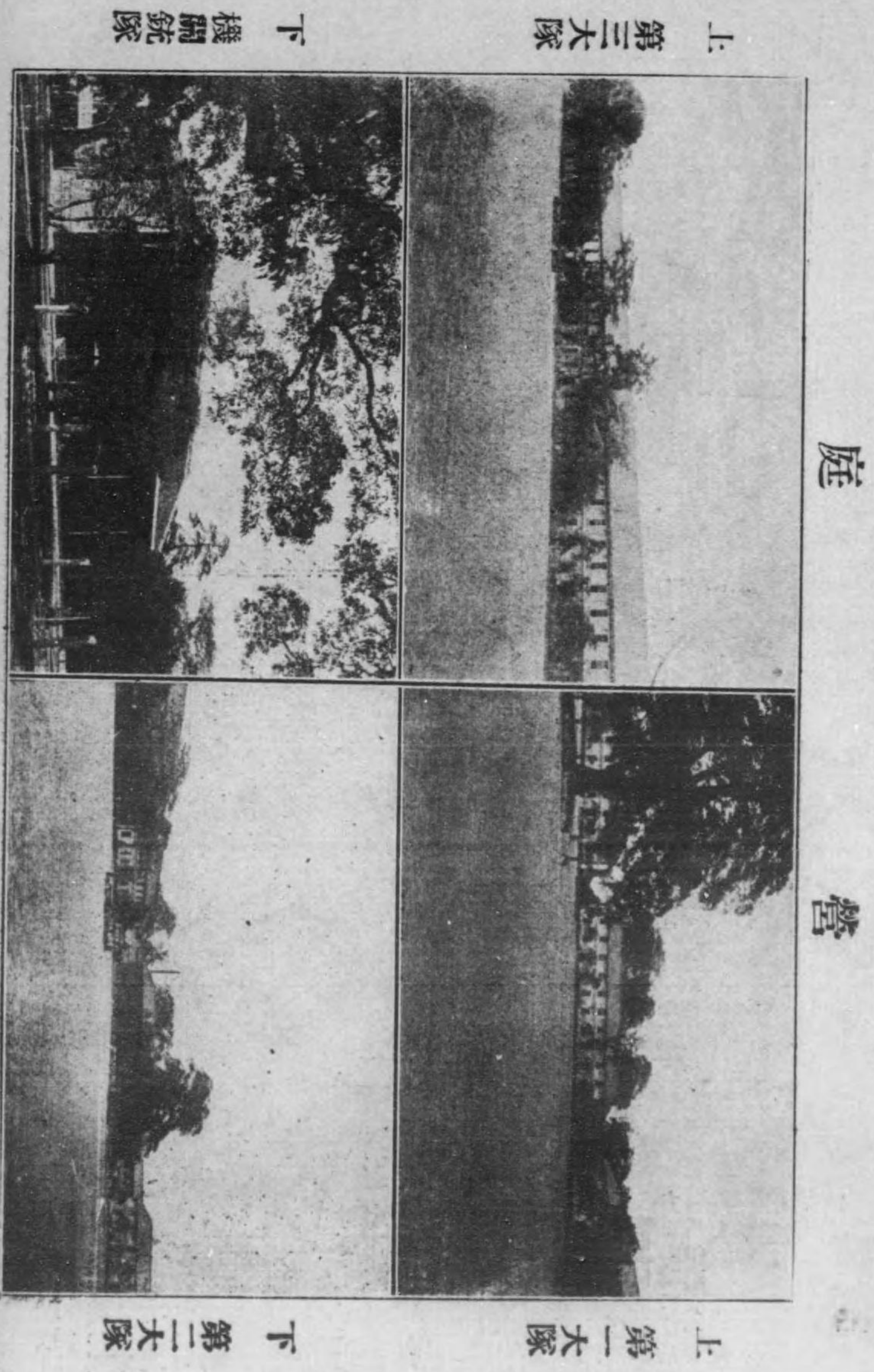


上 段山戰蹟
 方山は藤崎藩の西軍に
 迫り、小丘なりて城を
 取り且、又井岸川にむ
 ち、止りて、汜濫せしむ
 中 連絡渡河點
 四月八日、奥少佐薩
 軍第一編成して、突
 破す。水前寺を、友軍
 に出で、友軍にて
 下 籠城將校跡
 庭避難之跡
 谷少將以下、將校家
 族、正門、右、病者、地
 に、看、難、し、病、者、地
 の、時、又、炊、爨、に、病、者、地
 の、長、女、一、女、を、聯
 生、隊、の、に、族、谷、少、將、下、庭、籠、城、將、校、跡、

十 年 役 之 記 念



上 城 外 藤崎
 臺 與 倉 聯
 隊 長 戰 死
 の 跡 山 花
 遠 山 花
 岡 山 花
 全 景 山 腹
 臺 薩 軍 砲
 を 擊 上 築 砲
 砲 臺 擊 上 築 砲
 官 軍 山 擊 上 築 砲
 及 招 魂 祠
 り 魂 祠



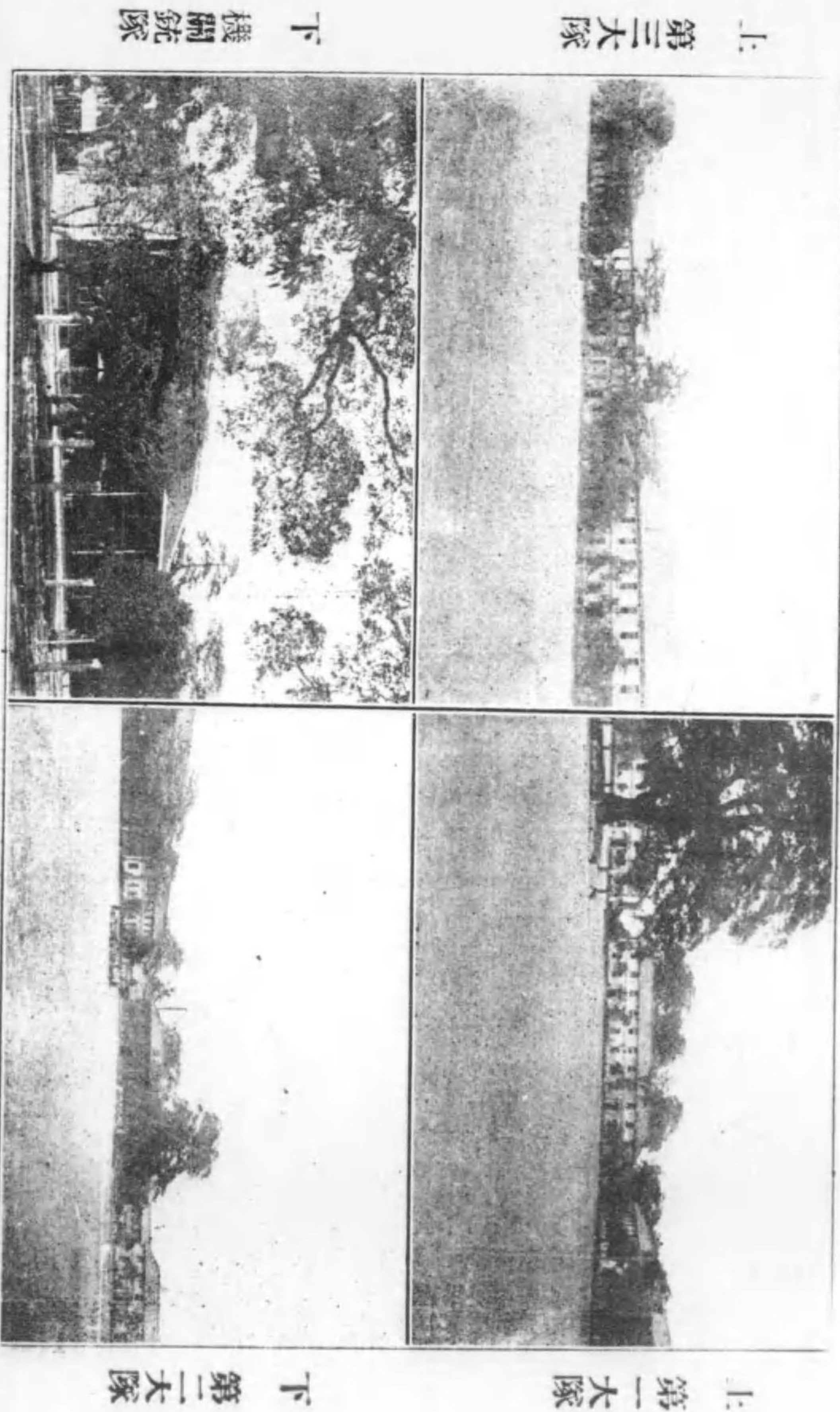
步兵第十三聯隊歷代職員錄 (大正十二年十二月調)

第一大隊長
 第一代 奧保章
 第二代 福原豐功
 第三代 林隼之助
 第四代 吉田道時
 第五代 渡邊章
 第六代 町田實賢
 第七代 原正忠
 第八代 山本信行
 第九代 渡部之
 第十代 岡田昭義
 第十一代 奧村信猛
 第十二代 日下部正術
 第十三代 大島虎毅

第十四代 沼田圓太郎
 第十五代 黒田英吾
 第十六代 岸和田精三
 第十七代 横山榮治
 第十八代 上原藤五郎
 第十九代 下田吉雄

第二大隊長
 第一代 林隼之輔
 第二代 隅岡長道
 第三代 福島庸智
 第四代 井上祥
 第五代 鈴田宜貞
 第六代 鎌田宜政
 第七代 片倉田千萬多
 第八代 山中光保
 第九代 肥後正奇
 第十代 木澤啓
 第十一代 西原爲五郎
 第十二代 木藤彌太郎
 第十三代 上野九一

庭 營



步兵第十三聯隊歷代職員錄 (大正十二年十二月調)

第一大隊長	第一代 奧保鞏	第十四代 沼田 國太郎	第二代隊長	第一代 林 隼之輔
第二代 福原 豐功	第十五代 黒田 英吾	第二代 隅岡 長道	第二代 隅岡 長道	
第三代 林 隼之助	第十六代 岸和田 精三	第三代 福島 庸智	第三代 福島 庸智	
第四代 吉田 道時	第十七代 横山 榮治	第四代 井上 祥	第四代 井上 祥	
第五代 渡邊 章	第十八代 上原 藤五郎	第五代 鈴田 宜貞	第五代 鈴田 宜貞	
第六代 町田 實賢	第十九代 下田 吉雄	第六代 鎌田 宜政	第六代 鎌田 宜政	
第七代 原 正忠		第七代 片倉 千萬多	第七代 片倉 千萬多	
第八代 山本 信行		第八代 山中 光保	第八代 山中 光保	
第九代 渡部 之		第九代 肥後 正奇	第九代 肥後 正奇	
第十代 岡田 昭義		第十代 木澤 啓	第十代 木澤 啓	
第十一代 奥村 信猛		第十一代 西原 爲五郎	第十一代 西原 爲五郎	
第十二代 日下部 正衛		第十二代 木藤 彌太郎	第十二代 木藤 彌太郎	
第十三代 大島 虎毅		第十三代 上野 九一	第十三代 上野 九一	

第十四代 福島 只一
 第十五代 林 吉彦
 第十六代 二神 義治
 第十七代 磯谷 廉介

第三大隊長
 第一代 小川 又次
 第二代 隈岡 長道
 第三代 知識 兼治
 第四代 友安 治延
 第五代 波多 野毅
 第六代 大原 里賢
 第七代 師岡 政宜
 第八代 村上 正路
 第九代 青木 助次郎
 第十代 瀬戸 競
 第十一代 竹中 鎌輔
 第十二代 小原 正恒
 第十三代 小松崎 清職
 第十四代 貴志 典正
 第十五代 八木 亮太郎

第十六代 岡本 茂若
 第十七代 千田 嘉平
 第十八代 南 正吾
 第十九代 吉野 松次郎
 第二十代 松山 武平次
 第二十一代 松木 直亮
 第二十二代 小野田 昌輔
 第二十三代 田卷 捨三
 第二十四代 中野 政次
 第二十五代 西本 雄次郎

聯隊附中佐
 第一代 奥村 信猛
 第二代 天野 芳造
 第三代 山口 平吉
 第四代 相馬 薰次郎
 第五代 南 正吾
 第六代 濱田 楠猪
 第七代 晴氣 市三
 第八代 岩本 宗太郎
 第九代 沼田 團太郎
 第十代 岡崎 武槌
 第十一代 谷村 定規
 第十二代 岸和田 精三
 第十三代 福留 龜太郎
 第十四代 福島 只一
 第十五代 矢田 匡彦

第十六代 木村 恒夫
 第十七代 堀 吉彦
 第十八代 安部 忠夫
 第十九代 小野田 昌輔

聯隊附少佐

第一代	島野 翠	第十六代	福永 卯之吉
第二代	町田 實賢	第十七代	永谷 清治
第三代	原 正忠	第十八代	松山 武平次
第四代	山本 信行	第十九代	池田 榮一郎
第五代	鎌田 宜正	第二十代	岡崎 武穂
第六代	渡部 之	第二十一代	齋藤 現
第七代	三浦 忠行	第二十二代	小野田 昌輔
第八代	竹中 謙輔	第二十三代	岸和田 精三
第九代	下江 孝	第二十四代	石橋 柯吉
第十代	中原 義信	第二十五代	林 吉彦
第十一代	大島 虎毅	第二十六代	上原 藤五郎
第十二代	信崎 喜代吉	第二十七代	二神 義治
第十三代	渡邊 桃溪	第二十八代	中野 正次
第十四代	清水 潔	第二十九代	下田 吉雄
第十五代	藤本 知良	第三十代	一色 留次郎
		第三十一代	小村 恒次郎

聯隊副官

第一代	徳久 蘇八	第十六代	堀 吉彦
第二代	福原 豊功	第十七代	齋藤 現
第三代	小島 政利	第十八代	深澤 友彦
第四代	塚本 勝嘉	第十九代	酒匂 宗次郎
第五代	八田 知行	第二十代	川浪 清吉
第六代	師岡 政宜	第二十一代	永井 繁太
第七代	香川 富太郎	第二十二代	吉田 長助
第八代	佐藤 常政	第二十三代	上原 藤五郎
第九代	澤井 直三郎	第二十四代	吉田 長助
第十代	堀江 不可止		
第十一代	三上 徳治		
第十二代	大島 虎毅		
第十三代	佐多 武彦		
第十四代	入江 伴吉		
第十五代	副島 一郎		

聯隊旗手

第一代 靜間 浩輔
 第二代 梅澤 續
 第三代 大屋 善次郎
 第四代 神田 正富
 第五代 若生 愛
 第六代 川村 捨五郎
 第七代 大橋 利英
 第八代 渡邊 桃溪
 第九代 福島 知雄
 第十代 藤田 富世
 第十一代 鷗殿 輝長
 第十二代 術藤 金治
 第十三代 佐多 武彦
 第十四代 相良 權吉
 第十五代 早川 喜熊

第十六代 村岡 長太郎
 第十七代 吉岡 顛作
 第十八代 汾陽 光二
 第十九代 林 仙之
 第二十代 松永 榮耕
 第二十一代 石丸 志都磨
 第二十二代 野田 三藏
 第二十三代 古川 三郎
 第二十四代 香月 清司
 第二十五代 友野 清盛
 第二十六代 大谷 龜藏
 第二十七代 吉田 長助
 第二十八代 川浪 清吉
 第二十九代 牧 隆八
 第三十代 松下 榮助
 第三十一代 池上 賢吉

第三十二代 橫山 貞槌
 第三十三代 竹原 三郎
 第三十四代 青木 成一
 第三十五代 植松 四郎
 第三十六代 牧野 文雄
 第三十七代 坪島 文雄
 第三十八代 廣間 正
 第三十九代 河喜多 藤基
 第四十代 露口 同

第一中隊長

第一代 福原 豊功
 第二代 隈岡 長道
 第三代 夏目 均
 第四代 川上 親賢
 第五代 富永 政利
 第六代 香川 富太郎
 第七代 今津 利馬
 第八代 生田 清範
 第九代 島谷 曠
 第十代 帖佐 長吉
 第十一代 山本 芳輔
 第十二代 石坂 三成
 第十三代 朝長 芳夫
 第十四代 前野 實
 第十五代 牧 隆八

第十六代

谷 二郎

第二中隊長

第一代 粟屋 充藏
 第二代 沼田 尙庸
 第三代 佐藤 常政
 第四代 原 正忠
 第五代 原 則義
 第六代 小澤 德平
 第七代 佐波 隆三郎
 第八代 中田 秀實
 第九代 渡邊 桃溪
 第十代 大石 正之
 第十一代 酒井 勇
 第十二代 古川 三郎
 第十三代 石坂 三成
 第十四代 吉田 長助
 第十五代 園山 光藏

第十六代 千田 貞雄
第十七代 竹原 三郎

第三中隊長
第一代 隈岡 長道
第二代 塚本 勝嘉
第三代 川上 親賢
第四代 富永 政利
第五代 夏目 均
第六代 中山 充藏
第七代 別府 忠純
第八代 松丸 熊夫
第九代 湯川 政隆
第十代 吉田 筵
第十一代 小山 理信
第十二代 阿部 宗三
第十三代 關口 環
第十四代 中村 清
第十五代 生田 純

第十六代 丸山 祐四郎
第十七代 齋藤 現
第十八代 古川 三郎
第十九代 齋藤 安貞
第二十代 佐澤 岩熊
第二十一代 長野 篤敬
第二十二代 友野 盛
第二十三代 迎 專八
第二十四代 成合 保治
第二十五代 嘉悅 友次
第二十六代 大村 篤
第二十七代 古賀用六 解散

第四中隊長
第一代 夏目 尙句
第二代 沼田 尙庸
第三代 原 則義
第四代 石島 壽平
第五代 相良 行政
第六代 堀江 不可止
第七代 莊司 平三郎
第八代 近藤 政敏
第九代 佐伯 範之
第十代 武井 信光
第十一代 大橋 利英
第十二代 谷村 定規
第十三代 家長 直太郎
第十四代 貴島 尙武
第十五代 宮脇 幸人

第十六代 木村 恒夫
第十七代 甲斐 恒喜
第十八代 高野 正夫
第十九代 春日 博章
第二十代 池上 賢吉
第二十一代 藤田 宏
第二十二代 下田 典三

第五中隊長
第一代 莊司 恒胤
第二代 宮崎 定毅
第三代 古庄 幹之
第四代 木下 勝全
第五代 山田 積之
第六代 丸子 方
第七代 山本 登喜次
第八代 勝見 有庸
第九代 生田 清範
第十代 武井 信光
第十一代 成富 利武
第十二代 佐田 泰一
第十三代 勝見 有庸
第十四代 佐多 武彦
第十五代 關口 環

第十六代 綾部 傳一郎
 第十七代 林 仙之
 第十八代 江里口 清一
 第十九代 吉原 泰一
 第二十代 深澤 友彦
 第二十一代 土井 知清
 第二十二代 渡邊 勉
 第二十三代 江口 又男
 第二十四代 吉嶺 嘉内
 第二十五代 川浪 清吉
 第二十六代 皆田 藤七郎
 第二十七代 緒方 利男
 第二十八代 我妻 吉郎
 第二十九代 村上 彦人

第六中隊長
 第一代 井上 孟一
 第二代 今橋 知勝
 第三代 平塚 知正
 第四代 黒萩 重和
 第五代 栗屋 信純
 第六代 世良田 彌
 第七代 藤田 富世
 第八代 關口 環
 第九代 阿部 宗三
 第十代 大島 虎毅
 第十一代 伊藤 益見
 第十二代 吉田 録郎
 第十三代 村田 長太郎
 第十四代 小宮山 榮助
 第十五代 堀ノ内 一

第十六代 石丸 志都磨
 第十七代 香月 清司
 第十八代 永吉 實覃
 第十九代 皆田 藤七郎
 第二十代 小山 武夫
 第二十一代 緒方 利男
 第二十二代 牧野 智博

第七中隊長
 第一代 隈岡 長道
 第二代 平佐 良藏
 第三代 八田 知行
 第四代 黒萩 重和
 第五代 池永 柔遊
 第六代 平塚 知正
 第七代 鷯野 曹好
 第八代 乃木 精之
 第九代 松井 信英
 第十代 三木 正記
 第十一代 中野 養和
 第十二代 原田 齋治郎
 第十三代 伊東 文雄
 第十四代 酒匂 宗次郎
 第十五代 池田 武

第十六代 隈部 七十二
 第十七代 福永兼吉 解散

第八中隊長
 第一代 佐竹 廣命
 第二代 池永 柔遊
 第三代 黒萩 重和
 第四代 安村 範雄
 第五代 中村 正雄
 第六代 相良 行政
 第七代 沼田 九八郎
 第八代 三上 徳治
 第九代 田尻 愛種
 第十代 田尻 繁治
 第十一代 入江 伊吉
 第十二代 松永 榮耕
 第十三代 小田 常記
 第十四代 永松 三郎
 第十五代 東 幹

第十六代 古賀 用六
 第十七代 若月 清一
 第十八代 高野 正夫
 第十九代 片山 謙

第九中隊長
 第一代 寺内 清祐
 第二代 池永 柔遊
 第三代 益田 照遠
 第四代 齋藤 太郎
 第五代 松田 滿信
 第六代 松田 忠之
 第七代 佐藤 常政
 第八代 門司 正人
 第九代 多賀谷 正輔
 第十代 田尻 愛種
 第十一代 渡邊 桃溪
 第十二代 島谷 曠
 第十三代 鈴木 直義
 第十四代 安岡 正
 第十五代 佐澤 岩熊

第十六代 永谷 清治
 第十七代 貝塚 豐藏
 第十八代 江里口 精一
 第十九代 齋藤 安貞
 第二十代 大谷 龜藏
 第二十一代 中釜 早一郎
 第二十二代 神永 兼吉
 第二十三代 山形 元重
 第二十四代 横山 貞槌

第十中隊長
 第一代 渡邊 幸正
 第二代 佐竹 廣命
 第三代 佐藤 義方
 第四代 久芳 光直
 第五代 多賀谷 正輔
 第六代 黒萩 重和
 第七代 大橋 利英
 第八代 習田 熊吉
 第九代 副島 一郎
 第十代 生源寺 康禧
 第十一代 太田 透
 第十二代 高野 正夫
 第十三代 大谷 龜藏
 第十四代 渡邊 勉
 第十五代 横山 貞槌 解散

第十一中隊長
 第一代 堀 正 施
 第二代 松田 滿信
 第三代 松本 正彦
 第四代 門司 正人
 第五代 大石 良弼
 第六代 澤井 直三郎
 第七代 生田 清範
 第八代 石黒 千久馬
 第九代 江橋 貞雄
 第十代 津田 正富
 第十一代 下村 勝成
 第十二代 不破 太郎七
 第十三代 汾陽 光二
 第十四代 堀 吉彦
 第十五代 野田 三藏

第十六代 伊東 益雄
 第十七代 山本 芳輔
 第十八代 深澤 友彦
 第十九代 大谷 龜藏
 第二十代 井上 敬太郎
 第二十一代 永井 繁太
 第二十二代 津田 辰參
 第二十三代 幾岡 成之
 第二十四代 北川 貞喜

第十二中隊

第一代	三木 一
第二代	益田 照遠
第三代	渡邊 幸正
第四代	松本 正彦
第五代	井上 東一
第六代	町田 實賢
第七代	中村 無一
第八代	永谷 信玄
第九代	鈴木 直義
第十代	大島 鯉三郎
第十一代	星村 市平
第十二代	河俣 祐之助
第十三代	有富 親義

機關銃隊長

第一代	甲斐 恒喜
第二代	高野 正夫
第三代	藤田 宏

年表

明治八年

四月十五日	熊本鎮臺歩兵第二十五大隊を基本として歩兵第十三聯隊を編成(二大隊編制)熊本城四ノ丸に屯在	同 月廿八日	秋月の亂起り、二中隊を久留米に派して警戒す
九月九日	宮中に於て軍旗を授與せらる	同 月十五日	西郷隆盛、私學校生徒及舊兵隊萬五千を率ゐて鹿兒島出發北上す
十月六日	山崎練兵場に於て軍旗傳授式舉行	同 月十九日	賊徒征討の大詔煥發せらる
十一月十五日	陸軍少將東伏見宮嘉彰親王殿下諸將檢閱		熊本城一部の出火天守臺及バ糧、全部を焼失し城外民家に延焼す
同 九年		同 月廿一日	小倉歩兵第十四聯隊の一部入城す
四月十五日	第三大隊増設	同 月廿一日	賊匪熊本城を包圍す
十月廿四日	城南御花畑齋細川邸に分屯 夜半神風黨の變起り、暴徒兵營及聯隊長の宅を奇襲す 聯隊長負傷し軍旗一時敵手に落つ 勇卒隈部幸作軍旗を奪還、佐武中尉奉護中負傷して軍旗鮮血に染む 午前二時全く暴徒を撃退す	同 月廿二日	聯隊長與倉中佐負傷(同夜傷死す)
		三月十一日より十三日まで	城兵出撃段山を攻め激戦三日遂に之を占領す
同 月廿五日		四月九日	奥少佐(保鑣)決死隊を率ゐ、重圍を突破し、宇土に到り救援軍と連絡す

同 月十五日 救援軍、賊圍を破して入城す
 同 月二十日 以後官軍は總追擊に移り、聯隊は軍の最右翼となりて進撃
 徳軍、三田井、竹田、白杵、赤松崎、可愛嶽等に戦戦す
 九月廿四日 城山總突撃
 聯隊(第一大隊缺)之に参加す
 十月六日 熊本に凱旋す
 同 十五年
 八月三日 動員下令
 同 月十日 充員完結、福岡に到りて待命
 九月四日 應念令解除
 同 十九年
 一月十日 第一大隊第一中隊對島に分遣
 五月二十日 第二大隊第一中隊琉球に分遣
 同 月同日 歩兵第十一旅團の編制に入る
 六月九日 第一大隊第一中隊對島より歸還
 同 二十年
 五月 第三大隊第一中隊沖繩に分遣
 同 二十一年
 五月二日 第二中隊を第九中隊と交代沖繩へ分遣
 同 月十二日 熊本鎮臺を第六師團と改稱
 同 二十二年
 五月廿九日 第二中隊沖繩より歸還
 同 二十三年
 五月十九日 筑十中隊沖繩へ分遣
 十二月八日 北白川宮能久親王殿下第六師團長に補せられ同月廿九日着任し給ふ
 同 二十七年
 五月八日 米田侍從勳を奉じ警内巡視
 同 月廿一日 第十中隊、沖繩より歸還
 七月廿四日 動員下令
 八月一日 清國に對し宣戰布告
 十月廿三日 屯營出發福岡に到り待命
 十二月廿九日 第二軍戰開序列を命ぜられ、廿一日福岡出發

同 二十八年
 一月二日 小倉に集結
 同 月十二日 小倉出發、同日門司出帆。十五日大連灣に到着、二十二日同灣解纜
 同 月廿三日 山東省榮城灣龍洞に上陸
 同 月廿八日 威海衛陸面砲臺總攻撃
 聯隊は摩天嶺砲臺及揚峰嶺砲臺を攻略
 以後虎山附近に駐留
 二月一日 北洋艦隊降伏、丁汝昌自盡す
 同 月十二日 旅順口に集中
 同 月十七日 講和條約成る
 同 月廿一日 平和克復の大詔煥發
 五月十日 遼東半島還附の詔勅公布
 同 月十三日 陸海軍人に勅諭を賜ふ
 同 月十七日 第二軍戰開序列を解かる
 九月二十日 第三大隊を威海衛に派す
 十一月下旬 旅順口出發、威海衛に渡航
 爾後同地の守備に任す
 同 二十九年
 六月五日 守備の任を了り威海衛出發
 同 月八日 屯營に凱旋
 同 三十年
 八月廿一日 第一大隊臺灣守備の爲出發
 十一月 特別大演習
 同 三十一年
 九月十日 第一大隊臺灣より歸營
 十月一日 爾後臺灣混成一中隊を年々交代派遣する事となり、第六大隊第一中隊として石光見に駐屯、守備に服務す
 十二月廿九日 恒春分遣隊土匪の重圍に陥る
 同 月廿一日 重圍を突破して救援軍と連絡す
 同 三十三年
 十月廿二日 皇太子殿下當兵營に行啓
 同 三十五年

同 月十五日	救援軍、賊圍を撃破して入城す
同 月二十日	以後官軍は總追撃に移り、聯隊は軍の最右翼となりて進撃 健軍、三田井、竹田、白杵、赤松崎、可愛嶽等に轉戦す
九 月廿四日	城山總突撃 聯隊(第一大隊缺)之に参加す
十 月六日	熊本に凱旋す
同 十五年	
八 月三日	動員下令
同 月十日	充員完結、福岡に到りて待命
九 月四日	應急令解除
同 十九年	
一 月十日	第一大隊第一中隊對島に分遣
五 月二十日	第二大隊第一中隊琉球に分遣
同 月同日	歩兵第十一旅團の編制に入る
六 月九日	第一大隊第一中隊對島より歸還
同 二十年	
五 月	第三大隊第一中隊沖繩に分遣
同 二十一年	
五 月二日	第二中隊を第九中隊と交代沖繩へ分遣
同 月十二日	熊本鎮臺を第六師團と改稱
同 二十二年	
五 月廿九日	第二中隊沖繩より歸還
同 二十三年	
五 月十九日	第十中隊沖繩へ分遣
十二月八日	北白川宮能久親王殿下第六師團長に補せられ同月廿九日着任し給ふ
同 二十七年	
五 月八日	米田侍從勅を奉じ警内巡視
同 月卅一日	第十中隊、沖繩より歸還
七 月廿四日	動員下令
八 月一日	清國に對し宣戰布告
十 月廿三日	屯營出發福岡に到り待命
十二月廿九日	第二軍戰團序列を命ぜられ、卅一日福岡出發

同 二十八年	
一 月二日	小倉に集結
同 月十二日	小倉出發、同日門司出帆。十五日大連灣に到着、二十二日同灣解纜
同 月廿三日	山東省榮城灣龍睡洞に上陸
同 月廿八日	威海衛陸面砲臺總攻撃 聯隊は摩天嶺砲臺及揚峰嶺砲臺を攻略 以後虎山附近に駐留
二 月一日	北洋艦隊降伏、丁汝昌自盡す
同 月十二日	旅順口に集中
同 月下旬	講和條約成る
四 月十七日	平和克復の大詔煥發
同 月廿一日	遼東半島還附の詔勅公布
五 月十日	陸軍軍人に勅諭を賜ふ
同 月十三日	第二軍戰團序列を解かる
同 月十七日	第三大隊を威海衛に派す
九 月二十日	旅順口出發、威海衛に渡航
十一月下旬	爾後同地の守備に任す
同 二十九年	
六 月五日	守備の任を了り威海衛出發
同 月八日	屯營に凱旋
同 三十年	
八 月卅一日	第一大隊臺灣守備の爲出發 臺北、大科坎に分屯
十一月	特別大演習
同 三十一年	
九 月十日	第一大隊臺灣より歸營
十 月一日	爾後臺灣混成一中隊を年々交代派遣する事となり、第六大隊第一中隊として石光見に駐屯、守備に服務す
十二月廿九日	恒春分遣隊土匪の重圍に陥る
同 月卅一日	重圍を突破して救援軍と連絡す
同 三十三年	
十月廿二日	皇太子殿下當兵營に行啓
同 三十五年	

五月廿一日 臺灣派遣隊、土匪の巢窟を襲ひ之を殲滅す

十一月十一日より十四日まで 特別大演習

同 三十七年

二月十日 露國に對し宣戰布告

五月十九日 動員下令

同 月廿六日 有栖川宮威仁親王殿下來營動員業務實視

同 月廿七日 動員完結

六月十二日 出征の目的を以て屯營出發

同 月十三日より十四日迄 長崎港出帆

同 月十七日より十八日まで 遼東半島三官廟(鹽大澳)に上陸

同 月二十日 劉家屯に達し第二軍の隷下に入る

七月八日より九日まで 蓋平附近の戦闘

同 月廿三日より廿五日まで 大石橋附近の戦闘

八月廿六日 遼陽附近の會戰

八月三十日 首山堡の強襲に参加し

同 月十六日 濱子街に前進、爾後同地に駐軍

同 月十五日 沙河附近の會戰

同 月十六日 十二日濱子街に奮戦し感狀を授與せらる

以後拉木屯附近に陣地を構成して滯陣

同 三十八年

一月一日 拉木屯西端丘上の一小家屋に陣中新年を迎ふ

二月十一日 恩賜の煙草、菓子を分配せらる

三月十一日 奉天附近の大會戰

同 月十一日 十日魚鱗堡附近に激戦す

十一日以後木廠附近に滯陣

同 月廿五日 第二軍を脱し第四軍戰鬥序列を命ぜらる

五月廿一日 開原附近に前進、第一線守備に任ず

九月十六日 正午以降休戦實施

十月十六日 平和克復の大詔煥發、同時陸海軍人に勅諭を下し賜ふ

同 三十九年

二月廿四日 宿營地出發

三月十日より十二日まで 屯營に凱旋

同 月十六日 復員完結

四月三十日 凱旋大觀兵式舉行。軍旗及代表隊參加

十月二十日 特命檢閱(乃木大將)

同 四十年

九月十一日 特命檢閱(川村大將)

同 四十一年

七月十二日より十四日まで 特命檢閱(黒木大將)

十月一日 屯營出發

同 月五日 龍山着

同 月十五日 より四十二年四月まで韓國守備

同 四十二年

一月十九日 侍從武官(山根中佐)來營 聖旨並恩賜品を傳達せらる

四月廿九日より三十日まで 駐屯地出發

五月三日より四日まで 屯營歸還

九月廿八日 師團名譽射擊施行。優勝旗及賞狀を授與さる

同 四十四年

五月九日より十日まで 特命檢閱(伏見大將宮)

十一月十一日より十四日まで 特別大演習

同 四十五年

四月二日 第八中隊朝鮮派遣

七月三十日 明治天皇崩御 今上天皇踐祚

大正元年

七月廿一日 陸海陸人に勅諭を下し賜ふ

九月十三日 明治天皇御大葬儀執行、軍旗及代表者參列

同 三年

四月十一日 皇太后崩御

同 月廿四日 第八中隊朝鮮より歸還

五月廿四日 昭憲皇太后御大葬、代表者參列

同月七日より八日まで 特命檢閲(川村元帥)
十一月廿五日 第七中隊中支那派遣(四年九月廿八日歸營)

同 四 年

二月五日 侍從武官(田中大佐)來營
九月十日 第四中隊中支那派遣(五年十月五日歸營)
十月十六日 御眞影拜受
十二月十日 御即位大禮、遙拜式舉行
十二月二日 大禮觀兵式舉行、軍旗及代表隊參列

同 五 年

二月廿九日 皇太子殿下御寫眞拜受
四月十四日 第六中隊新設步兵第七十八聯隊へ轉出
九月十四日 第十二中隊中支那派遣(六年十月九日歸營)
十一月十一日より十四日まで 特別大演習

同 六 年

四月廿三日 皇后陛下御寫眞拜受
五月廿五日 朝香宮鳩彦王殿下御來營

九月十七日 第二中隊中支那派遣(七年十月十二日歸營)

十二月一日 機關銃隊増設

同 七 年

四月一日 第六中隊補填編成
五月 特命檢閲(井口省吾)
九月廿一日 第十中隊、中支那派遣(八年十月二十日歸營)

同 八 年

九月廿八日 第五中隊、中支那派遣(九年十月歸營)

同 九 年

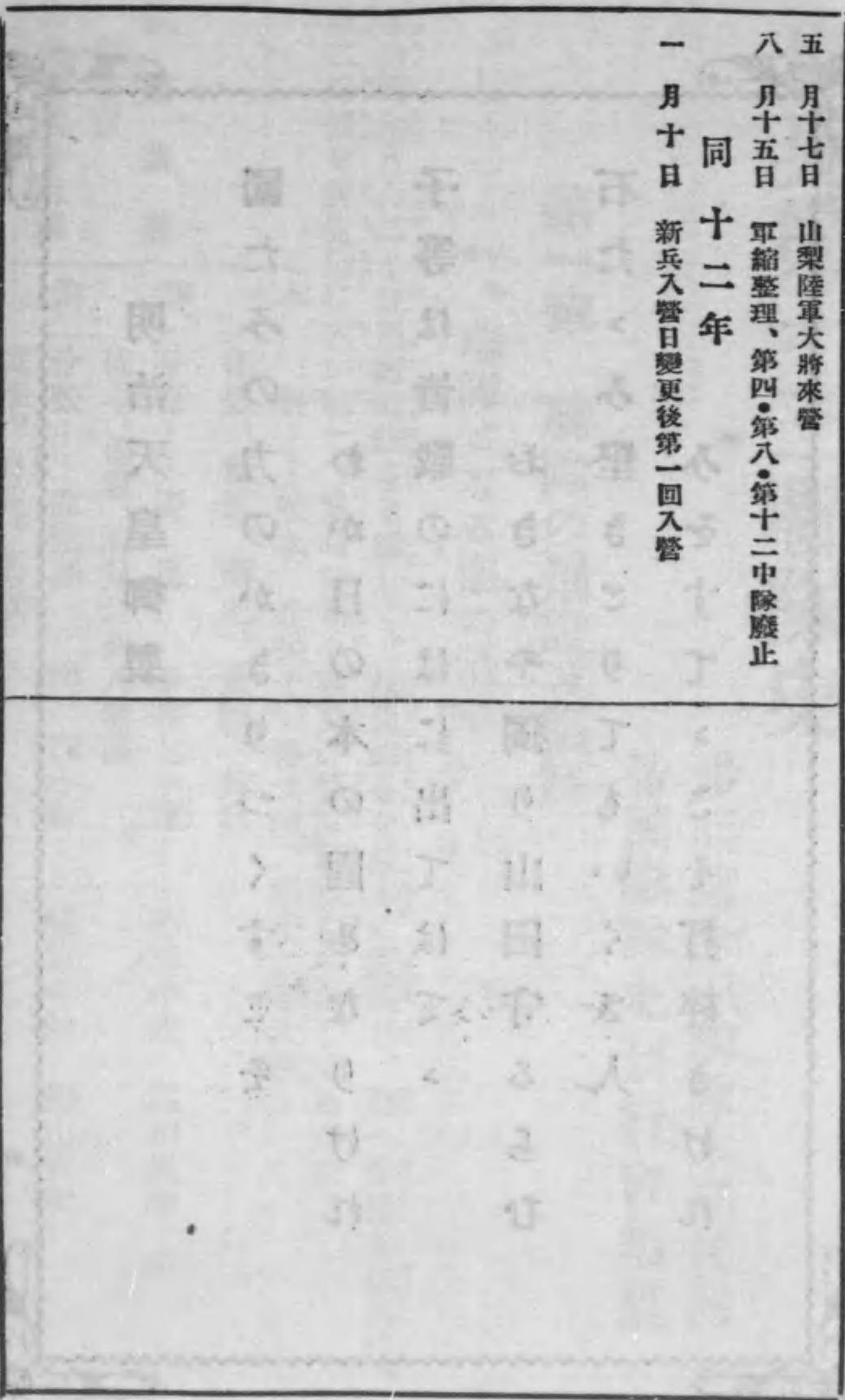
一月十三日 平和克復に付、勅諭を賜ふ
十一月十一日より十四日まで 特別大演習

同 十 年

三月三日 皇太子殿下御渡歐
九月三日 皇太子殿下御歸朝

同 十 一 年

五月十七日 山梨陸軍大將來營
八月十五日 軍縮整理、第四・第八・第十二中隊廢止
同 十二 年
一月十日 新兵入營日變更後第一回入營



明治天皇御製

國たみの力のかきりつくすこそ
わか日の本の固めなりけれ
子等は皆戦のにはに出てはて、
おきなや獨り山田守るらむ
石たゝみ堅きごりてもいくさ人
みをすてゝこそ打碎きけれ

歩兵第十三聯隊史

歩兵第十三聯隊本部校閱
帝國聯隊史刊行會編纂

第一章 聯隊の創設及編制

一、聯隊となる迄の沿革

明治四年八月二十日西海道鎮臺を廢して、鎮西鎮臺を熊本に設置し、第一分營を廣島に、第二分營を鹿兒島に置かれた。當時の司令官及び管區等は左の如くてあつた。

本營……熊本 歩兵十一番大隊、同十二番大隊
兩營、兩筑、兩肥、壹岐、對島

第一分營……廣島 歩兵七小隊……陸軍中佐 品川氏章

備中、備後、石見以西八箇國

第二分營……鹿兒島 同 四小隊……陸軍少佐 樺山資紀
薩摩、日向、大隅

鎮西鎮臺

司令官

兵部大丞井田讓

五年四月、陸軍少將桐野利秋鎮臺司令官に任せらる。

六年一月の改正(管六鎮臺)に依りて、鎮西鎮臺を熊本鎮臺と改め、之を熊本城に置き、小倉に營所を日田に分營を設け、何番大隊を第何大隊と改稱せらる。同年四月五日、陸軍少將谷干城代りて鎮臺司令長官となる。

同年五月二十一日、歩兵第九大隊大阪鎮臺の管轄を脱して當鎮臺の管轄に入り、七月歩兵第十二大隊を解隊して、第十一大隊の缺員を補ひ、殘員二百餘名を第十九大隊に編入す。

〔佐賀の役〕 七年二月十六日征韓論の巨魁前參議江藤新平等亂を起して、佐賀城を攻圍した。是より先き豫て佐賀地方不穩の形勢あるを以て、歩兵第十一大隊は岩村權令を護衛して、陸海二道より佐賀に進み、右半大隊(指揮官大尉山城清三)は陸路よりし、左半大隊(指揮官大尉和馬)は海路を取り十五日權令と共に若津に上陸して、直ちに佐賀城に入った。而して賊徒の攻圍を受くるや、糧食、彈藥は直ちに竭き、應援隊も來らざるを以て、十八日圍みを突き、出で、筑後府中に退き、右半大隊と合した。十九日東京、大阪よりの増援隊到着したるを以て、之れと共に前進して轟木、神崎、蓮池に轉戦し、三月一日佐賀全く平定す。仍て右半大隊佐賀に駐まり、左半大隊は熊本に凱旋した。

〔征臺の役〕

七年四月征臺の役起り、西郷中將(從)征討總督を谷少將(干)臺灣蕃地事務參軍を命ぜられ、熊本鎮臺の歩兵第十九大隊遠征軍に編入せられて、同月十六日熊本出發臺灣に向つた。五月生蕃と石門に戦つて之を攻略した。八月以後大阪鎮臺歩兵第二十二大隊東京鎮臺歩兵第十一大隊等相次で熊本鎮臺に配屬せられ、熊本鎮臺歩兵第十一大隊と共に逐次臺灣に出征した。

七年八月二十九日、新徵兵令に依りて召集せられたる壯丁を以て、歩兵第二十五、同第二十六大隊を編成せられた。此際編成せられたる歩兵第二十五大隊こそ、後日吾が聯隊編成の基本隊となつたものである。

同年十一月清國と和議成り、臺灣出征隊は相次で内地に凱旋した。

二、聯隊の創設

明治八年三月二十七日、歩兵第二十五大隊の下士以下を二分し、之れに新たに徵集せる新兵を配屬し、尙ほ曩に解隊(三月)せる歩兵第十一、第十九大隊の下士若干を編入して歩兵二個大隊を編成して四月十五日に至り編成全く成り之を「歩兵第十三聯隊」と稱し、陸軍中

十月六日山崎練兵場に於て、軍旗拜受式を舉行せらる。乃ち鎮臺司令長官野津鎮雄中央に位置し、聯隊整列の面前にて、左記勅語を奉讀して軍旗を聯隊長與倉中佐に授く。

勅語
歩兵第十三聯隊編制成ルヲ告ク
仍テ今軍旗一旒ヲ授ク汝軍人等協心同力シテ益々威武ヲ宣揚シ以テ國家ヲ保護セヨ
聯隊長は軍旗を拜受し旗手靜間少尉をして捧持せしめて左の如く奉答す。

答
謹テ明勅ヲ奉ス 臣等死力ヲ竭シ誓テ國家ヲ保護セン
歩兵第十三聯隊長 陸軍中佐 與倉 知實

式終つて、聯隊は軍旗に對し分列を行ふ。
是日聯隊長は全員を營庭に集め、左の訓示をなす

軍旗拜受に付訓示

（勅語及奉答の全文朗讀）
嗚呼汝等諸子ヨ、幸ニ當聯隊創設ノ日ニ際シ、諸子ト共ニ職ヲ此ノ聯隊ニ奉ズルヲ以テ、斯ク尊キ聖勅ヲ蒙ルヲ得タリ、是レ實ニ千載ノ一遇ニシテ誰カ感激興起セザルモノアラシヤ、自今以後益々職務ニ勉勵シ、軍紀ヲ確守シ、風紀ヲ慎ミ、志操ヲ鞏固ニシ、忠勇ヲ奮ヒ、以テ我カ軍旗ノ光榮ヲ輝カスベシ。

吾等各々生命ヲ托スルモノハ軍旗ナリ、諸子ト俱ニ愛敬セザルヘカラズ。腦蓋ヲ碎キ、胸膈ヲ破ルトモ之ヲ保護シ、以テ本日ノ聖勅ニ答ヘ奉ラズンバアルベカラズ。
知實感激ノ至リニ堪ヘズ、一片ノ精神ヲ汝等諸子ニ告グ、諸子誠忠國家ニ奉ズベシ。
明治天皇御製

ますらをに旗をさつけて思ふかな

日の本の名をかゝやかすへく

四、旅・師團の編制

明治十九年五月二十日、新設歩兵第二十三聯隊と共に、歩兵第十一旅團を編成す。
明治二十一年五月十二日、師團司令部條例を定められ、熊本鎮臺を第六師團と改めらる。乃ち當時の師團編成は左の如くであつた。〔衛戍地〕〔現所屬師團〕

歩兵第十一旅團 〔熊本〕 第六師團
歩兵第二十三聯隊 〔熊本〕 同 右

第六師團
歩兵第十二旅團 〔小倉〕 第十二師團
歩兵第十四聯隊 〔福岡〕 同 右

二十九年十二月、乃ち日清戦後に於ける軍備擴張の結果、小倉に第十二師團を新設せられ、従つて當師團管下に移動を生じ、歩兵第十二旅團は第十二師團に轉屬し、新たに歩兵第四十五、同第四十六聯隊を増設して之に代ふ。歩兵第十一旅團亦編成を改め、爾後聯隊は新設歩兵第四十五聯隊と姉妹となる。而して同聯隊の基幹たる將校下士卒は、悉く當聯隊より分つ所である。

歩兵第十一旅團 歩兵第十三聯隊 (熊本)
歩兵第四十五聯隊 (鹿兒島)

第六師團

歩兵第二十三旅團 歩兵第二十三聯隊 (熊本)
歩兵第四十六聯隊 (大村) (現今第十八師團ニ屬ス)

日露戦役の結果更に軍備擴張の必要に迫られ、明治四十年十月新たに第十八師團を久留米に増設せられ、同時歩兵第四十六聯隊は當師團を脱して第十八師團に轉屬し、代ふるに戦時中編成せられたる第十六師團歩兵第六十四聯隊の衛戍地を都の城に定めて、當師團に配屬せられた。茲に於て歩兵第四十五聯隊は當旅團を去り、聯隊は再び歩兵第二十三聯隊と共に、歩兵第十一旅團を編成する事となつた。

五、機關銃隊の増設

時勢の進運に連れて各歩兵隊に機關銃隊を増設せらるゝ事となり、大正六年十二月一日入營の初年兵六十二名に、各隊選抜の二年兵五十八名及び下士九名を配屬して、機關銃隊を編成す。之れ當師團下に於ける機關銃隊の嚆矢である。

機關銃隊 長、大尉 甲斐恒喜

附、中尉濱田直、中尉井上政廣、特務曹長鎌田藤一、下士卒百二十九名

銃數 六銃 馬匹 七頭

第二章 皇室と吾聯隊

一、緒言

皇室は日本の本の國の眞柱である。神の代此の方の歴史は、凡て皇室を本としてゐる。皇室は億兆の宗家にして、天皇は國民の君父にまします。我が日本民族の原始は、伊弉諾伊弉册二尊に胚胎し、其後漸次繁殖して、大和島根に廣まりたることは、歴史の誨ふる所であつて、一點疑ふべき餘地はない。天照皇大神は此の二尊の御長子にして、且つ明德を備へ給ひたるが故に、他の御子孫を統治して、之に衣食住と忠孝の道とを教へ、各其處を得さしめ給ひたるより、始めて君臣の義を生じ、茲に皇室と國民の淵源を爲すに至れること、これ亦疑ふべくもない。

乃ち我々六千萬の日本民族は、畏くも皇室と其始祖を同じらする血族團體にして、皆二尊の後裔にあらざるはない。而して皇室は、其の中に於て最も純正潔白なる直系の御正統である。即ち天祖天照皇大神より皇宗神武天皇を経て、萬世一系に傳はりたる唯一の御血統

である。我々日本民族は、其の傍系より漸次多葉に擴まつて行つた支統の又支族等である。世界の諸國は屢次革命を経て、王統を更へたるに拘らず、我々日本民族が、皇室を中心として鞏固なる團結を成せるは、恰も兒孫が父母の膝下に團欒して一家を成せると同じである。皇室と國民との關係は、偶然の成立でもなく、人爲の約束でもない、従つて人爲を以て解除し得べきものでもない。

斯の如くして、一百二十餘世、二千五百六十有餘年の久しき間、世々皇室の御恩徳に浴し、其の御稜威と御盛徳とに依つて、完全無缺に團結を保持し、外は數次海外に對して國威を發揚し、内は未曾て外國の爲に寸土を侵されたることがない。我々國民は千古に溯り、萬世に亙り、深く皇室を敬慕し、君に忠順なると同時に、天皇は民の心を以て其の心となし、至仁至愛の政を以て萬民を安んじ給ふ。仁徳天皇は「民の貧しきは朕の貧しき也、民の富めるは朕の富めるなり」と宣ひ、明治天皇は「天下億兆一人も其の所を得ざる時は皆朕が罪なれば」と仰せ下さる。畏き哉帝徳昭々乎として日月と其の光を同じうす。

皇室と國民との關係已に斯くの如し。而して軍隊に至つては、就中最も密接なる關係を有つてゐる。即ち、勅諭の中に「朕ハ汝等ノ大元帥ナルゾ」と仰せられ、又「朕ハ汝等ヲ

股肱ト頼ム』と宣はせられてゐる。誠に畏れ多き申様ではあるが、天皇陛下は頭首にして我々は其の手足である。

聯隊の編成略ぼ成るや、軍旗を視ること尙ほ朕を視る如くせよと仰せられて、御手づから軍旗を授けられた。即ち軍旗は陛下の御臨隊を代表せらるるものである。外國に於ては軍旗は天の神から授けらると爲されてゐるが、我國に於ては天皇陛下より授けられるのであつて、此點だけでも、外國の軍隊と日本の軍隊とは、大に其の趣を異にしてゐる。此の外、事ある毎に、我々軍人が皇室より受くる御殊遇は指を屈するに違なき有様であつて、以下掲ぐる所の記事の如きも、皇室と軍隊との密接なる關係を證する一二の實例に過ぎないのである。

二、御名親署の勅諭

明治十五年一月四日、陸海軍人に勅諭を下し給ふ。是れ所謂我等が『軍人勅諭』と稱し、夢寐の間も忘るることなき、軍人精神の大綱を示されたものである。後右勅諭書に御名を親署あらせられ、御璽を鈐して當聯隊に御下賜あらせられた。

今上陛下御踐祚あらせらるるや、復た特に勅諭を陸海軍人に賜ひ、尋で大正三年三月九日右勅諭書に御名を親署あらせられ、御璽を鈐して當聯隊に御下賜あらせられた。大元帥陛下が毎に軍人を親愛し給ふことの深厚なる、誠に感激に堪へぬ次第である。

三、御殊遇の一斑

勅諭の中に『朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるべき』と聖諭莊嚴にして、軍人を鍾愛せらるゝの御意靄然として言辭の外に溢れてゐる。西南の役を始め日清、日露の兩戦に出征中、天皇皇后兩陛下竝に皇太子殿下には、屢次侍從武官侍醫及び東宮武官等を戦地に差遣せられて、其の情況を視察せしめ、優渥なる聖旨、令旨に併せて清酒、煙草、菓子(傷病者に)等の恩賜あり、負傷者には繃帶、義眼、義手足等を賜はりたることは、夫々其の條下に拜記の通りであつて、此の外特別大演習或ひは大觀兵式等に參加の場合には、休暇、酒饌(又は酒)等を賜はるを恒例と遊ばさるゝなど、事有る毎に御殊遇を辱うすること、殆んど枚擧に遑なく、而して是皆、身軍籍に在るの故に忝うし得る無上の光榮であつて、一般國民としては容易に享有し難き所である。

地震を御軫念あらせられて

明治二十二年七月二十八日午後十一時四十分、熊本地方に大地震ありて、營内に於ても處處破損するに至つた。陛下深く之を御軫念あらせられ、特に勅使として富小路侍従を差遣せらる。乃ち侍従は聯隊長(長谷川)より當夜の状況を聴取し、尙ほ營内の實況を視察して、具さに復奏した。

韓國派遣中の勞苦を思召されて

明治四十三年一月十九日、乃ち聯隊が韓國の守備に服務中、其の勞苦を思召され狀況視察として侍従武官山根歩兵中佐(貫)を龍山兵營に御差遣あらせられ、將校同相當官全部將校集會所に參集し、軍司令官竝に師團長も列席の上、謹んで左記御沙汰を傳へられた。

御沙汰

天皇陛下ニハ在韓守備隊ノ勤務、演習、教育殊ニ暴徒討伐ノ勞苦ヲ思召サレ小官ニ親シク情況ヲ視察シ來タレトノ御沙汰デアリマス、又

皇后陛下ヨリハ衛生情態ヲ視察シ、各自益々自愛スル様申傳へヨトノ御沙汰デアリマス而シテ 兩陛下ヨリ將校以下一般ニ酒肴料ヲ、傷病者ニ菓子料ヲ下賜セラレマシタ

茲ニ謹ンデ御沙汰ヲ傳達致シマス
聯隊長 恐懼 措く處を知らず、謹んで奉答して曰く、

奉 答

唯今ハ難有キ御沙汰ヲ拜承シ感激ノ至リニ堪ヘズ、益々奮勵聖慮ニ酬イ奉ランコトヲ期シマス

茲ニ 謹デ各隊ヲ代表シ御答申上グ

右終つて侍従武官は兵舎、炊事場、將校官舎(第三)等を巡視せらる。

平時ノ教育ヲ思召サレテ

大正四年二月五日、侍従武官田中騎兵大佐(重)師團司令部に於て、團下各部隊長に對し、

御沙汰

天皇陛下ヨリ第六師團管下ノ狀況ヲ視察シテ來ヨトノ御沙汰ガアリマシタ

と傳達せられ、次で同日午前十時當聯隊に來營、將校集會所にて、聯隊長の狀況報告を聴取したる後、

第三、第八中隊の初年兵教育

第一大隊(第三中隊)二年兵の教育

第三大隊及第五中隊の兵舎

等を實視せらる。陛下の大御心を軍事に傾けさせらるゝ事の深き、今更ならねども、感激に堪へぬ次第である。

四、皇太子殿下啓

明治三十三年十月三十一日

皇太子嘉仁親王殿下熊本に行啓あらせられ、同日午後五時御思召に依り、御旅館熊本偕行社に於て、熊本衛戍諸隊將校下士卒の競技を台覧あらせらる。翌二十二日渡鹿練兵場にて、諸隊の練兵を台覧の後、午前十一時親しく當聯隊に行啓あらせられ、將校集會所貴賓室にて御休憩の間、聯隊長(松居)玉顔に咫尺して、明治九年神風黨の變及び明治十年籠城の戦況を御説明申上げたるに、御機嫌殊の外麗しく御歸還あらせられた。記念として當聯隊將校團に銀盃一個を下賜せられた。

五、御大喪と御踐祚

明治四十五年七月十四日以来、天皇陛下御不例に渡らせらるゝ趣、同月二十一日師團司令部を経て通達せられ、同二十二日取敢ず聯隊長は中村侍從武官長、香川皇后宮太夫、村木東宮武官長宛電報を以て、御機嫌を奉伺し、二十五日以後は酒保に於ける酒類の販賣を禁止し、只管謹慎して御惱の速かに御平癒あらせられむことを祈り奉りたるに、二十八日に至り御重態に渡らせらるゝとの通報に接し、恐懼措く所を知らず、夜中ながら(午後十一時)聯隊長は部下を代表して再び、

天皇陛下御容態御大切ニアラセラル、趣恐懼ニ堪ヘズ

謹テ天機ヲ伺ヒ奉ル

右執奏ヲ乞フ(侍從武官長宛)

同 文(皇后宮太夫宛)

同 文(東宮武官長宛)

電報を以て天機並に御機嫌を奉伺す。

七月三十日 天皇陛下崩御あらせらる。聯隊長は同日午前十時全員を營庭に整列せしめ、軍旗を奉迎して、一同に左の告示を爲す。

告 詞

天皇陛下ニハ畏クモ去ル十四日ヨリ御不例ニ渡ラセラレシガ漸次御大切ニ涉ラセラレ本日午前零時四十三分崩御アラセラル、恐懼ノ至リニ堪ヘズ、我々ハ今後御在世中ノコトヲ常ニ心ニ留メテ益々奮勵努力、以テ在天ノ御神靈ニ報イ奉ラザルヘカラズ終つて御眞影を奉安して逐次參拜、御告別申上ぐ。是日より營門に喪旗を掲げ、軍旗及び喇叭に喪章を附す。

三十一日より五日間廢朝仰出さる。(然し乍ら廢朝中と雖ども、徒らに練兵を休止するは聖旨に副ふ所以にあらずとなし、野外演習、喇叭の吹奏、營内居住者の外出、酒保に於ける飲食品の販賣等を禁止したる外、謹慎の意を缺かざる限りに於て、日々の勤務及び演習を實施した。)

明治天皇崩御と共に、皇太子嘉仁親王殿下御踐祚あらせられ、七月三十日午前一時賢所祭典竝に劍璽渡御の儀式を行はせられた。

七月三十一日『大正』と改元、同日朝見式に次で大詔を煥發せられ、尙ほ陸海軍人に對しては特に、勅諭を下し給ふ。

八月五日、營庭に於て 勅諭傳達式を行ふ。

九月十三日東京 青山 練兵場に於て、大行天皇御大葬儀執行につき、左記諸員は聯隊を代表し、軍旗を奉護して 上京 參列の光榮に浴す(軍旗は滯京中近衛歩兵第)

聯隊長(大佐)五十弘君太郎。(少佐)木藤彌太郎。(大尉)星村市平。(中尉)石坂三成。旗手(少尉)池ノ上賢吉。(特務曹長)柴田正。(曹長)後藤恒喜。(上等兵)古藤貞一。旗護兵 五名

爾餘の諸員は、當夜營庭に神籬を設け、篝火を焚き、午後八時靈柩宮城御發引の時刻を期して、晴氣中佐指揮の下に東都に面して遙拜の式を執行す。此の間喇叭は三度『哀の極』を吹奏し、永き御別れを告げ奉つたのである。

六、昭憲皇太后御大喪

大正三年四月九日沼津御用邸に行啓中の皇太后陛下御重態に渡らせらる、旨の通報に接し一同恐懼に堪へず、行軍・射撃・喇叭の演習を止め、只管謹慎の意を表して御惱平癒を祈り

奉りたる効なく、翌十日陛下には御重態の儘東京に還御あらせられ、十一日午前二時十分青山御所に於て崩御あらせらる。
聯隊長は部下一同を代表し、侍従武官長、皇后宮大夫、東宮武官長宛電報を以て、兩陛下並に皇太子殿下の御機嫌を奉伺し、同日午後六時營庭に於て遙拜式を行ふ。乃ち各隊は東面の縦隊横隊の一線に整列し、軍旗を奉迎したる後、皇太后陛下崩御につき告示を爲し、(告詞は明治天皇崩御)次で御寫眞を奉拜す。
其の他謹慎哀悼の意を表し、又大喪に服すること、明治天皇御登遐の際に同じ。
五月二十四日東京代々木原に於て、大葬儀執行に就き、左記諸員は聯隊を代表して上京参列し、

聯隊長(大佐)山崎義重。(少佐)松木直亮。(大尉)生源寺康禧。(中尉)太田透。(特務曹長)井上常次郎。(曹長)加來喜代次。(上等兵)山木政雄。

爾餘の諸員は當夜八時營庭に神籬を設けて遙拜式を行ふこと、是れ亦明治天皇御大葬の際に同じ。

七、御即位大禮並大觀兵式

大正四年十一月十日 今上天皇陛下京都御所に於て、御即位の大禮を行はせらる。是日聯隊は奉祝の意を表する爲、營門及び營内に清楚なる裝飾を施し、午後二時營庭に東面して重複縦隊の一線に整列し、左の儀式を行ふ。

敬禮 陸軍禮式第五十四條に依り高御座方向に對し敬禮(君ケ代三回吹奏)

勅諭奉讀 明治十五年一月並大正元年七月下し給へるもの

萬歲奉唱 午後三時三十分、聯隊長發聲にて三唱す

御眞影奉拜 將校集會所貴賓室に奉安、順次参拜

同日、十四日及び十六日は一般休業して奉祝の意を表す。

尚ほ十六日は大饗第一日の御儀式を行はせられ、曹長同相當官以上に對しては、熊本借行社に於て饗饌を賜はり、軍曹同相當官以下兵卒に對しては、酒饌料を下賜せられた。

越て十二月二日、東京青山練兵場に於て大禮大觀兵式を舉行せらる。乃ち聯隊に於ては代表隊を編成し、

聯隊長(大佐)佐多武彦。聯隊附(中佐)谷村定規。大隊長(少佐)横山榮治。中隊長(大尉)齋藤安貞。中隊附(中尉)江口又男。同(少尉)彌富覺次。旗手(少尉)植松操。(特務曹長)木村直記。下士以下 七十五名
軍旗を捧持して上京参加の光榮を擔ふ。實に振古未曾有の盛儀にして、龍顏殊の外麗しく、左の勅語を賜ふ。

勅語

朕即位ノ大禮ヲ訖リ茲ニ親シク觀兵ノ式ヲ行ヒ帝國陸軍ノ綱紀張リ威容整ヘルヲ視テ深ク之ヲ嘉ス
汝將卒益々奮勵シ以テ報効ヲ期セヨ
參列者一同に對しては酒饌料を下賜せられた。

八、御眞影及御寫眞拜受

大正四年より同六年に亙り、左記の如く御眞影及び御寫眞を當聯隊に御下附あらせらる。謹んで拜受し、奉戴式を施行したる後、奉安所に奉納す。

御眞影 大正四年十月十六日

皇后陛下御寫眞 同 六年二月二十九日
皇太子殿下御寫眞 同 五年四月二十三日

九、皇太子殿下啓

皇太子殿下裕仁親王殿下には大正九年四月一日師團司令部に行啓被遊、將校一同奉迎拜謁を賜ひ、聯隊長大島大佐は歩兵第十三聯隊歴史寫眞帖を献上し奉りしに殿下には御嘉納あらせられ聯隊長は御下賜品を拜受するの光榮に浴した。此寫眞帖は明治九、十兩年に於ける歴史の一部を調査蒐録し其跡を寫したるもので、乃ち本誌巻頭に掲出しあるものである。當日聯隊は行啓を辱うするを得ざりしも營庭の中央に楠樹御分植の榮を得たれば茲に一碑を建設して之を將來に傳ふることとした。

十、朝香宮殿下御成

陸軍歩兵大尉朝香宮鳩彦王殿下には、動員事務御視察の目的を以て、大正六年五月二十三日熊本市に成らせられ、市公會堂に御投宿中、同月二十五日午前十一時御附武官を従へさ

せられて當聯隊に御來營あり、聯隊長以下營庭に整列して奉迎す。聯隊長先づ御前に出て明治九年神風黨の變に關する事歴を御説明申上げ、次で擊劍場に於て各隊將校下士卒の劍術仕合を御覽に供す。終つて將校集會所に於て、在熊現役上長官以下、各隊代表者及び在郷將校若干名に御陪食仰付けられ、午後二時御旅館に御歸還あらせられた。

第三章 神風黨の變

一、暴動の起因と其急襲

由來熊本は黨派を好み、黨派觀念の強き土地にて、明治初年の頃には夫々其の主義・學風・目的等に因つて學校黨・實學黨・勤王黨・民權黨の諸派が對立してゐた。勤王黨は後に至り進取を主義とする者と保守を旨とする者との二派に分れ、世人後者を呼んで「神風黨」と稱す。蓋し黨人悉く敬神無二の人士にして、苟くも事を爲すには先づ其旨を神に告げ、神慮を伺ふを以て、斯く名づくるに至つたのである。一言にして言へば偏狹なる國粹主義者の團體にして、明治維新以來、舊制度續々廢止せられ、海外の新文明輸入せられ、政治・教育を始め萬般の制度漸く一變せんとするを見て甚だ快からず、明治九年三月廢刀令の實施せらるゝに及んで、其の義憤は頂點に達し、遂に「君側の奸を誅す」と號して亂を企圖するに至つたのである。國學者太田黒伴雄を中心とし黨人百八十餘名、至誠を以て結合し、其黨議黨談は親子兄弟の間と雖も極秘に附し居たるを以て、官民

共に之を未然に偵知する者がなかつた。偶々十月下旬藤崎神社に『日本攘夷』と題する諷刺書を献じたる者ありて、時節柄世人の注目を惹き、縣官之れが探偵の結果同黨員の手に出でたる事を知つた。茲に於て黨人等隱謀の發覺せんことを恐れ、二十四日急に飛檄して同志を糾合し、疾風迅雷的に事を擧ぐるに至つたのである。

(同夜警部村上新九郎は神風黨の擧兵に就て情報を得て大に驚ろき、遽かに安岡縣令の邸に至り、小關參事等と謀り、明日を待つて一網打盡すべく、談議半ばにして早くも暴徒の急襲を受けたのである。)

十月二十四日夜暴徒等は、三々伍々、容を忍び身を潜めて藤崎神社(今の藤崎臺)附近の愛敬正元の家(今)に會し、相率ゐて藤崎神社に詣で、主魁太田黒伴雄軍令を神前に宣へ、將帥・參謀を命課し、各隊の攻撃部署を定めた。乃ち、

將帥 太田黒伴雄 加屋 霽堅
參謀 上野 堅吾 齋藤求三郎 愛敬 正元
攻撃部署
少將種田政明ノ邸ヲ襲フモノヲ第一隊トス

聯隊長與倉中佐ノ家ヲ襲フモノヲ第二隊トス
參謀長高島中佐(茂)砲術ノ開祖高島秋帆ノ子息ノ家ヲ襲フモノヲ第三隊トス
熊本縣令安岡良亮ヲ斬ルモノヲ第四隊トス
前八代縣知事太田黒惟信ヲ刺スモノヲ第五隊トス
砲兵營(今ノ輜重兵營附近)ヲ衝クモノヲ第六隊トス
此隊ハ即チ賊ノ中堅ニシテ太田黒・加屋ノ兩黨首軍神ヲ奉ジテ之ヲ指揮ス
歩兵營(我歩兵第十聯隊營)ヲ襲フモノヲ第七隊トス
花畑歩兵營(今ノ歩兵第二十三聯隊營ニシテ當時ノ第三大隊兵營)ヲ襲フモノヲ第八隊トス

二、營内の戦闘

十月二十四日午後十一時三十分、陰曆八日の弦月既に西山に落ちて、風死し人定まり、營内寂として、唯だ衛兵の咳聲時々此の寂寞を破ぶるのみ。突如として兵營の西門外に騒音起る。衛兵何事ならんと、星明りに透かし見る間もあらばこそ、賊の第七隊たる富永守國、吉海良作等の七十餘人、物をも言はず營内に侵入して來た。會々砲兵營の出火を報

ずる者あり、同時營内の各所に爆裂の音と共に黙々火光を發す。蓋し彼等爆筒を舍内に投じたのである。風紀衛兵喇叭手は直ちに非常號音を吹奏せんとしたが、一二聲にして一刀兩斷せられ、聯隊週番大尉福原豊功亦背部に重傷を負うて倒れた。各中隊は異變を知り、遽かに舍外に出て、整列せんとするや暴徒は已に西門側の彈藥庫を占領し、次で呐喊し刀、槍を揮つて整列中の各中隊を襲撃した。其の裝束、或ひは甲を冠るあり、或ひは烏帽子直垂を着る者あり、或ひは常服に短袴を穿ちて輕快を主とする者あり。異容異態を極むる中に、各自白布の小片に勝の字を黒書して左肩に着して相票とし、武器は刀、槍、長刀等、悉く白兵にして火器を携ふる者などは殆んど無かつた。事餘りに唐突なる上に四邊暗黒なる爲め、敵の兵力を知る能はず、我兵直ちに銃劍を以て防戦すと雖ども、死を決せる暴徒の亂撃なか／＼に當り難く、立所に多數の死傷者を出すに至つた。依つて一時舍内に退いて守らんとすれば、賊既に入口に在つて我を要撃し且つ聯隊本部及び第二大隊の第一・第二・第三中隊兵舎に火を放ち、炎々たる火焰と濛々たる黒煙とは營内を蔽ふ。此時第二大隊には一發の彈藥無く、殆んど策の出づる所を知らず、徒らに暴徒の怒號馳突に委し空しく兇刃に斃れ或ひは火焰裡に憤死した。第二大隊の第四中

隊(先の第八中隊のことなり、當時は中隊號は聯隊を通じ)の週番士官多羅尾少尉試補(今の見)は第二大隊の殘餘の兵を糾合して舍前の楠樹下に圓陣を作り銃劍を揮て奮戦したが長槍、薙刀を携へた賊の一群の爲に敗られ多羅尾少尉以下名譽の戦死を遂げた。吁亭々たるこの大楠、よ奇くもその昔楠氏が誠忠の餘薫に香りて今ここに我が忠勇なる先輩將士が奮戦最後の楯となつたのである。聯隊歴史の存せん限り永久に榮え行く常緑の色は、實に彼等將卒の鮮血に培はれて居るのである。銀杏城頭身を光輝ある我が歩兵第十三聯隊に奉じて護國の大任に就く將士よ。郷等が日夕この大楠の下を通るときは必ず仰いで一度は其常緑の色を賞し、伏しては二度先輩勇士が義血の餘瀝を忍べ。其間無言の中に絶大の教訓を享けるであらう。常緑の色は年々歳々愈々榮え榮えて行くのである。吁吾人は一度軍國急を傳ふるの朝には、この常緑の色よりも更に濃き且赤き誠の色を現して護國の大任を盡し以て聊か先輩勇士の靈に地下に相對するの覺悟がなくてはならぬ。「將士奮戦の跡」なる碑は小さい。即ち小なりと雖も吾人後輩が、先輩勇士の義烈を慕ふべく

精神的に之が永久の記念たらしむべく徹頭徹尾兵力を以て建設したものである。

第一大隊の各中隊は、幸ひに射撃用の残弾百餘發を有し、火力を以て防戦したるを以て、暴徒も容易に接近せず兵舎の焼失を免れた。

〔佐武中尉等の奮戦〕 中尉佐武廣命及び少尉試補沼田尙肅此夜各其寓にありたるが、營内に出火を聞き直ちに駆付くる途中、法華坂にて、敗兵十餘名三々伍々逃走し來たるに會し、始めて暴徒の來襲を知る。乃ち叱咤して敗兵を收容し、立どころに十有六名を得たるものゝ、一發の彈藥も無く、如何にすべきかと躊躇しある時、御用商人立山吉像なる者來りて、彈藥百八十發を贈つた。中尉以下勇躍奮進、佐武中尉は西裏門より、沼田少尉試補は南方非常門より、二隊に分れて突入し、巧みに暴徒を狙撃した。暴徒等不意の射撃に會ふて狼狽し、左右に散亂す。兩隊此の機に乗じて突進し、彈藥庫を奪還し、更に友岡・佐土原兩少尉の指揮する一隊と連絡した。

此時、負傷せる聯隊長與倉中佐、身を人夫にやつせる參謀兒玉少佐（源太郎、日露戦争）等、相前後して來會した。

〔第三大隊の來援〕 當時第三大隊は下馬橋（今の御幸）外御花畑に在つたが、其の屯營の舊藩

主居住の跡なりし爲、暴徒も稍や躊躇せるものゝ如く、其の行動他方面に比し活潑ならず、只三々伍々營外に在りて窺ふに過ぎなかつた。衛兵は直ちに之を撃退し、各中隊兵を整へて警戒しつゝある處に、大隊長心得小川大尉登營した。大尉乃ち直ちに斥候を各方面に派して偵察の結果、事態容易ならざるを知り、直ちに應援の爲め出動した。即ち小島中隊をして慶宅坂の暴徒（彼等の一隊山砲一門を奪ふて同所に備）を撃たしめ、北川中隊をして砲兵營に増援せしめ、自から第二・第三中隊を率ゐて鎮臺前に到り、種田少將及び高島參謀長の宅に各若干の兵を分遣し、其の主力を以て聯隊營内の暴徒を攻撃した。時に夜十二時。此際埋門の方向より、我が軍旗を擁して意氣揚々と進み來たる暴徒の一群があつた。（是れ與倉聯隊長邸を襲）小川大尉之を見て大に怒り、猛烈なる射撃を加ふるや散亂して營庭に走つた。大尉曰く、

『死を以て彼の軍旗を奪還せよ！』
と、一隊をして之を追撃せしめた。

三、軍旗の亡失及奪還

當夜の奇襲は、暴徒側より謂へば各隊其の功を奏したと言へる。乃ち砲兵營を燒きたるを
始めとして、司令長官 種田少將及び參謀長高島中佐を殺害し、縣令邸を襲へる者は安岡
縣令並に小關參事等を斬つて、而して其の第二隊は豫定の如く、京町 柳川町なる當聯隊
長與倉中佐邸を急襲した。其の頃軍旗は、毎に聯隊長自ら奉護の任に當る爲、聯隊長邸
に奉安せられてあつた。軍旗歩哨急に臨み單身能く奮闘すと雖ども、衆寡敵せず、漸次後
方に退詰められ、遂に脚を失して斷崖上より墜落した。聯隊長亦赤手を以て格闘の結果負
傷し、軍旗は一時暴徒の手に移つた。
軍旗を奪取した第三隊の徒は、之を翻して意氣揚々、轉じて我が兵營に侵入して第七隊と
合した。聯隊長與倉中佐は負傷せるにも拘らず、服裝を變じ名を伴りて屯營に潜入し、軍
旗を奪還すべく其の跡を追ふた。
第一大隊第三中隊に隈部幸作と云ふ勇卒があつた。中隊兵舎に在りて防戦中、賊徒の一人
我が軍旗を翻して同兵舎の窓下を通過するを認め、「是は實に由々敷き大事である」と、直ち

に舎内より手を伸べて之を取らんとし死力を竭して格闘の末、遂に軍旗を奪還して、佐武
中尉に呈した。當時尙ほ亂戦中なるを以て、中尉之を完全に奉護するの困難なるを察し、
軍旗を分解して、旗布を上衣と肌衣との間に纏ひ、菊花章を衣囊に藏めた。然るに中尉は
奮戦の結果當時指と顛とに刀創を受け居たる爲め、鮮血滴りて軍旗を染むるに至つた。
(是れ即ち「血染の軍旗」として世上に喧傳せる由來である)
單身奮闘して、軍旗を敵手より奪還せる隈部幸作の剛勇と、亂戦の裡に在りて克く奉護の
任を完うしたる佐武中尉の機智と沈着とは、吾聯隊史上に特筆して、長へに其の勳功を傳
ふべきである。

四、鎮 壓

戦闘は午後十一時半頃より、翌日午前一時頃まで、即ち約一時間に亘りて行はれたが、此
間漸次我は隊伍を整へ指揮を統一して攻勢に轉じ、暴徒等は其の首魁加屋霽堅以下二十三
名の死屍を營内に遺棄して潰走し、將帥の一人太田黒伴雄亦營内に於て負傷し法華坂門外
に死す。

敗残の暴徒の中、其の一部藤崎に集合せるものは小島中隊の追撃を受けて散亂し、他の一部は北岡舊藩主邸に走りて、縣士の應援を乞うたが、縣士之に應せず、我が追撃に會うて、或ひは自刃し或ひは身を以て追れ、午前三時臺下略ぼ鎮靜に歸す。

二十六日殘敵有吉村に集合すとの情報に接し、林少佐第二大隊の二中隊及び砲兵二分隊を指揮して、拂曉之れを襲撃したるも已に遁逃して在らず。次で金峰山・松尾村を搜索し、二十七日歸營し、鈴木中尉(重)亦一分隊を率ゐて河内附近に到り、爾後三十日に至る迄各所を搜索して三十一名を捕縛した。

此の外自首して出でたる者三十二名、各所に於て自刃したる者八十七名、此の中岩間邸にて自刃せる上野堅吾等九名の最期は、其の心情の潔白なる、態度の堂々たる、實に嘆賞に値するものであつた。二十八名は當夜戦死した。

之に對する臺下將校以下の損害は

△戦死 種田少將及高島中佐以下將校同相當官十二名、下士以下五十三名 計六十五名

△負傷 與倉中佐及砲兵大隊長鹽谷大尉以下將校同相當官十三名、下士卒百九十三名 計二百六名

五、志士の精神

吁盡忠報國の至誠献身殉國の大義に燃ゆる熱烈の志士百八十有一名が、可惜大道の理非に踏み迷ひて、狂鬪暴撃、一夜空しく銀杏城頭の露と消えたのは、實に今更ながら惜みても尙餘りあることである。

時と境遇とこそ異なれ、彼等が忠義の大本に至りては、楠氏の至誠や赤穂義士の義烈と共に、實に我が日東帝國の精華を發揮したものである。

時代の過渡に禍せられて、終に抑ふべからざる熱烈殉國の意氣を、誤れる方面に迸發して曝屍永遠に無限の遺恨を城頭の秋風に埋めたるも、其忠・其義は實に帝國史上に萬丈の氣を吐くものである。

吾人は靜慮深省克く是等先輩志士の至誠に感激し、建國以來數多國難の大義に殉じた先輩勇士に對すると同様に、絶大の尊敬、愛慕の至情を捧ぐると共に、殊にはゆかり深き我が城頭の健兒は寤寐の間も尙克く是等志士の跡を追ふて、練武修養を重ね、やがて來らむ其の日の大覺悟をきめねばならぬ。

第四章 西南の役

一、西郷隆盛叛す

明治十年二月、前の近衛都督非役陸軍大將西郷隆盛九州に叛す。是より先き、明治六年征韓問題に關して、廟議二派に分れ、西郷隆盛は憤然官を辭して郷里鹿兒島に還つた。陸軍少將桐野利秋、同僚原國幹等皆辭して之に従ひ、私學校を起して、専ら郷黨青年の教育に従事した。明治五、六年の頃は、維新の鴻業畧ぼ成ると共に、政治上の勢力に、一大消長を生じたる時にて、志を中央に失ひ、滿々たる霸氣を懷いて野に潜める者は、雷に西郷一派に限らなかつた。佐賀の亂、熊本の亂、萩の亂等、皆夫等の失意の士が鬱結せる滿腔の不平を洩らさんとしたものに外ならぬ。西郷の擧兵は、是等の徒とは稍や其趣を異にし事は決して西郷の志ではなかつたが、桐野以下私學校の幹部並に其生徒に擁せられて、遂に起たざる可からざるハメに陥り、二月十五日遂に慄慄決死の薩摩隼人一萬五千を率ゐ、政府に詰問の筋ありと稱し、鹿兒島を進發して北上した。日州諸藩の士の之に投ずる者二

千餘人、熊本・人吉の士族にして黨與する者池邊吉十郎以下千餘人に及んだ。

二、守城

形勢險惡なるを見て、鎮臺司令官谷少將は二月十四日諸將校を本營に會して、攻守の策を討議す。進んで之を薩界の險に要して擊破せんとする、所謂攻勢防禦の論も頗ぶる有力であつたが、

「當城の兵、去冬不意の襲撃を受けしより、兵士の氣魄未だ全く舊時に復せず。賊徒素より強兵の名あり。加之縣下の士族賊に消息を通ずるもの少からず。故に進んで熊本市街を保護せんとすれば、賊脚下に生ずるの憂なきに非ず。且殊死の兇賊を平原曠野に防げ、其勝算固より期し難く、一旦遯へ戦うて敗るゝときは、遂に堅守を期し難し。兵數寡少、守る可くして攻むるに足らず……。」

萬全の策を採つて、議終に守城と決した。蓋し熊本鎮臺の存亡は九州一圓の人心に關するを以て、大事の上にも大事を取つたのである。即ち二月十五日以降、着々守城工事に着手し、先づ火藥庫を岳の丸及び楯方に作りて、敵彈の射入を防ぎ、新たに道路を開いて交

通を便にし、要所に地雷を埋め、橋梁を撤し柴柵を結び、砲壘を築造し、十八日傷病兵を山鹿の温泉に避けしめ、又罪囚を赦免して軍役に就かしめ(其の勤功に依り)同日午後二時二十分、三發の非常號砲を以て各隊其の守地に就き、防禦作業を施す。

十九日午前十一時四十分、本城より火を發す。偶々西南の風烈しく、忽ち四方に延焼して、遂に天守臺に及び、將卒必死の防火に依つて、午後三時漸く鎮火するを得たるが、約三十分間の糧米は悉く烏有に歸した。唯だ兵器及び彈藥は、將校以下非常の奮闘に依り、逸早く安全の地に移したる爲め、遂に一彈をも損せざりしは不幸中の幸と謂ふべく、守城の功も之あつて始めて全たきを得たのである。

城中の火は飛んで坪井・上林の民家に及び、黄昏に至りて火勢益々激しく、四方に延焼して焰烟天を焦がし、光景悲壯を極めた。

一方軍吏は直ちに糧食の徵發に着手し、市街及び近村より兵力を以て續々城中に搬入す。

此の火災に依つて士氣は却つて大いに振るつた。出火の原因は不明である。

午後五時、小倉屯在の歩兵第十四聯隊第一大隊の左半大隊入城す。

又、是日鹿兒島縣令大山綱良の添書を以て、左記書面を送附して來た。

拙者儀今般政府に尋問の廉有之、明後十七日縣下發程、陸軍少將桐野利秋・陸軍少將篠原國幹及舊兵隊の者隨行致候間、其臺下通行之節は、兵隊整列、指揮を可被受、此段及照會候也

明治十年二月十五日

陸軍大將 西 郷 隆 盛

熊本鎮臺司令官

司令官は素より一笑に附し去つて、同時に專使宇宿某外二名來たりて、參謀長樺山中佐(紀)に面會し、上京の趣旨書を齎らし且つ遊説を試みた(蓋し中佐は西郷)が、中佐亦更に耳を藉さず、兵器を携へて國憲を犯し強て臺下を通行せんとせば、兵力を以て鎮壓するの外無し、還つて之を西郷君に報せよと。所謂大義親を滅するもの、意氣頗る壯なるものあり。折から西京發左の電報に接し、士氣益々振るつた。

布告

鹿兒島暴徒擅ニ兵器ヲ携へ熊本縣下ニ亂入國憲ヲ憚ラズ叛跡顯然ニ付征討被仰出候條此旨相達候事

明治十年二月十九日

太政大臣 三 條 實 美

勅書

朕卿ヲ以テ鹿兒島逆徒征討總督ニ任シ海陸一切ノ軍事並ニ將官以下ノ黜陟賞罰舉テ以テ卿ニ委ス
卿勉從事シ平定ノ功ヲ奏セヨ
明治十年二月十九日

二品親王有栖川熾仁

二十日夜半十二時、少警視綿貫吉直の率ゐる東京警視隊四百名入城す。是時賊は已に其の先鋒隊を以て川尻に達し、斥候は城下に潜入してゐた。城中よりも下士斥候(長、第三大隊)を川尻に派して、敵狀を偵察せしめた。城中より下士斥候(軍曹岡本鏡威)を是日城外山崎、鹽谷町、京町等延焼尙ほ熄まず。

守備隊の部署 是左の如くであつた。

- 司令官 少佐 奥 保鞏
- 隊 號
- 下馬橋 第一大隊第一中隊 指揮官 大尉 福原 豐功
- 山砲一門 巡查五番組(五〇) 警部 池端 端 蛙
- 曹長 貴志 一郎

- 縣 廳 第二大隊第四中隊 中尉 不彦 政利
- 古 城 第一大隊第三中隊 中尉 高邊 佳介
- 舊八代邸 第一大隊第二中隊 中尉 岡本 長道
- 法華坂二ノ丸 第一大隊第二中隊 中尉 岡本 盛布
- 山砲二 少尉 試補 田原 鑑一
- 司令官 大尉 小川 又次
- 藤崎神社 第三大隊第一中隊 大尉 小島 政利
- 野砲二、山砲一、白砲一 大尉 大崎 長寛
- 巡查一番組 警部 川路 利行
- 片山邸 第三大隊第二中隊 大尉 瀧川 忠教
- 巡查二番組 警部 池田 清秀
- 山砲一、白砲一 少尉 試補 河井 合信
- 漆畑及野砲營 第三大隊第三中隊 大尉 寺内 清祐
- 巡查三番組 警部 赤羽 友春
- 野砲一、山砲二 大尉 左乙女 英武

司令官 少佐 林 準之助

第一大隊第二中隊
埋門捧安坂 巡查六番組

山砲一、白砲二

千葉城 第一大隊第四中隊
野砲一、山砲一

岳ノ丸 第二大隊第三中隊

此の外、左記には砲のみを配置す

新野砲兵營 山砲一、白砲一

飯田 丸野砲二、白砲一

少尉試補 村上 慧

乃ち當聯隊を以て、守城の主力とし、歩兵第十四聯隊第一大隊左半大隊を豫備隊とす。

三、聯隊長戦死

二月二十一日午前一時、敵偵察の目的を以て（爲し得れば川尻隈岡・小島の兩中隊を派遣したるも、目的を達せずして歸還し、同日午前七時頃、賊は其尖兵を以て臺下に侵入し、坪

井町通りを通行しつゝあるを見て、岳ノ丸及び千葉城の砲兵之れを砲撃し、敵も亦應戦す。これを此役の初戦とす。下馬橋を撤去し、尙ほ城外にありて障得となる家屋を焼いて展望を便にした。

二十二日午前六時、賊兵城の東南即ち安巳、長六の二橋より前進し來たる。下馬橋の砲兵の轟撃に遇ふて千葉城に轉せるも、再び撃退せられ、一隊は京町及び錦山方面より埋門に迫り、又午前七時高田原より前進して下馬橋に肉薄し、他の一部は山崎及び新町方面の燒跡より縣廳並に藤崎神社を襲ひ、四方地村附近の敵は片山邸を攻撃し、各方面より一時に殺到して來た。蓋し敵は開戦の劈頭、我が守兵の寡少なるに乗じて、勇猛果敢に突進し、一舉して熊本城を抜き、武威を四方に輝かせて以て天下の大勢を決せんと企圖せるもの、如く、二十一日より二十三日に亘りて、其の攻撃最も熾烈を極め、二十一日朝參謀長 樺山中佐は藤崎神社に於て、聯隊長與倉中佐は片山邸に於て、共に敵彈に中りて負傷し、殊に聯隊長は頗ぶる重傷にて、二十三日午前一時 城内 病院に於て歿した。爾後川上少佐（六）聯隊の指揮を執つた。

（谷少將夫人、與倉中佐夫人等五六の夫人、共に籠城し、與倉夫人此の日恰かも一女を生

む。谷少將乃ち名親となつて幹子と名づく。聯隊の將卒之を聞き、悲喜交々臻る。當時敵は大砲六門を有し、花岡山、四方地村、長六橋及び安巳橋に各一門を配し、他の二門は隨時各所に移動して砲撃し、二十四日以後其の攻撃は稍や緩となりしも、尙ほ晝夜を分たず各方面より來襲し、日々數回の戰鬪行はれざることなく、時々は我よりも出撃して敵の陣地を襲撃した。就中段山に據れる敵は、其の兵力優勢なるのみならず、頗ぶる慄悍、屢々勇猛に襲撃して來た。然しながら我が守兵も亦頗ぶる剛勇沈毅、協心戮力して防戦に努め、毎に敵に多大の損害を與へて撃退した。

二月二十六日夜、城中防戦の状況を征討軍に報じ、且つ之れと連絡せんが爲、第一大隊第二中隊伍長谷村計介を高瀬に派遣す。伍長は苦心慘憺、途中幾多の困難を経て、三月三日第一旅團司令部に到着して其の使命を完了した。賊徒掃蕩の大詔煥發と共に、征討旅團は左の如く編成せられ、續々として戦地に送られた。蓋し正面軍は博多に上陸して、往々往々賊軍を破つて南下し、別働旅團は八代灣日奈久附近に上陸し、北上して賊の背面を衝き、兩面より齊進して、熊本城の圍みを解くのが、第一期作戦の主眼にして、

正面軍

- 征討第一旅團 (長、少將 野津 鎮雄)
- 同 第二旅團 (長、少將 三好 重臣)
- 同 第三旅團 (長、少將 三浦 梧樓)
- 同 第四旅團 (長、少將 大山 巖)

衝背軍

- 別働第一旅團 (長、少將 高島勲之助)
- 別働第二旅團 (長、少將 山田 顯義)
- 別働第三旅團 (長、少將 川路 利良)
- 別働第四旅團 (長、代理大佐黒川通軌)

此の外乃木少佐(希)は歩兵第十四聯隊の主力を率ゐ、鎮臺に入るの目的を以て前進中、植木驛附近にて敵の沮止する所となり、爾後征討軍の一部に加つて戦鬪を繼續しつゝあつた。

四、段山の激戦

二月二十七日、大迫大尉(敏)約一個中隊半の鎮臺兵・巡查の混合隊を率ゐて、坪井の草場學校に在る敵に向つて襲撃を行ひたるも、敵火熾烈にして遂に目的を達せず、大迫大尉傷きて歸る。

三月一日城中の貯米を算するに六百六十六石七斗にして、一日の消費量は約二十九石なるが故に、自今辛じて二十二日と三分ノ二を支ふるに過ぎず。三月二十三日の午食を以て絶

食の運命であつた。

三月二日第十四聯隊の兵を守線に加へたる結果、各隊の配備若干變更せられた。

三月三日四方地村の敵壘に、軍旗の如き旗を掲ぐるを見て、城兵大いに怪しむ（蓋し第十四聯隊の旗手戦死落ちたのであつた）。

此頃より城内煙草盡き、茶を以て代用す。

三月十一日、段山の敵兵矢文を鳥邸の守地に送り、且つ同文の宣傳書を線外各所に掲示して、我が城兵を誘惑せんとす。曰く「我衆將ニ日ヲ刻シテ城ヲ屠ラントス」「山鹿・高瀬諸道ノ軍ハ我已ニ悉ク之ヲ擊破ス」各縣ニモ義兵起リツ、アリ「我兄弟等ヨ、誰ガ爲ニ孤城ヲ守リ、糧竭キ、援絶エ、殆ト累卵ノ危キニ至ルヤ」と。忠勇なる我が城兵には一人としてかゝる宣傳に乗せらるゝ者は無かつたが、安藤少尉及び池端警部は、矢文を見て慷慨禁ずる能はず、濁酒を酌んで段山攻撃の協議をなし、同日午後四時各手兵を提げて卒然段山に突撃した。然れども事頗る急に出で、且つ他隊との間に連絡も通じて居無かつた爲め、忽ち優勢なる敵の逆撃する所となりて、安藤少尉池端警部共に戦死し、且つ敵兵我が敗兵に尾して、守線に突入せんとし、殊死防戦黄昏に至りて辛じて撃退したるも、戦闘は夜を徹

して翌日に互り、十二日も終日小戦闘行はれ、川路警部・小林中尉・山本中尉・高並少尉・澁谷少尉試補等各手兵を提げて交々肉薄したるも、我は兵力寡少にして配布全からざるに、敵は漸次兵力を此方面に増加して堅守せるが故に、一も其の目的を達せず、却つて敵は全線に亘つて活躍を開始し、一齊に城中を包撃した。戦闘は引續き十三日に及び、朝來第一線の兵を交替し、新銃を以て猛烈に攻撃を續行したが、依然目的を達せず、大庭中尉の指揮する一隊は一時段山右側山上の胸壁を奪取したるも、久しからずして放棄（同中尉）するに至り、澁谷少尉試補隊警視隊二小隊と共に、銃槍を揮ひ、吶喊して敵壘前數歩の近距離に迫つたが、多大の損害を蒙つて撃退せられた。

午後二時に至り、聯隊長心得川上少佐來たりて此方面の戦線を指揮し、小川大尉をして若干部隊を指揮して正面より迫らしめ、丸井大尉をして一小隊を率ゐて右翼井芹川を潜行して段山の背後に迂回せしむ。小川隊は井芹川に潜伏せる敵の狙撃隊を驅逐し、之に尾し銃剣突撃を以て背後より突入し、正面軍亦火を放つて突撃したので、敵兵狼狽、策の施す所を知らず、多數の死傷者を遺棄して四方地・島崎方面に潰走し、午後三時兩隊は確實に段山を占領した。

此段山の戦闘は十一日午後四時に起りて、十三日午後三時に至りて始めて止む。實に守城中第一の激戦にして、此間に於ける

聯隊の損害 戦死將校以下四十名 負傷同 九十三名
警視隊の損害 戦死警部以下二十一名 負傷同 六十七名

敵の戦死者は尠くも百を下らざるべく、我が軍に於て埋葬せる屍體のみにても七十三の多数に上つた。

段山占領後、片山邸の山砲二門を此に移し、胸壁を設けて、假設砲臺を構築し、且つ井芹川の下流を塞ぎて段山の前面に水を湛へ、併せて漆畑前面の田圃に灌漑し、以て敵の侵入を防ぎ、此の方面の守兵を減す。

十四日谷少將より感状を授與せらる。

段山に敗れたる敵兵は花岡山に據り、同山下石塘口に於て井芹川と坪井川の合流を堰いた。之が爲め井芹川の河孟・段山及び野砲營前面の田畑は悉く漲溢して、恰かも一大湖水の如くになつた。是れ素より段山の一戦に意氣沮喪せる敵が、城兵の出撃に備へたものであらうが、却つて我をして此方面の守兵を減じ、他日出撃の英氣を養はしむる結果となつたの

である。

〔京町口の激戦〕 爾後も戦闘は日々絶えず、二十三日未明藤崎少尉・今橋少尉・立石中尉・黒澤中尉等は各一小隊内外の兵を率ゐて、京町口・日向崎・牧崎・寺原等を急襲し、敵の狼狽に乗じ壘を毀ち家を焼いて歸つた。

二十六日諸將校議して曰く、「數日來、正面軍方面の銃砲聲漸く近接し、晝夜猛烈の戦闘を繼續せるもの、如し、宜しく城中より出撃して、敵をして後方を顧慮せしめ、以て我が征討軍の攻撃に策應すべし」と、二十七日左の如き部署及び方略を以て出撃す。

正面 右翼 歩一四ノ第一大隊第四中隊・警視隊六番組・山砲二
左翼 歩一三ノ第一大隊第一中隊

指揮官林少佐、三年坂及出京町の敵壘を突く

別働隊 歩一三ノ第三大隊第四中隊

長、三木中尉。參謀黒澤中尉。牧崎より井芹村の砲臺を抜く

迂回兵 歩一三ノ一小隊と警視隊三番組

本妙寺を衝き行く行く胸壁を毀ち井芹に至り本隊に合す

正面軍として裏京町に向へる丸井・北川の兩中隊は、中坂附近に於て最も猛烈なる市街戦を

惹起した。乃ち敵は坂上の土藏及び胸壁に據つて頑強に抵抗し、我は敵壘を去る十米突に過ぎざる竹藪に據りて對戦し、將校及び警部の如き銃を携へざる者は瓦石を取つて擲つなど接戦苦闘中、臼砲一門來援し、且つ星加小隊敵の背後を衝ける爲め、敵は遂に壘を捨てて敗走し、我は之を追撃しつゝ、柳川町に至り、此間七八の胸壁を奪つて悉く破壊し、日没兵を收めて歸城した。但是日別働隊方面の攻撃は餘り成功せず終つた。

此日の戦鬪に於ける損害、死傷總計百四十三名
(内、鎮臺兵九十二名、警視隊五十一名)

五、第一大隊の突圍

日を経るに従つて敵勢は漸く銷沈し、彼より來襲することは甚だ稀であつたが、城中の情況も亦漸を追うて悲惨になつて來た。蓋し彈藥(砲彈)と糧食との缺乏である。これは豫め覺悟せる所であつたから、當初敵彈の炸裂せざるものは、悉く拾ひ收めて我が用に供しつゝあつたが、三月下旬に至りて砲彈の缺乏は益々甚しく、僅かに演習用の殘彈を利用し、信管に代ふるに木栓を以てし、門線を造つて摩擦管に代用するに至つた。

糧米の方は、會計部は勿論一兵卒に至るまで、殆んど全力を盡して之が蒐集に努めたる結果、三月二十二日午後を経過しても餓死するやうの事なく、四月四日現糧を算したるに、米・粟及び糯を合して二百七十五石六斗四升を得た。乃ち司令官規定して曰く

- 一、今後各官廨は、朝夕二餐は粥を用ゐ、晝餐は粟飯を用ゐ
- 一、各隊は朝餐は粥、晝夕二餐は粟飯を喫し
- 一、工兵隊及役夫は總て粟飯を食すべし

と。如斯すれば一日の消費量十五石五斗四升七合にて足り、明日より後十八日間、即ち四月二十二日迄維持することが出来る勘定で、同日以後之れを實施した。之が爲に毫も士氣を沮喪することなく、一難の加はる毎に不撓不屈の精神愈々堅きを覺えたのである。然れども糧食彈藥は限りあり、救援軍は未だ一騎も市内に入らず、果して何の日に来着すべきか、俄に逆睹すべからずである。爰に於て四月七日谷少將は突圍の策を提議した。蓋し約半部を城に残して防守に充て、自から半部を率ゐ敵の重圍を突破して征討軍に連絡せんとするものにて、連絡若し成らずとするも、城中の兵食に餘裕を生じ、守城の期日を延長するを得べしと云ふにあつた。諸將何れも突圍の策には双手を舉げて賛成したが、司

令官自から陣頭に立つを非なりとし、參謀長樺山中佐往かんと云ふを、谷少將許さず、遂に我が第一大隊長奥少佐其の選に當り、兵力も一大隊と決し、其の部署及び方略を左の如く定めた。

突出隊(長、奥少佐) 歩一三の第一大隊

安巳橋より圍を衝いて川尻の援軍に合す

侵襲隊(長、小川大尉) 歩一三第二第三大隊の第二中隊・歩一四ノ一中隊・警視隊

五番組

安巳橋を襲ひ突出隊の進出を掩護す

豫備隊(長、林少佐) 歩一三第二大隊の第三・第四中隊

突出隊の將卒は各自外套を携へ、草鞋を穿ち、繃帶・リントを懷中に、糧食として餅四個握り飯一個及び馬肉五十匁、水筒には焼酎を盛り、準備全たく成るや、去留の人互ひに相袂別し、無量の感慨に打たる。

八日午前四時、侵襲隊先づ枚を啣んで岳ノ丸東側の城外に集合し、時の到るを待つ。東天漸く白み叢林の鳥方に鳴かんとする頃、岳ノ丸の守兵は遽然として射撃を開始した。敵は

不意を撃たれて倉皇退却を始む。侵襲隊乃ち銃に劍を裝し、匍匐潜行して之れに追尾し、白川右岸なる敵の守線を距る二百米の地點に達したる時、始めて敵の發見する所となり彼は直ちに非常を報じて警急集合せんとしたが、我は敢て一彈を放たず、白兵を揮つて疾風の如く敵壘に突入し、忽ち其數名を斬り棄て、一舉に數壘を奪取した。

奥少佐の指揮する突圍隊は、此機に乗じて、銃劍を揮ひ、身を砲烟の裡に挺し、吶喊して河岸の壘に至り、直ちに安巳橋の上流百米の地點にて渡河す。敵は新屋敷及び迎町方面に遁逃し、侵襲隊は益々猛烈果敢に之を追撃しつゝある。乃ち突圍隊は速かに敵線を脱し、朝霧に包まれて水前寺村に到り、園内の一亭に火を放ちて、城兵に其の進路を報じ、是より八丁馬場を右折し、健軍村・中無田村を経て六嘉村に到りて暫らく休止し、爾後路を御船街道に取りて、萬願寺村・緑川を経て隈ノ庄に至りて旅團選抜隊の斥候に會し、同日午後四時宇土驛に達して、遂に衝背軍に合するを得た。

突圍隊の已に水前寺を過ぐるや、侵襲隊は追撃を中止し、且つ戦ひ且つ退きつゝ、午後四時城中に歸還した。かくて突圍は見事に成功せるのみならず、九品寺村の村庫に於て精米一千三百餘匁を獲て、之を城中に運び、尙ほ小銃百挺彈藥凡そ三千發を鹵獲し、敵兵四名を

俘虜とした。

六、重圍解く

四月九日砲廠部は野戰器具材料を修理せんが爲、我が歩兵用の體操器械を壞ちて之に充つ。以て城中窮乏の一端を推測することができる。十日谷少將は慰勞の爲め將校以下に酒肴料を附與し、且つ今や敵の敗散目前に迫れると同時に、彼れ或は窮鼠の勢となり、殊死して決戦を求め來たるやも計り難し、自今益々警備を嚴にして、千仞の功を全うすべき旨を訓示した。

十一日谷少將は段山砲臺を巡視中、敵の狙丸に中つて負傷した。十四日拂曉より川尻方面の喊聲甚だ近づき、援軍將に到らんとしつゝあるを察し、之に策應して敵を挾撃せんが爲め、

第二突圍隊(長、林少佐) 第一大隊(第一中隊隊缺)及巡查二小隊

を編成して待つ。正午頃城外各所に火起り、尋て花岡山・長六橋等の敵續々自から圍を解いて退却を始めた。

仍て林少佐突圍隊を率ゐて坪井方面に出で、之を追撃せんとしたるに、出京町・建町附近の敵兵尙ほ頑強に抵抗し、交戦黄昏に及ぶ。

是より先き午後四時、俄然臺下に激しき銃聲起ると共に、一軍隊伍肅々として長六橋に進んで來た。城兵「敵か味方か」と疑視しつゝある間に、既に山崎に至り、其の服装に依りて我が救援軍の將卒であることを知つた。

一隊は下馬橋に來たりて叫んで曰く、

『山川中佐(浩)の隊、川尻の賊を破つて來たる』

と、俄に撤したる下馬橋を修理して、城内に延く。次で目賀田中尉の指揮する教導團の選抜中隊が到着した。城中の兵、孤城を固守すること五十有三日、千辛萬苦、遂に其の任務を全うして、援軍を迎へ得たる歡喜は、到底筆舌の能く竭す所でない。

直ちに小夜食を焚いて、入城の將卒に給し、且つ賄所に令して曰く、『明日より粥及び粟飯を廢し、米飯を給すべし』と。

十五日植木口第二旅團の近衛兵を先頭に、正面軍及び衝背軍の諸隊悉く熊本に入り、奥少佐の突圍隊も御船を發し、途中邊場山の賊を撃破して、午後四時屯營に歸つた。十六日

勅使(侍從片)を差遣せられ、左記優渥なる御沙汰書と共に、御慰勞の思召を以て酒肴料を下賜せられた。

陸軍少將 谷 干 城

鹿兒島縣賊徒益兇暴ヲ逞シ熊本城ヲ圍ミ攻撃ニ及ヒ候處殊ニ力戰屢賊軍ヲ破リ能ク孤城ヲ堅守候段 叡聞ニ達シ深ク苦勞ニ被思召候 依テ爲慰勞酒肴下賜候 猶此上奮發兵士ヲ率キ勵シ平定ノ功ヲ奏スヘク旨御沙汰候事

但 士官兵隊等ヘモ相達スヘク事

尙は皇太后・皇后 兩陛下よりは綿撒糸・白木棉・煙草・葡萄酒等を下賜せられた。殊に綿撒糸は畏くも兩陛下が女官と俱に御手づから撒かせられたものであつた。

征討總督有栖川宮殿下には平岡少佐(半)を御使として『永々の守城、一同勉強大儀の旨』御沙汰あらせらる。

守城中に於ける損害

△戰死 聯隊長以下百二十七名

△負傷 谷少將以下四百六十八名

(此外警視隊死傷百七十八名)

七、健軍附近の激戰

敵は熊本の包圍を解きたるも、未だ遠く去らず、木山を中央として左は御船に據り、右は天津に及び、健軍・保田窪に第一線を張つて防備甚だ嚴に、機を見て攻勢に轉せんとするもの、如くであつた。依て我軍は大舉して此敵を攻撃するに決し、右翼は別働第一第二旅團を以て隈庄より、別働第三旅團を以て甲佐地方より、共に郡見坂及び御船に向ひ、中央は我が熊本鎮臺城を出で、健軍の敵に當り、別働第五旅團は保田窪を攻む。左翼は第一第二旅團竹迫より植木を経て進み、第三旅團隈府を抜いて共に天津に向ふ。此戰役中、同時に斯の如き大兵力を用ゐたのは實に空前絶後であつた。

十六日木山附近偵察の目的を以て前進せる第三大隊第一中隊は砂取町に至りて停止し、次で同夜第二中隊之に増加し、第三大隊(二中)は本村天満宮附近に進んだ。聯隊長(川上)は十九日朝第一第二大隊を率ゐて屯營出發、砂取町に前進し、二十日午前四時第二第三大隊を第一線、第一大隊を豫備とし歩一四と協力して右翼別働第二旅團、左翼別働第五旅團に連繫し、其の中間二十町餘の廣正面を以て健軍に前進し、交戰數時、午前十時八丁馬場南方

の一壘を抜いたが、久しく保つ能はずして放棄し、更に第一大隊を第一線に伍間増加し、塹壕を築いて戦ふこと更に五時間餘、三木・山本の兩中隊は午後三時帶山の敵壘に向つて決死の銃剣突撃を實施し、右方の數壘を奪取し、敗敵を小峰原附近に追撃して、午後五時防禦線に歸つた。是日健軍の防禦堅固にして容易に抜き難く見えた。

午後六時頃、保田窪の賊大舉別働第五旅團を撃破して連絡を遮断し、更に我が左側背に來襲した。是時第三大隊第三中隊長寺内大尉(清)は極めて沉着なる態度を持ち、悠々其の左翼を矩形に退けて敵の近接するを待つた。敵の兵力は凡そ七八百にして、火白兩兵を用ゐる吶喊して戦線二十米突の地點まで肉薄した時、大尉は命令一下、一齊に火蓋を切り、銃身も割れよとばかり猛烈熾盛なる射撃を浴びせ、立所に其の數百名を殺傷し、敵勢ひるむを見るや直ちに銃剣を揮つて之に突撃した。賊乃ち周章狼狽、保田窪を指して潰走し去つた。此の戦闘酣なる時、聯隊長川上少佐は頭部に、大隊長小川少佐は腹部と股部に銃創を受けた。敵兵撃退後、愈々防禦工事を嚴にし、夜を徹して警戒に従事す。別働第五旅團とは遂に連絡通せず。

是日の戦闘は、各方面共に頗ぶる激烈を極め、終には銃剣を棄て格闘して雌雄を決するに至り、殊に健軍・保田窪附近の敵壘を検するに、一壘少くも二十餘の伏屍累々と横つてゐた。

此日の戦闘に於ける聯隊の損害

△戦死 中尉小林清吉、高並連壽。少尉富富時宜、沼田政次。少尉試補宮田綱條。下士卒四十五名

△負傷 聯隊長以下將校十六名。下士卒百八十八名

二十一日午前三時、別働第五旅團は全線突撃を以て保田窪の敵線を撃破した。然れど我は未だ之を知らず、五時頃に至り我が正面の射撃頃に衰へたるを以て、斥候を健軍に派して偵察せしめたるに、敵兵已に壘を棄て、退却してゐた。依て敵を追撃しつゝ前進し、同夜第一大隊を第一線として小峰原に哨線を張り、第二大隊は健軍に宿營した。

八、豊後口の戦闘

熊本城外の決戦に敗北したる敵は、二方面に分かれて、一は人吉に向かひ、一は三田井方面に退却した。乃ち聯隊は三田井に走れる敵を追撃して、爾後濱町を経て馬見原附近に

行動しつゝあつたが、五月十四日、日向地方に屯集せる賊兵豊後重岡・竹田方面に進出し、更に久住の險を扼せんとし、中津の士族等之に呼應せんとすとの情報に依り、豊後竹田方面に轉戦を命ぜられ、十七日第一大隊の先頭を以て馬見原を發し、惠良原を経て玉來・竹田に向つて前進し、二十三日豊肥の國境を越え、爾後、

左 翼(長、小川少佐) 久住街道より

中 央(長、大迫少佐) 竹田街道より

右 翼(長、福原大尉) 玉來街道より

の三縦隊となり豊後に進入し、往々其の前進陣地たる多數の堡壘を陥れて、二十八日竹田附近に達し、二十九日未明竹田城を包圍し、一舉して此の天嶮の堅城を抜く。賊市街に火を放ちて、一は三重町に一は重岡に走り、尙ほ日向より續々重岡に入れる諸隊と共に臼杵を冒し、同地の士族隊及び巡查隊の抵抗を排して、六月一日臼杵城を占領し、進んで大分を襲撃せんとした。依つて聯隊長は奥少佐の第一大隊をして重岡方面を警戒せしめ、自から聯隊の主力及び歩一四の第三大隊を提げて臼杵の攻撃に向かひ、警視徵募隊と協力して、六月八日白木峠・再進越・白山越・松原峠・吉野越及び野津市口の六道より攻め

入り、同日より三日間に亙りて猛烈に攻撃したるも、賊勢猖獗にして容易に陥らず、十日未明警固屋港よりする海軍の掩護射撃に次いで、一隊を姫路峠に大迂回せしめて敵の背後を衝かしめたる爲め、遂に支ふること能はずして、平清水・臼杵の市街に火を放ち、その烟焰に依つて退路を蔽ひ、海岸の間道より津久見峠を越えて佐伯方面に潰走した。

此戦鬪に於ける聯隊の損害

△戦死 少尉試補有馬純晴以下七名

△負傷 大尉平佐良茂以下三十四名

一旦佐伯に遁がれたる敵は、間もなく重岡に去り、重岡は豊後・日向方面に於ける敵の據點となつた。依つて聯隊は又此の方面に轉じ、六月十二日重岡を包圍し、爾後五日間に亙りて攻撃を續行したが、賊は巍峨たる山上に堅壘を築いて、守備頗る嚴、容易に抜くことができない。聯隊長乃ち十七日各隊を激勵して決戦を行ふ。是日正面攻撃の任に當れる第二大隊長 林 少佐、第四中隊長代理佐武中尉を招き、三國峠の正面堡壘に對して強襲を命じた。

中尉乃ち欣然命を受け、軍曹川野邊常松以下伍長二、卒十四を以て決死隊を編成し、自ら

之を率ひて午前二時三十分暗に乗じて發し、哨兵の射撃を受けたるも敢て應射せず、正面第一壘を指して潜進し、不意に白兵を揮つて壘内に突入し、縦横馳突して立所に十二名を斃し、先づ第一壘を奪つて第二壘第三壘に迫る。之を見て諸隊一齊に攻撃前進し、三國峠の諸壘將棋倒しに陥る。是日壘を抜く十箇所、險路を踏むこと五里餘、實に疾風枯葉を捲くの感があつた。而も決死隊中傷くもの僅かに一名、佐武中尉の指揮宜しきに適ひ、川野邊軍曹以下勇猛沈着なるに由る。拔群の功に依り臨時褒賞を與へられた。

爾後連日の攻撃に堪へず、二十一日昧爽賊は重岡の壘を棄て、國境を越えて日向に走つた。即ち諸隊重岡に入り、爾後七月末日に至るまで、國境の險を要して相對峙し、要所に哨兵を配置し、防禦工事を施し、其の守線重岡を中心として右翼柳ヶ瀬より、左翼黒澤に至る日豊の國境十餘里に亘つた。

此の間敵は、六月二十四日未明暴雨烈風に乗じて、赤松峠及び豆殼峠の我が兩哨所を急襲し、更に七月三日午前三時約二千の大集團を以て、梓峠及び大峙の哨所を部襲し、何れも我が哨兵は一時守線を放棄するの餘儀なきに至つた。諸隊の増援に依り、奮戦健闘して戦線を恢復したることは勿論であるが、毎回多大の犠牲を拂ひ、此の對陣中に於ける損害

は三百二十名の多數に上つた。乃ち。

△戦死 大尉宇多瑞穂以下七十四名
△負傷 將校以下二百十一名

外に死傷三十五名(此分は死と傷との區別つかず)
八月二日暴雨を冒して全線一齊に前進を開始し、萩ノ峯・小田・勝ヶ峯を占領し、三日松尾山・赤木山を占領して、友軍第一旅團及び別働第一旅團の進出を待ち、八月十五日未明大舉して敵壘に迫れるも、敵は已に壘を棄て、可愛嶽に遁れた後であつた。

聯隊は同日熊田附近に集結し、十七日第一第二第三及び新選旅團と共に可愛嶽を包圍し、十八日未明を期して一齊突撃し、今度こそは賊將西郷の首を見ずんば已まずと、勇躍して攻撃を準備しつゝある時、西郷は自から精銳なる手兵を提げて、第一第二旅團中間の哨線を突破して、長蛇は遂に鹿兒島を指して逸し去つた。

九、賊徒戡定・凱旋

八月二十三日、聯隊は竹田より熊本地方に轉進を命ぜられて、三十日川尻に集結し、第一大隊を熊本城に残置して、爾餘を以て鹿兒島に前進し、松橋・米ノ津・宮ノ城を経て九月六

日武村の大明神山下に到りて、城山の合圍線に就いた。乃ち我が征討軍は敵を城山に壓迫して二重三重に包圍し、攻撃準備を整ふること旬日、九月十九日諸將を牙營に會して、攻撃の部署を定めた。乃ち全軍を分ちて、攻撃隊と合圍隊の二と爲し、合圍隊は山麓を包圍して、専ら敵の逸出に備へ、攻撃隊は、各旅團より約一中隊宛を簡拔集成し、一人に付百五十發乃至二百發の彈藥を準備せしめ、其の指揮官は左の如く任命せられた。

△第一旅團選抜攻撃隊陸軍少佐大島久直。△第二旅團同吉田道行。△第三旅團同川村景明。△第四旅團同大沼港。

△別働第一旅團同坂井重季。△別働第二旅團同河野通軌。△新選旅團同立見尙文。△熊本鎮臺同山根信成。

而して、其の軍令の嚴にして、用意の周到なることは諸官會議の申合せ中に、

「攻撃兵其目的ヲ達スルコト能ハズシテ退却シ賊徒之ニ尾シ急撃突出セントスルコトアルトキハ合圍兵ハ彼我ヲ分タズ之ヲ銃撃シ以テ賊徒ヲ却クベシ」

とあるに由て、其の一斑が窺ひ知られる。二十四日午前四時、殘月西空に傾き、白露地に滿ちて冷か也。合圍の號砲三發、寂寞を破つて轟き渡ると共に、豫ての部署に従ひ、第一第二及び別働第二旅團は、城山の東北隅に突出せる堡壘に、別働第一旅團及熊本鎮臺兵は、西面より城山の中央方面に、第四旅團は北面より岩崎谷に、第三旅團及新選旅團は東南面

より、城山の正面に向ひ、淨光明寺山に放列を敷ける攻城砲隊(司令官)及び上ノ原に在るクルツ砲(軍艦清輝號)より撃出す、熾なる掩護砲撃の下に、四面齊しく敵壘に肉薄した。聯隊の選抜兵は山根少佐指揮の下に、池ノ平山より新照院坂上左側の壘に迫り、之を奪取したる後一小隊を此に殘置し、爾餘の隊を三分して、友軍諸隊と共に岩崎谷及び其の左右の山中に、銃槍を揮つて突入し、抵抗する者は悉く刺殺し、降る者は捕虜とした。斯くて首魁隆盛以下桐野・村田・邊見・池上等の幹部は、悉く城山の朝露と消えて、西南の賊徒全たく平定す。翌二十七日朝有栖川宮征討總督鹿兒島に入らせられ、午後山縣・川村の兩參軍以下各團隊長を磯の旅館に集めて、左の令旨を賜ふ。

令旨

賊徒猖獗多ク月日ヲ經シニ元兇誅ニ伏シ西陲全ク安シ我天皇陛下ノ宸襟ヲ慰セラル、果シテ如何ゾヤ、是卿等各將校其指揮ノ宜シキヲ得下士兵卒ニ至ルマテ殊ニ感奮勸勵事ニ從フノ致ス所ナリ、余深ク之ヲ喜フ、爰ニ本營ヲ此地ニ移シ乃チ卿等ヲ招キ聊微衷ヲ表ス、其佐尉官ノ此席ニ列セサル者及下士兵卒ニハ卿等幸ニ予カ意ヲ傳示セヨ、尋で各旅團の編成を解き、凱旋を命ぜられ、諸隊逐次歸營の途に就きたるが、鎮臺兵は十

月五日川尻に集合したる後、谷少將自から之を率ゐて熊本に凱旋した。顧みれば開戦以來茲に八閱月、其の間或ひは四面楚歌聲裡に在りて、援絶え糧盡くるの時に當り、纒かに愛馬を屠り、粟粥を啜りて飢を凌ぎ、以て孤城を累卵の危ふきに支へ、或ひは暴雨疾風、濃霧咫尺を辨せざるの曉、赤松・豆穀時に賊の來襲を拒ぎ、峭壁を攀ぢ荆棘を潜り、躬を棄て、苦戰奮闘、或ひは櫛風沐雨、山河百里の險を越え、懸軍長驅遂に賊の巢窟を覆す其の困苦辛酸は、筆紙の能く竭す所にあらず、其の赫奕たる武勳、又口舌の能く悉す所でない。

第五章 日清戦役

一、開戦の事情

明治十七年韓國京城の事變後、日清兩國は天津條約を締結して、兩國共に撤兵を實行して韓國の獨立を承認し、尙ほ爾後出兵の必要ある時は、相通牒して同時に之を行ふことを約したるに拘らず、清國は常に韓國を屬國視して止まず。清國公使袁世凱は機略縱横、常に韓政府を懼伏せしめ、韓國亦我を輕視して彼の防毅令事件となり、次で金王均の暗殺事件起り、兩國の國交は日に乖離して行つたが、二十七年四月韓國に東學黨の亂起り、國政改革を唱へて、諸道を陥れ、五月全州に據りて將に京城を衝かんとした。而して韓國政府自ら之を征服し能はざるを見たる清國は、機逸すべからずと爲し、天津條約を無視して恣に兵を韓國に進め、アハよくば此の機會を以て韓國併呑の實を擧げんとした。茲に於て帝國政府は默する能はず、大島公使(圭)は六月十日八重山艦の陸戰隊を率ゐて京城に入り、次で大島少將(昌)は混成旅團を率ゐて京城に入り、大島公使は所謂國政改革案五個條を提げ

て韓廷に迫り、袁世凱は形勢不利なりと見て京城を去つた。依つて帝國政府は清國政府に對して其の暴狀を詰り、屢ば交渉を重ねたるも、同國政府には一も誠意の認むべきものなく、武力を以てするの外解決の途なきを認めて國交を斷ち、七月二十五日豊島沖の海戦に次で、二十九日大島旅團は牙山に據れる清兵を撃つて大に之を破り、八月一日を以て宣戰の大詔を煥發せられた。

宣戰の詔勅

天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ百僚有司ハ宜シク朕カ意ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ交戰ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ苟モ國際法ニ悞ラサル限り各々權能ニ應シテ一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ス遺漏ナカラムコトヲ期セヨ
惟フニ朕カ即位以來茲ニ二十有餘年文明ノ化ヲ平和ノ治ニ求メ事ヲ外國ニ構フルノ極メテ不可ナルヲ信シ有司ヲシテ常ニ有朋ノ誼ヲ篤クスルニ努力セシメ幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ逐ウテ親密ヲ加フ何ゾ料ラム清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ對シテ着々隣交ニ戻リ信義ヲ失スルノ擧ニ出テムトハ

朝鮮ハ帝國カ其始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タリ而シテ清國ハ毎ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其内政ニ干渉シ其内亂アルニ於テ口ヲ屬邦ノ拯難ニ藉キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セムト欲シ先ツ清國ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ翻ツテ種々ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其稅政ヲ釐革シ内ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ終始陰ニ居テ百方其目的ヲ妨害シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告クルヤ直ニ其力ヲ以テ其慾望ヲ達セントシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓國ニ要擊シ殆ト亡狀ヲ極メタリ則チ清國ノ計圖タル明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラサラシメ帝國カ率先シテ之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ附シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フ可ラス孰々其ノ爲ス所ニ就テ深ク謀計ノ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始メヨリ平和ヲ犠牲トシテ其非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサルヘカラス事既

ニ茲ニ至ル朕平和ニ相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖モ亦公ニ戰ヲ宣セサルヲ得サルナリ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス
宣戰布告と共に駐清公使小村壽太郎は國旗を撤して北京を引揚げ、動員令は續々として各師團に降つた。

二、動員及出征

七月二十四日、第六師團動員を令せらる。
聯隊が此の令達を受けたるは同日午後十時二十分にして、朝鮮の風雲急なるや、聯隊は豫め此事あるを期し、將校の如きも多く營内に起居して、應急に備へつゝあつたので、聯隊長(光學)は直ちに將校同相當官を將校集會所に集合して、各官の戰時職務を命課し、即時出戰準備に取かゝつた。各級幹部殆んど寢食を忘れ、晝夜兼行の狀況にて動員事務を執り、應召員亦踴躍先を争うて來たり、充員數日を出でずして完結した。
八月一日清國に對して宣戰を布告せられ、九月十三日大瀟を廣島に進めさせられ、爾後外

征の參畫、國內の制令一に此より出づ。同月十五日第一軍の編成(第三、第四)成りて、大將山縣有朋司令官に任せられ、同日第五師團は平壤に據れる五萬の清兵を粉碎し、越えて十七日彼我の主力艦隊は、黃海に戰つて、大に彼れを撃破し、相繼げる海陸の大捷に、開戰の劈頭先づ彼れが膽を寒からしめた。
九月二十六日、師團は第二軍戰團序列を命せらる。

第二軍 司令官 大山巖

第一師團 第二師團 第六師團

而して少將長谷川好道は直ちに歩兵第十二旅團を率ゐて出征したるが、師團主力は戰略豫備として、暫らく内地に在りて待命する事となり、十月二十三日聯隊は熊本を發して福岡に到り歩兵第二十四聯隊の兵營に入る。出發に際し官民の來りて我が行途を壯にするもの無數、市の北郊殆んど人を以て填まり、沿道の士民亦た歡呼至らざるなく、將卒共に志氣大に昂がり既に早く四百餘州を呑むの概があつた。爾後舞鶴城内に駐留すること二箇月、日々激烈なる戰鬪演習を實施しつゝ、只管大命の一下を待つてゐた。
十月十七日第一軍は九連城を衝き、一舉に之を抜いて敵を奉天及び海城・大孤山の諸路に

走らしめ、十一月三日第一師團は金州城を攻略し、併せて大連灣を占領し、越えて十一日拂曉、第二軍の主力は旅順要塞に迫り、海軍の掩護射撃の下に、是亦僅かに一日にして、其の砲台全部を攻略し、尋て第一軍は連山關・岫巖・柞木城を抜き、十二月十二日其の一部(第三師團)は續紛たる飛雪を冒して海城を攻略した。

斯く我が軍は各方面共に連戦連勝、戦へば必ず勝つといふ有様にて、全軍の士氣頗ぶる振るふと共に、我が聯隊の將士をして脾肉の嘆に堪へざらしめたが、十二月二十九日に至り出征の目的を以て小倉に集中の命を受け、三十一日汽車輸送に依りて小倉に到り、翌年一月二日全く集中を終る。四日小倉練兵場に於て旅團長茨木少將(昭正) 武装検査を施行したる後、左記要旨の訓示を與へらる。

充員下令後、出發の命を待つこと茲に數閱月、今や忠勇なる諸子と共に千載一遇の外征に従事するの機を得たるは、上下共に畢生の光榮なり。抑も第六師團の諸兵即ち九州男兒の剛毅猛勇なること、皆人の熟知する所にして、既に出征せる混成第十二旅團の如き、一戦の後武名噴々たり。然るに我旅團の如きは、強の最たる地にありと信ずと雖ども、待命の長さ、未だ其の機を得ず、人をして隔靴搔癢の憾あらしめたり。今や我が武を海

外異域に揚ぐるの時到り、汝等平素養ふ所の堅忍不拔なる志操と、忠勇義烈なる氣節と、曾て鍛錬せる戦術と膽力とを以て彼れに向ふ。豈能く偉勳を奏せざることあらんや。予の深く信じて疑はざる所なり。宜しく軍人の本分を守り進戦苦闘、死しては護國の鬼となり、生きては忠義の人となり、上

大元帥陛下の威名を發揚し、併せて我が國光を宣揚せんことを努めよ
時に北風凜烈にして、飛雪成衣を撲ち、寒氣骨を刺すと雖ども、氣已に四百餘州を呑み、魂北清に向つて飛べる聯隊の將卒にありては、身邊また風雪あるを知らず、直立不動睫毛一本動かす者がなかつた。

一月十二日未明小倉を發して門司に至り、福岡丸・神州丸・姫路丸の三船に分乗して、同日午後門司を出帆し、十五日大連灣に到着した。是日旅團長茨木少將金州民政長官に轉補せられ、少將大寺安純其の後を襲ふ。

師團(二旅團)は大連にて臨時山東作戰軍(山嶽)に編入せられ、灣内に假泊すること約一週日、其の第三上陸隊となりて二十二日午後逐次大連を進發し、二十三日朝山東省榮城灣龍睡洞に到着した。

友軍第二師團は我先ちて同處に上陸し、既に榮城縣を占領して同地附近に集結しつゝ、あつた。二十三日午後一時聯隊は揚陸を終り蒲安庄及び其の附近に村落露營し、第一大隊(騎兵一小隊)は榮城縣西方約二吉米突の康(王皇廟)に到りて歩兵第五聯隊第二大隊と交代して、軍の右翼前哨となり、濱街道方面を警戒した。

三、威海衛の攻略

〔威海衛に向つて前進〕 軍は各隊の整頓を終りて二十六日より進軍を開始し、師團は軍の右縦隊となりて蒲安庄附近の宿營地を發し、榮城縣に向ふ。聯隊(第一大)は騎兵大隊(一小隊)山砲中隊・工兵大隊(隊)と共に師團前衛となりて、廿六日午前八時蒲安庄を發し、午後零時曲格村に達し、二十七日朝同地を發して石河家に向ふ。此の間岩石累々として凸凹多く、纜かに人馬を通じ得べき山路なる上に、積雪凝結して滑走し易く、朔風怒號して寒威酷烈、終に馬三頭凍傷斃死するに至り、水筒の水、飯盒の飯共に凍結して飲食に堪へず、行軍の困難名狀すべからずであつたが、勇を鼓して前進を續け、泊于家に到りて村落露營し、二十八日午前八時露營地を出發、同十一時鮑家に到着し、

第二大隊をして其東方高地に前哨を配布せしむ。鮑家は威海衛陸地砲臺を隔つこと僅々四吉米突にすぎず。敵は屢ば巨砲を放つて我が軍を威嚇し、夜に入るや探照燈を使用して嚴重に警戒しつゝあつた。是日中村將校斥候は苦心偵察の結果、敵砲臺の位置及び砲數等を略圖に作成して提出し、之に依つて師團は頗ぶる敵狀を詳かにすることを得、作戰上貢獻する處が多かつた。

第一大隊は師團本隊の先頭に在りて前進し、(二十)榮城縣(二十)九港西を経て二十八日九阜寨村に到り、左翼我が第二大隊と連絡して、師團の右翼を警戒し、且つ我が艦隊と連絡した。

〔東部要塞攻撃の部署〕 二十九日は各隊とも現在地に停止す。是日正午頃第一大隊より出したる守永將校斥候(長、守永中尉)は九阜村附近に於て敵狀偵察中、俄然約三百の敵兵に包圍せられ、勇戦奮闘したるも衆寡敵せず、守永中尉以下七名戦死、四名負傷して、纜かに脱して歸る。午後に至り敵兵約五百、四隊に分かれて我が前哨線に來襲したるが、前衛は直ちに緊急集合して鮑家西方高地脚に展開したるに、敵は未だ戦を交へずして、俄かに前進を止め、何れにか影を没し去つた。

二十九日夜半、明日の攻撃に關する師團命令を受領す。

師團命令(要旨) (二十九日午後十一時五十分於屯候村司令部)

- 一、敵ハ温泉場西北方ノ高地及孤山後ヨリ東北方ノ海濱ニ互ル高地線ヲ守備セリ
- 軍ハ三十日拂曉ヲ期シ鳳林集東南方高地ヲ占領セントス
- 二、師團ハ(縦隊)先ツ孤山後東北方高地ニ在ル敵ヲ攻撃セントス
- 三、右翼隊ハ拂曉ヲ期シ敵ノ重砲砲臺方面ニ對シテ陽撃ヲ行ヒ當面ノ敵ヲ牽制スルコトヲ力メ且ツ師團ノ右翼ヲ掩護スヘシ
- 左翼隊ハ孤山後東北方ノ高地上敵ノ右翼ト想定スル點ニ向ツテ攻撃スヘシ、爲シ得ル限リノ手段ヲ以テ左縦隊(旅團)ト連絡スヘシ
- 軍隊區分左の如し

右翼隊 長、渡部歩兵少佐

歩一三の第一大隊、山砲・工兵各一小隊、傳令騎兵四

左翼隊 歩兵第十三聯隊(一大隊缺)、歩二二三ノ第一大隊、騎一小隊、山砲第三大隊(一小隊缺) 工兵第六大隊、衛生隊半部

豫備隊

歩兵第二十三聯隊(一大隊缺)、騎兵第六、工兵第一大隊(各一中隊と一小隊缺)、衛生隊半部、海軍陸戰隊

〔摩天嶺砲臺の占領〕 聯隊(第一大)は三十日午前三時柳家庄東方高地に集合し、背囊を脱して輕装をなし、殊に前衛たる第二大隊は外套をも脱し、草鞋を好む者には靴を脱して之を用ゐしめた。三時四十分前衛歩兵の先頭を以て集合地を發し、孤山後東北方高地の右翼砲臺に向つて前進し第三大隊は本隊の先頭として前衛に續行す。

積雪地に滿つと雖ども密雲低迷して咫尺暗黒、加ふるに道路凍結して滑走し易く、時々電光一閃と共に巨彈咆哮して頭上を過ぐ。此の困難と危険を冒して、六時四十分前衛は嶺後村南方高地に到達し、第六中隊を右翼、第八中隊を左翼第一線、爾餘を豫備として、摩天嶺砲臺の南部凸角に向つて展開し、第三大隊は鹽堆山東南方凹地に開進した。此時天漸く白し。

前衛第一線の展開を終ると共に、敵砲臺は砲火を開き、専ら榴彈を放つて我が戦線を轟撃したが、兩中隊は或ひは谷底を潜行し或ひは地物の掩護に依りて、先づ彼の連繫堡を奪ふ爲め砲臺の右翼に向つて攻撃前進し、更に第五中隊を第八中隊の左翼に増加して、戦鬪愈々

猛烈となり、前面の小銃火及び砲火並に揚峯嶺・龍廟嘴諸砲臺よりする重砲の側射を冒し、少からぬ損害を受けつゝも、全線勇を鼓して奮進した。七時三十分、戦機漸く熟するを見て聯隊長は第三大隊を第一線に増加した。乃ち第三大隊長は第十一・第十二中隊を第二大隊の左翼に延伸増加し、同じく砲臺の右翼を目標として攻進した。是時地雷十餘個、兩大隊の中間に於て一齊に爆發し、天地爲に震動し炸煙四邊を蔽ふ。

機は方に熟した。第二大隊長鎌田少佐は他を待つに遑あらず、自から最後の豫備隊第七中隊を提げて第一線に進出し、將に突撃の號令を發せんとする時、聯隊長は喇叭手をして進襲の譜を吹奏せしめ、軍旗を樹て、第一線に進出したので、諸隊の志氣頓に奮るひ、第六中隊は壘道を経て進み、第七中隊之に續行し、第五・第八中隊は砲臺の右翼に向つて競ひ進み、又配屬の工兵小隊は斜面を攀ちて、一齊に敵壘に突入し、第三大隊亦鹿柴を超えて到り、共に殘敵を驅逐して我が軍旗を高く砲臺頭に翻したのは、正に午前八時三十分であつた。

尋て第二大隊の一部を殘置して摩天嶺及び附近の敵を警戒せしめ、聯隊長は爾餘の隊を率

ゐて敗兵を追撃し、歩二三の第一大隊と共に、鞏左營並に龍廟嘴・鹿角嘴の二砲臺を占領した。

午前十時半、兩大隊は戦列を整頓して、晝飯を喫す。

〔揚峯嶺砲臺の占領〕 斯く摩天嶺は迅速に我が手中に歸したるも、嶺の東方及び東北方なる揚峯嶺・謝家所・趙北嘴等の敵兵は尙は頑強なる抵抗を續け、港内の敵艦及び日島・劉公島の砲臺亦猛烈なる砲火を開き、双々相應じ、我が占領砲臺及び兵營を轟撃し、就中巨彈の多くは摩天嶺に集中し、十一時四十分聯隊主力と共に摩天嶺の壘上に在りて戦況を視察しつゝあつた旅團長大寺少將は、敵の全彈を受けて壯烈なる戦死(負傷)を遂げた。依つて聯隊長冲原大佐代つて左翼隊の指揮を取る。

是より先き、鹽堆山に放列を敷ける山砲大隊は、揚峯嶺の敵兵頑強なるを見て、此に全火力を集中し、又摩天嶺の鹵獲砲を直ちに利用して同砲臺を射撃し、適よ一彈火藥庫に命中し、黒煙天に冲するや、機逸すべからずと、工兵第六大隊は獨立を以て同砲臺に肉薄したが、遂に其の目的を達せず。我が第三大隊之れが攻撃を命せらる。乃ち同大隊は工兵隊の左翼に進出し、谷に沿ふて砲臺に迫つた。時に砲臺内俄かに火災起り、敵兵海岸を傳う

て西方に退却を始めた。第三大隊及び他の諸隊は、直ちに臺内に突入して此の敗敵に猛烈なる追撃射撃を加へた。

午後一時、第三大隊の一部は恰かも到着せる右翼隊と共に趙北嘴砲臺及び同兵營を占領した。

揚峯嶺砲臺に向つた右翼隊は、是日午前三時半九阜塞を發し、午前五時干家庄西北方高地に達して天明を待ち、七時該高地に放列を敷いて揚峯嶺砲臺を砲撃すると共に、七時三十分海岸に沿うて第三・第四中隊を展開し、第一・第二中隊を豫備として攻撃前進し、次で第二中隊を第一線に増加して、謝家所の堡壘に向つて攻撃を開始したが、敵の火力熾烈にして、攻撃我が意の如く進捗せず。山砲小隊の如きは彈藥を射盡して一時射撃を中止するに至つた。暫らくして、敵の當方面に對する火力著しく衰ふるに至り（左翼隊の摩天嶺占領後敵由り）、渡部少佐は其の全力を擧げて謝家所堡壘に突入した。時に午後零時三十分。之と殆んど同時、揚峯嶺を占領したる第三大隊亦該堡壘に向かひ、茲に兩大隊は完全に連絡し、又威海衛背面の要塞は悉く我有に歸したのである。

午後三時二十分摩天嶺附近の守線を、歩兵第二十三聯隊に譲つて、聯隊は孤山後・九阜村。

河東村等に退いて村落露營を爲す。

(是日左縦隊も攻撃奏功して鳳林集東方高地を占領した)

此戰鬪に於ける聯隊の損害

△戰死 下士卒六名

△負傷 三上大尉、中村中尉。下士卒四十七名

〔威海衛市街の占領並敵艦隊降伏〕 二月一日續紛たる飛雪を冒して宿營地を出發、溫泉湯を経て虎山附近に到りて宿營す。是日寒威辛烈にして眉毛・鬚髯悉く凍り、米飯は石の如くにして嚼むに堪へず、ビスケットはあれども食ふに湯もなく水もなく、勞を醫せんとして佇立すれば、兩脚は靴を穿ちたるまゝ地上に凍結するといふ有様であつた。二日第二師團は其の一部を以て威海衛市街を占領した。

此間海軍は連日敵艦を砲撃し、又占領砲臺を利用して陸上より之を援け、四日先づ定遠を沈め、五日靖遠・米遠を破壊し、次で日島砲臺を陥れた。茲に於て北洋水師提督丁汝昌は到底敵し難きを覺悟し、殘存艦艇及び兵器材料一切を我が軍に提供し、部下將卒の生命の保全を希ふと共に、二月十二日自から毒を仰いで自殺した。

爾後聯隊は虎山附近に駐留して命を待つ。
二十二日左の勅語を賜ふ。

勅語

威海衛ハ旅順ト相須チテ清國ノ關門ナリ汝等曩ニ旅順ヲ拔キテ其半扉ヲ毀テ今ヤ威海衛ヲ陷レ全ク敵關ヲ破壊シ終ル朕深ク之ヲ嘉賞ス

四、平和克復・威海衛駐屯

〔旅順口の滯陣〕 渤海の門戸も愈々我が手中に歸した。第一軍方面にありては第一師團は二月二十二日大平山に於て敵の大兵を撃破し、三月五日第三・第五師團は牛莊城を陥れ、第一師團は三月七日營口に侵入して其砲臺を略取し、次て第一軍及び第一師團は協力して田庄臺を攻撃し、殆んど其の敵を塵殺した。茲に於て我が軍は更に第二期作戰に入り、直隸平野を一掃して、長驅北京を衝くべく、近衛及び第四師團新たに出勤を命せられ、同時に第一師團は去つて第一軍に屬し、第二軍戰團序列を左の如く改めらる。

第二軍戰團序列 司令官 大山 巖

近衛師團 第四師團 第六師團

其他略

而して山東に於ける我師團は、此の作戰の急先鋒たることを期し、二月下旬威海衛を發して旅順口に集中し、暫らく此に鏡を養ふこととなつた。
三月十二日伊瀬知少將歩兵第十一旅團長に新補せられて旅順に着し、冲原聯隊長は旅團長代理を解かれた。四月七日冲原大佐陸軍少將に榮進して歩兵第一旅團長に補せらる。依て古參大隊長師岡少佐暫らく其職務を代理し、次て中佐に昇任して當聯隊長に補せられた。
〔平和克復〕 清國は遂に武力に依つて敵し難きを覺りて和を請ひ、直隸總督李鴻章を全權大臣(副使)として馬關に派し、我が全權大臣伊藤博文(副使)と、數次の交渉を重ねたる結果、四月十七日に至り媾和條約の締結を見るに至つた。乃ち清國は韓國の獨立自主を確認し、遼東半島・臺灣島・澎湖列島を我に割譲し、軍費二億兩を償ひたる外、内地に於ける種々の利權を提供し、茲に帝國は遺憾なく戰鬪の目的を貫徹して、武威を宇内に宣揚し、二十一日平和克復に關する詔勅を煥發せられた。かくて國民は上下舉つて戰勝の光榮に酔へる折柄、謂ゆる三國干渉なるもの突如として起り、血を以て購ひたる遼東半島を清國に還

附するの餘儀なきに至つた。
五月十日占領地(半島)還附の大詔發せられ、越えて十三日陸海軍人に、優渥なる勅語を賜ひ、出征の勞を犒ひ給ふと同時に將來の覺悟に就いて戒しめ給ふ。
其の一節に宣ふらく、

朕ハ我武維レ揚リテ汝等ト其譽ヲ借ニスルヲ樂ムト雖モ邦家ノ前程ハ尙遼遠ナリ汝等夫レ能ク朕ノ訓諭ヲ遵奉シ留リテ隊伍ニ在ル者ト散シテ鄉閭ニ歸ルモノトニ論ナク五事ヲ服膺シテ軍人ノ本分ヲ恪守シ一誠以テ他日ノ報効ヲ期セヨ
拜誦して、將卒何れも切齒扼腕、十年の臥薪嘗膽を誓つたのである。

〔威海衛駐屯〕五月十七日第二軍の戦闘序列を解かれて、近衛師團は臺灣の叛徒討伐を命ぜられ、第四師團は遼東半島の守備を命ぜられ、又我歩兵第十一旅團は償金拂込擔保の爲め、新に左の戦闘序列に入り、駐りて威海衛を占領する事となつた。

- 威海衛占領軍 司令官 陸軍少將 伊瀬知好成
- 歩兵第十一旅團 騎兵第六聯隊第二中隊
- 工兵第六大隊第一中隊 第六師團衛生隊半部

第六師團第二野戰病院 同第三及第四歩兵彈藥縱列

同第一野砲彈藥縱列 同第三糧食縱列
九月二十日、先づ第三大隊を威海衛に派して設營の業務を援助せしめ、次で十一月下旬再び舊戰場に渡航して、爾後聯隊は碼頭街・塞子村・王家庄等に分屯して、翌年六月に至るまで守備の任務に服した。
〔凱旋〕二十九年六月五日守備の任を混成第二旅團に譲りて、駐屯地を發し、同月八日熊本に凱旋し、十六日復員を終つた。

第六章 日露戰役

一、日露開戦の事情

彼の遼東半島は、日清戦争の結果、一度我が領有に歸したるも、露・獨・佛三國の忠告に基いて、之を清國(今日の支那)に還附した。然るに明治三十年の秋、清國山東省に於て二名の獨逸宣教師が、暴民の爲めに教害せらるゝや、獨逸政府は大に清廷を責め、直に軍艦を膠州灣に進めて、之を租借地と爲し、以て東洋發展の根據地とした。所が、膠州灣は從來露國が、已に冬の軍艦碇繋場として居た處なので、其れを今更突然獨逸の爲めに、占領されてしまつた爲め、露國は大いに狼狽し、軍艦を遼東半島の旅順口に進めて、之を占領したのである。

三十歩 (86)

旅順口は何人も知るがごとく、渤海の關門であつて、稀有の天嶮、軍事上まことに重要な地である。曾て我が軍が、幾千人の屍を積み血を流して、日章旗を樹てたる土地を、東洋の平和といふ美しい辭柄の下に、清國に還附せしめたのも、實は自から代つて占領せんが爲めに外ならなかつたのである。露國が清廷を脅迫し、我國の面目を蹂躪して、旅順口を軍事的に占領したのは、明治三十三年の三月二十七日であつた。

其の年の五月に於て、俄然として、北清事變なるものが勃發したが、此の時露國は此の機に乗じ、豫ての野望を達し版圖を擴張せんと、黒龍江・西伯利亞の二軍團を出動せしめ、本國より十二個の野戰病院を派遣し、之を五軍團に分ち、名を草賊の征討に假りて、七月十四日から公然滿洲に打入り、同年の十二月には、早くも滿洲の三省を確實に占領したが、尙ほ慊らず、更に百尺竿頭一步を進めて、韓國に向かつて、侵略を試むるに至つたのである。

三十歩 (87)

此の如きは即ち明かに、清國との公約を蔑視し、又列國に對する保障を無視せる不信の行爲であるのみならず、直接我が帝國の存在を脅威するものである。是に於て、帝國政府は黙視すること能はず、先づ至誠を披瀝して、露國政府との間に交渉を開き、相互の利益を調和し、併せて東洋の平和を維持せんとして、協商の道を講じたるも、露國は毫も誠意を以て、我を遇せず、徒らに曠日彌久して交渉を遷延せしめ、其の間に着々として、海陸の軍備を充實して、韓國の境上に臨み、我が國を威嚇せんとする如き行動に出でたるを以

て、國民の公憤は勃然として發し、國論沸騰して政府に開戦を促がし、三十六年の暮秋の頃より、暗雲低迷して滿韓の野を蔽ひ、風雲の徂徠頗る急であつたが、彼我の妥協終に成らず、翌三十七年二月八日、我が驅逐艇は、旅順港に敵の軍艦を夜襲して、最初の一撃を加へ、次で九日、我が艦隊の一部は木越旅團を護衛して、仁川港に敵前上陸を敢行したる後、同港外に敵の巡洋艦ワリヤーグ及びコローツを誘き出して、之を撃破し、戦端は遂に開かるゝに至つたのである。

露國に對する開戦の理由は、三十七年二月十日を以て公布せられたる、宣戰の大詔に詳かである。

宣戰の詔勅

天祐ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜シク全力ヲ極メテ露國ト交戦ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各々其職務ニ率ヒ其權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ヲ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セ

スシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ且暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列國トノ關係年ヲ逐ウテ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナランヤ

帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是兩國累世ノ關係ニ由ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ清國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ラス依然滿洲ニ占據シ益々其地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併吞セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸センカ韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ互リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ茲ニ至ル帝國カ平和ノ交

涉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之ヲ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス彼ノ三國干渉以來、膽を嘗め薪に臥して、陰忍十年、窺かに機會の到來を、待ちに待つた五千萬の國民は、踊躍して起つたのである。越えて同月十二日陸海軍大臣、並に各師團長を宮中に召されて、特に親しく左の優詔を下し給ふ。

勅語

朕ハ東洋ノ平和ヲ以テ朕カ衷心ノ欣幸トスル所ナルカ故ニ清韓ノ兩國ニ關スル時局ノ問題ニ付朕カ政府ヲシテ昨年來露國ニ交渉セシメタリ然ルニ露國政府ハ東洋ノ平和ヲ顧念スルノ誠意ナキコトヲ確認セシムルノ止ムヲ得サルニ達シタリ蓋シ清韓兩國領土ノ保全ハ我日本ノ獨立自衛ト密接ノ關係ヲ有ス茲ニ於テ朕ハ朕カ政府ニ命シテ露國ト交渉ヲ斷テ我獨立自衛ノ爲メニ自由ノ行動ヲ執ラシムルコトニ決定セリ朕ハ卿等ノ忠誠勇武ニ信賴シ其目的ヲ達シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

二、動員及出征

第十二師團の如きは宣戰公布に先ち、沂衛師團と共に全國師團中劈頭に動員せられ、既に黒木大將第一軍の麾下として京城より北韓に前進し、四月三十日及び五月一日鴨綠江の渡河戦に、先づ敵の前進部隊に痛撃を與へて、九連城・鳳凰城を屠り、奧大將の率ゐる第二軍(第一・第三)は五月初旬、遼東半島の猴兔石に上陸して、方に震天動地の大活躍を開始せんとしつゝあるに拘らず、獨り我が師團は動員令に接せず、團下現役の將卒は勿論、豫後備の將校士卒に至るまで、皆腕を撫して慷慨悲憤しつゝありたる折柄、三十七年五月十九日午前十一時三十分、待ちに待つたる動員令は來た。營内の各所には、忽ち歡びの喊聲が湧いた。

聯隊長(吉弘)は直ちに將校同相當官を將校集會所に招集して、各官の戰時職務を命課し、即時動員業務及び出征準備に取りかゝつた。赤禱を懸けた應召員は、續々と集まつて來た。

五月二十二日午前九時頃、有栖川宮殿下、當聯隊の動員業務視察の爲御來營遊ばされ、親

しく營内を御巡視の後、飯田旅團長は營庭樟樹の下にて、明治九年神風黨の亂當時の状況を詳しく御説明申上げた。

二十七日動員完了し、聯隊長は營庭に於て武裝検査を行ひたる後、部下一同に對し左記要旨の訓示を與ふ。

聯隊長訓示(要旨)

東洋平和の公敵を殲滅すべき秋は來た。宜しく我等軍人たる者は、明治十五年竝に今回の勅諭及び詔勅を服膺して、上は陛下の宸襟を休め奉り、内は國民をして充分軍隊に信頼せしめて、各其の業に安んせしめ、外は外人の嗤笑を招かざるやう努力しなければならぬ。武士道を發揮して、我が軍隊の名譽を皇威と俱に世界に宣揚するの覺悟を安す。同心協力して克く連繫を保ち、困苦缺乏寒暑に堪へ、危険身に迫れるときは成功既に近きにあるを思ひ、百難に遭ふて益々元氣を鼓舞せよ。常に兵器を尊重し、士民に對しては恩威並び行ふて、彼等の愛敬を得むことを心懸け、捕虜を遇するには禮を以てせよ。此の如く終始一貫、細心粉骨して、萬事遺漏なきを期せば、以て最後の目的を達せんこと疑ふべからずである。殊に悲惨なる狀況に際しては、軍人たるの體面を穢さるやう

肝銘せよ。

爾後各級幹部は勿論一兵卒に至るまで、全身の精力を竭して、或ひは野外演習に、或ひは行軍に、或ひは夜間動作に、晝夜熾烈なる演習を實施しつゝ、命令の一下を待ち、士氣頗ぶる振るふ。六月五日渡鹿練兵場に於て師團長(春野)の武裝検査あり、次で出戦に關し一場の訓示を與へられた。

愈々出征の期は近づいた。六月十一日殆んど營内を開放して、兵卒と其の父兄及び親族との面會に充て、又聯隊長以下將校一同は將校集會所に會して、恭しく御眞影を奉拜し杯を舉げて陛下の萬歳を三唱し、併せて聯隊の武運長久を祈つた。翌十二日愈々第一大隊(二中)、第三、第四中隊、第三大隊(二中)、第十一、第十二中隊、聯隊本部並第七、第八中隊、第二大隊(二中)の順序を以て、軍旗を奉じて屯營出發征途に就く。往く者送る者共に萬歳を叫びつゝ、汽車輸送に依りて長崎港に到り、博多丸・武藏丸及び臺灣丸の三隻に分乗して、十三・四の兩日に互り同港を解纜、遼東半島鹽大澳に向つた。

野戰隊(將校及同相當官)職員表

聯隊本部 聯隊長、中佐吉弘鑑徳。副官、大尉佐多武彦。旗手、少尉古川三郎

第一大隊本部 大隊長、小佐日下部正衛。副官、中尉齋藤現。上等計手大久保義太郎。一等軍醫宮城雄次郎。三等軍醫西村格

第一中隊 長、中尉帖佐長吾。小隊長、中尉坂井勇。中尉西郡清二。少尉香月清司
第二中隊 長、中尉大石正之。小隊長、中尉松村眞家。少尉林辰喜代。少尉高田喜四郎
第三中隊 長、中尉丸山祐四郎。小隊長、中尉鈴木學。少尉中島甚作。少尉近專八
第四中隊 長、大尉貴島尙武。小隊長、中尉堀ノ内直。中尉野田三藏。少尉友野盛

第二大隊本部 大隊長、少佐木澤啓。副官、中尉石丸志都磨。三等主計北川三策。一等軍醫永江友雄。二等軍醫野村盛行

第五中隊 長、大尉綾部傳一。小隊長、中尉小田常記。少尉土井知清。少尉渡邊斧人
第六中隊 長、大尉小宮山榮助。小隊長、中尉北村吉雄。少尉古城胤秀。蓮田默思朗
第七中隊 長、大尉原田齊次郎。小隊長、中尉竹下範國。少尉山之城純夫。木田啓平
第八中隊 長、大尉入江半吉。小隊長、中尉星村市平。中原八郎。少尉香椎浩平

第三大隊本部 大隊長、少佐八木亮太郎。副官、中尉林仙之。三等主計岡留精市。一等軍醫内野大喜。三等軍醫原孫市

第九中隊 長、中尉永谷清治。小隊長、中尉深澤友彦。少尉齋藤安貞。萩原宗廣
第十中隊 長、大尉副島一郎。小隊長、中尉宮脇幸人。少尉下田吉雄。前田肇
第十一中隊 長、大尉汾陽光二。小隊長、中尉山下隆隆。少尉伊東文雄。古閑松太
第十二中隊 長、大尉大島鑑三郎。小隊長、中尉堀去彦。猿木眞壽夫。少尉加藤貞雄

補充大隊職員表(將校同相當官)

補充大隊本部 大隊長、少佐大島虎毅。副官、中尉江里口清一。一等主計今村直太郎
中隊 長 大尉生田清範。中尉松田良策
小隊長 少尉篠崎眞秀。田中嘉之助。中島和平。重信常信。伊東育太郎。南村六太郎
補充隊附 大尉武井信光。中尉生源寺康禧。長野篤敬。日高喜一。少尉深水潤也。池上善隆。田代傳四郎。虎口峯太郎
定員外 中佐三上徳次

三、上陸及蓋平の戦闘

意氣揚々たる我が将卒を乗せたる輸送船は、玄海の荒波を蹴り黄海の怒濤を破つて、博多・武蔵の兩船は無事遼東半島鹽大澳に到着して、六月十七日十八日上陸を終つた。然るに後發第一大隊(第三・第四中隊)の乗船臺灣丸は、十五日朝鮮近海を航行中、濃霧に籠められて針路を誤り、全羅南道の西南方巨似島に衝突して破損を蒙り、一旦長崎に復航して、更に大連丸を以て二次輸送を行ふ事になつた爲め、鹽大澳に上陸したのは七月三日であつた。鹽大澳に上陸すると同時に、第二軍戦闘序列を命せられ、奥大將の隸下に入る。當時恰かも第二軍は、西伯利第一軍團に二個師團を加へたる大兵團を以て、旅順要塞と連

絡せんとする、シタケリベルグの南下軍を得利寺附近に邀撃して、六月十五日より戦闘を開始し、激戦十有六時間の後、十六日に至りて之を撃破し、次で追撃に移つたところであつたので、聯隊は師團の集合地たる復州の東方約三里の尖山子附近に集結する爲め、上陸後晝夜兼行の強行軍を以て北進した。時に初夏炎熱漸く盛んなる處へ海上風濤に惱まされたる直後に此の強行軍を以てしたのであるから、流石に勇猛の將卒も、其の疲勞極度に達し、馬匹の斃死するもの多く、爲に糧食の如きは殆んど人力を以て運搬し、困難名状すべからざるものがあつたが、鎮西の男兒出戦の劈頭是れ位のことには辟易してならうかと互に激励しつゝ奮進し、六月二十日前記第一大隊(二中)を除くの外、悉く劉家屯附近に到着して軍司令官の指揮下に入り、直ちに退却する敵を追撃して、益々北進を續行し、二十三日以後師團は第五師團と交代する事となれる爲め、聯隊は東北溝附近に到りて、同師團の轉進を掩護した。當時敵は海城附近に集結し、沙崗臺は尙ほ敵の占領する所であつた。六月二十七日熊岳城北方面に敵騎約四中隊出現の報に接し、第一線前哨部隊より偵察の爲め將校斥候(特務連長)を派遣し、同將校斥候は歩兵第十八聯隊の一部と協力して、此の敵を撃退し、熊岳城北門を占領した。

七月五日聯隊は熊岳城附近に滯陣し、六日再び前進を起して七日明河嶺に到る。是日第五中隊は騎兵支援隊として偏坡子方面に派遣せられ、砂崗台の敵兵を撃攘して、本隊に歸つた。

〔蓋平の攻略〕 軍は七月九日三道より蓋平の敵に迫る。乃ち右翼第四師團は兩玉子及び白狼山に向ひ、左翼第三師團は山嘴子を経て沙家屯方面より蔡家屯虎鬪馬峪に向ふ。我が第六師團は中央にありて二縱隊となり、聯隊は右縱隊の先頭にありて東双頂山に向つた。八日午後九時背囊を卸し輕装して露營地を出發したが、是夜暗黒にして咫尺を辨せず、且つ道路險惡にして、前進頗る困難を極め、殊に小行李馱馬の如きは屢々斷崖の地隙に轉落するといふ有様であつたが、諸隊克く萬難を排して前進を續け、九日午前四時十分頃北部可頭塞右家子に開進を終つた。敵は猶ほ東・西双頂山の線に在り、聯隊は第二大隊を右翼第一線、第三大隊(十二中隊缺)を左翼第一線、第十一・第十二中隊及び工兵中隊を豫備隊として、午前五時前進を開始した。聯隊の進路は所謂蓋平の野にして一般に平坦、展望自在なる上に森林村落等點在して、我れを蔭蔽するの利ありと雖ども、敵の據れる双頂山は更に此一帶の地を瞰制すべき好嶮要

であつた。
友軍砲兵の掩護射撃の下に前進を起し、馬圈子南方森林に在りし小數の敵を驅逐して、先づ六一高地を占領し、午前六時蓋平河を徒渉して、同二十五分繆家屯に達した。隊伍を整頓しつゝ東双頂山の敵情を観察するに、山頂寂として敵影を見ない。然れども前夜偵察の結果必ず尙ほ一部の敵兵潜伏し在るべしと判断し、更には斥候を派して偵察を悉したるに、果然約二中隊の歩兵現れて、射撃を開始した。茲に於て第一線兩大隊は之に應戦しつゝ逐次前進し、又我が砲兵隊は六時三十分頃より猛烈に東双頂山の敵陣地を射撃し、砲弾は小氣味よく其の塹壕附近に落達して、硝煙爆煙山頂を蔽ひ、敵兵漸く動搖を始む。是時敵の銃砲火も亦熾烈を極めたが、第一線諸隊は一進一止して敵に肉薄し、六時五十分豫備を第一線に増加すると共に、東双頂山に向つて突撃を敢行し、敵は猶ほ散兵壕の處々に占據して頑強に抵抗したるも、之を石門方向に撃退して、午前七時確實に之を占領し、直ちに第九・第十中隊及び第六中隊の一部を西荒山及び紅旗圈子方向に派して敵を追撃せしめた。
此戦鬪に於ける聯隊の損害

△負傷

十二

△消耗彈藥

三二〇〇

上陸遅延したる第一大隊(二中)は、此の戦鬪中漸く退及して師團豫備隊の位置に到り、十日蓋平に到着して聯隊に復歸した。

四、大石橋並海城の占領

蓋平の戦後、一時軍は其の線に停止する事となり、聯隊は蓋平及び其の附近の村落に宿營して、日夜敵情並に地形の搜索を行ふ傍ら、將來の活動に備ふる爲め兵力を休養すること約二週間、此間の愉快なる駐留に由りて、上陸以來打續ける困苦缺乏の爲め動もすれば銷沈せんとせる士氣を恢復して、銳氣倍々昂揚するに至つた。
蓋平に敗れたる敵の主力は、大石橋附近に集結して、太平嶺北方高地—山西頭高地—青石山望馬臺の高地—牛心山に亙り陣地を占領して、我を待ちつゝあつた。軍は柵木城を攻撃する第四軍と策應して、七月二十四日此の敵を攻撃するに決したるを以て、聯隊は二十三日午前二時東關附近の宿營を發して、師團集合地たる巴領南方畑地に到り、爾後師團本隊

の行軍序列に入り西高家屯—劉家屯—達子堡附近を経て、午後四時臥龍崗に至りて村落露營し、翌二十四日は午前四時露營地を出發、李家屯東側畑地を経て標高七二高地東南方地區に開進して、戦局の推移を待ち、次で午後一時頃更に孫家屯西方回道に開進した。此の頃に至り彼我の砲戦最も劇烈を極めた。五時四十五分師團命令に由り、第一大隊(第一・第二)を第三師團の右翼隊方面に派して、同師團の山西頭北方高地に對する攻撃を援助せしめ、聯隊主力は、午後八時孫家屯東方凹地に位置を轉じ、同夜同處に於て露營の夢を結びも敢ず(同夜九時を過ぎるも)二十五日午前四時宿營地を發して、同五時頃七二高地附近に開進、次で命に依り第五中隊をして青石山を占領せしめ、聯隊主力は九時十五分三家子北方丘阜に達し、次で十時半頃灰庄屯南方畑地に開進した。敵は歩砲兵共頗ぶる堅固なる工事を施し、高粱を清掃して射界を開いた跡があつたが、此の大石橋の戦闘には聯隊は終始師團豫備として第二線に位置し、豫備隊を使用するに至らずして、敵は悉く其の守線を棄て、大石橋以北に退却し去つた。

是夜聯隊は大石橋に到りて宿營した。敵の倉庫より火を發し、炎々天を焦がさむばかりに頗ぶる壯觀を極めた。

〔海城侵入〕 大石橋の戦後、北方に退却せる敵は、海城附近に陣地を占領した。七月三十日聯隊は師團右翼隊となりて前進し、大公堡・樓子峪・坡廠里河子・波羅堡子・言堡子を経て、海城に侵入したが、敵は戦闘を交へずして海城を棄て、鞍山站以北に退却した。

此の際前哨第五中隊の軍曹守崎貞喜は斥候を命ぜられ、部下兵卒若干を率ゐて楊家窩舖附近を偵察中、約二百名の敵と遭遇し、其の猛撃を受けて危ふく全滅に陥らんとする處を、歩兵第二十三聯隊松山中隊の救援に依り、辛じて難を脱がれて原中隊に歸還した。

海城附近に滯留中、左記勅語の傳達を受く。

勅語

第二軍ハ大石橋附近ニ於テ優勢ナル敵ヲ攻撃シ以テ第五師團ヲシテ夜襲ヲナサシメ遂ニ大ニ之ヲ破リ防守堅固ナル陣地ヲ陷レ營口ヲ占領シ水路ノ利ヲ收ム

朕深ク毎戦能ク其ノ功ヲ奏シタルヲ嘉ス

五、遼陽附近の會戰

遼陽は鴨綠江の水源に蟠屈する長白山脈と、方二十哩に亙る遼河平原上の、交界線に接す

る要衝であつて、敵帥クロバトキンが極東軍總司令官となつて滿洲に到着するや、彼は第一期作戦の主陣地として此地を選び、我が軍を茲に誘引し、一舉に撃滅せん計畫であつたと稱せられてゐる。而して八月二十三日遼陽に據れる敵の兵力は總數十六萬、砲六百門と算せられ、紅砂嶺・弓張嶺を経て、大甸子及び大相屯附近に互る線を守備し、又遼陽停車場及び其の東方太子河右岸にも、優勢なる兵力を集中してゐた。

之に對して我が第一・第四・第二の三軍呼應して三面より迫り、第一軍の部署は、右翼第十二師團は大盤嶺以北を、第二師團は弓張嶺及ツエゴウ南方高地を攻撃し、近衛師團は此の兩師團の攻撃を容易ならしめん爲め、貨郎溝北方高地より邊江灣西方高地に互る線を占領して、敵を牽制すべき任務の下に、各師團一齊に運動を起した。

〔遼陽戰の序幕〕 八月二十六日午前一時、第一大隊は海城附近の師團緊急集合場に集合して師團本隊に入り、同地出發、大費屯を経て前柳河子に到り、聯隊(第一大)は同日午前二時緊急集合場に集合し、歩兵第三十三聯隊の主力及び歩兵第三十八聯隊の一大隊と共に、軍の總豫備隊として命を待ちつゝ、同夜は同地に宿營し、二十七日未明前河子を出發、午前七時半營城子に到着して、直ちに同村南端に開進し、午後六時鞍山站附近の敵兵退却に伴れ

て前進を起し、夜十時三十分湯崗子に到つて宿營し(是より九・第十中隊)二十八日未明同地を出發し、午前八時半鞍山站南端に開進した。此時正面及び左翼前面に方りて盛んなる銃聲を聞いた。午後零時半、軍總豫備隊の編成を解かれ、四時四十分師團に復歸して前河三臺子に到りて宿營し、翌二十九日も亦終日同地に在りて待命せるが、三十日午前七時二十分聯隊(二中大隊)は師團本隊となりて前進し、當時滿洲は恰かも雨季に際り是日亦夜來の豪雨にて、道路泥濘膝を没し行軍の困難殆んど名狀すべからざる有様であつたが、之を冒して十時半頃ダブンチに到着し、其の東方畑地に開進した。是時前面第一線に於ては銃砲聲熾烈を極め、正午頃に至り敵の砲兵は殆んど沈黙したるも、歩兵の戰鬪は刻一刻と進しくなりつゝあつた。同時更に破堡子に前進して開進し、只管第一線進出の命を待つ。

六、首山堡の激戰

午後三時四十分(八月三日)、師團長より

我右翼隊ハ稍苦戰ノ情况ニ依リ歩兵第十三聯隊長ハ二中隊ヲ率キテ小趙家屯ニ至リ右翼隊司令官ノ指揮ヲ受クヘシ

との命を受け、聯隊長は第二大隊を破堡子に殘置し、自ら第三大隊(第九、第十)を率ゐて小趙家臺に到り(午後四時)旅團長の指揮下に入つた。同時旅團長の命に依り、第三大隊(第九、第十)を右翼隊豫備として小趙家臺に殘置し、聯隊長は豫備隊として同地に在りたる第一、第二中隊を率ゐて午後四時四十分小趙家屯東北方無名部落に達し、日下部少佐の第一大隊(第一、第二)を併せ指揮し、同時に第一線に連絡した。

當時我前面の敵はマエトール村及び鐵道線路附近に在りて、彼我の距離は四五百米突に近接し、敵は巧みに地形を利用して陣地を構成し、之を補ふに鐵條網・狼狽等の副防禦を以てし、極めて良く蔭蔽せるを以て、其の兵力歩兵約二大隊、砲兵二中隊及び若干の機關銃を有すと判定せるも、其の所在を明らかに知ることを得ず。従つて我が射撃の威力を發揮し能はざるに反して、敵は小銃・機關銃を以て道路及び主要なる地區を熾烈に掃射せるを以て死傷者續出し、而かも死體を運ぶに由なく、傷者も之を顧みるに術なき悲惨の状況を呈してゐた。然れども我が第一線部隊は志氣益々旺盛、良く沈着して攻撃を繼續しつゝあつた。聯隊長は此の状況を看取し、直ちに日下部大隊(第一、第二)を歩兵第四十五聯隊の左翼に増加して戰鬥に参加せしめ、自から第一、第二中隊を指揮し第二線として其の後方に位置した。

流石に激烈なりし銃砲火も、午後八時半頃に至りて漸く熄み、明日を期して決戦すべく、互ひに銃把を握りつゝ夜を徹した。

是日第二大隊は師團豫備、第十中隊は旅團砲兵掩護、第三大隊(第十中)は旅團豫備。
〔夜襲〕 旅團長(飯田)は敵陣堅固にして容易に抜くべからず、夜襲に依つて奪取するの外策なきを知り、三十一日午前零時四十分、日下部大隊に對して左の命令を發するに至つた。
日下部大隊ハ本夜ヲ期シ標高九九高地西方ノ小丘ヲ占領シ、成シ得レハ九九高地ヲモ占領スヘシ

(因に、同夜我左翼隊も敵に向つて夜襲を決定した。
大隊長は直ちに攻撃部署を定め、進路を右翼方面に採りて、午前三時出發、三中隊を縱隊横隊の一線に一中隊を第二線として、大趙家屯東南方無名部落より鐵道監視廠に向かつて前進した。大隊長以下將卒皆勇躍奮進、午前四時を期して、一舉に首山堡に突入する企圖であつた。恰かも好し是夜月無く、陰雲天を蔽ふて漆黒如法の闇、將卒枚を銜んで肅々として前んだ。幸ひにして鐵道監視廠五十米突前に達する迄は、敵の察知を免るゝことを得たが、是より更に前進せんとするや、忽ち正面の監視家屋及び左翼方面より射撃を受け、

立所に多数の死傷者を生ずるに至つたが、我は敢て一發も應戦せず、尙ほ黙々として敵に接近して行つた。然れど敵火の効力は益々増大して、列兵の斃る者次第に増加し、鐵道線路を越えて、方に監視家屋に突撃せんと、目下部少佐は之れが區署をなすつゝあつたとき、敵弾命中して戦死し、大石大尉代つて指揮を取つたが、敵の射撃は今や殆んど其の極度を發揮し、此まゝ前進を繼續するとも徒らに損害を重ねるのみにて、到底目的を達成し難きを看取し、遺憾ながら一先づ退却と決した。聯隊長は自ら一小隊を率ゐて、大隊に續行しつゝあつたが、此の状況を觀て直ちに其の收容に任じ、無名部落村端に於て全く之を收容し、且つ隊伍を整頓せしめた。但し時漸く天明に近き上に、敵の射撃依然熾烈なりし爲め、死傷者の全部を收容することができなかつた。而して此の短時間に於ける死傷者は大隊長以下二百餘名にして、如何にその戦鬪の激烈なりしかを推知するに足るであらう。「全力を傾けて奮戦」午前五時半、第一大隊は旅團豫備となり、代つて第三大隊（砲兵掩護隊）聯隊長の指揮下に復歸したので、聯隊長は直ちに同大隊長矢木少佐に第九・第十二中隊を指揮せしめて、歩四五の左翼即舊第一大隊の位置に増加した。

三大隊長矢木少佐・聯隊副官入江少佐等負傷するに至つた。午前十一時頃に至りて、前面鐵道線路を占領せる敵は我が勇猛果敢の攻撃に堪へず、終に東方村落内に退却を始め、又午後一時頃には首山堡南方一部の高地は、我が友軍の占領する所となつた。依つて聯隊は、此機を逸せず攻撃前進に移らんと試みたるも、當面の敵は頗ぶる頑強にして未だ其機に至らず。二時頃より再び敵の砲火は猛烈となり、三時前後優勢なる歩兵の集團は、酷烈なる銃砲火の掩護の下に、猛然我に向つて逆襲して來た。然れど我が射撃能力も亦殆んど其の極度を發揮し居れる爲め、敵は徒らに多大の損害を蒙つて退却するの外なかつた。當時戦機は白熱點に達し、附近の友軍は已に豫備隊の全部を第一線に送り、共に着剣白兵の格闘を以て決勝を行ひつゝあつた。是より先き二時四十分第二中隊は聯隊長の指揮下に復し、次で第二大隊（第五・第六中隊）及び工兵一小隊を増加せられ、四時四十分砲兵掩護たりし第十中隊をも復歸せしめられた。聯隊長は午後六時第二大隊（長・木澤少佐第一・第六中隊）を第一線に増加し、更に七時三十分、旅團豫備より聯隊に復歸せしめられたる第二・第四中隊を増加して木澤少佐の指揮に入れ、最後に第十中

隊をも第一線に進出せしめた。即ち聯隊は當時の状況に於て使用し得べき總ての兵力を第一線に展開して、勇猛果敢の攻撃を繼續した爲に、流石に頑強なる敵も、遂に退却の已むなきに至り、第三大隊はマヘトール西南方の角而堡を奪取し、同時第二大隊(第五・第六)及び第二・第四中隊は右翼歩兵第四十五聯隊と共同して、當面の敵を撃退してマヘトールを占領した。茲に於て敵は殆んど潰亂の狀を以て敗走を始め、加ふるに我が追撃射撃を受け、其の退路に無数の死傷者を遺棄して去つた。

午後八時三十分、第三大隊はマヘトール西方畑地に集合し、爾餘の隊は各々敵の構築せる散兵壕に據つて夜を徹した。是夜弦月淡く東天に懸りて、満目の光景轉た悽愴、死屍は山を成し、鮮血は壕に充つるといふ有様にて、將卒相顧みて一語を發せず、只唯た無量の感慨に打たるゝのみであつた。然れども二晝夜に亙る大奮戦を以て、終に敵が金城湯池と頼める首山堡を陥れたる我が將卒の壯快や又思ふべきであつた。

是日第五・第六中隊は、歩兵第二十三聯隊の増援として、小泉少將の指揮に屬し、友軍と協力して同じく首山堡に突撃した。此戦闘に聯隊の蒙りたる損害左の如し。

- △戦死 少佐日下部正衛、中尉鈴木學、松村眞家、少尉萩原宗廣、高田喜四郎、下士以下六十五名
- △負傷 少佐矢木亮太郎、大尉入江伴吉、綾部傳一郎、小宮山榮助、中尉深澤友彦、野田三藏、特務曹長帖佐武二、福岡又二郎、堀伍一、下士以下二百八十二名
- △行衛不明 下士卒十一名

〔遼陽附近の戦闘〕 九月一日、戰場掃除及び隊伍整頓を行ひたる後、右翼九九高地東南角より左翼グーズヤズイ兩端間に亙る間を占領し、遼陽方面に對し警戒しつゝ宿營し、二日午前六時出發、第三大隊及び工兵中隊を前衛として、遼陽に向つて前進中、七時半頃より右側方より敵の射撃を受け、直ちに前兵第十中隊を西八里庄西北畑地に散開せしめ、敵情を搜索すると共に前衛本隊の諸隊は速かに散兵壕を構築した。後、命に依りて陣地を砲兵陣地の右方に移轉し、同夜は陣地に於て戰鬥隊形のまま、夜を徹した。是日下田少尉の指揮する將校斥候は、我が右翼隊正面に在る敵の防禦工事及び副防禦の有無並に其位置等に就き詳細なる偵察報告をなし、軍司令官より感狀を授與せられた。此の日の優詔降下す。

滿洲軍ハ克ク諸軍ヲ糾合シ各路齊シク防備堅固ナル敵ヲ撃退シ終ニ之ヲ遼陽ニ壓セリ朕其勇武ヲ嘉ス以來日夜激戦ヲ繼續スルヲ聞キ深ク其勞苦ヲ懷ヒ轉タ軫念ニ堪ヘス

朕ハ爾將卒ノ勇武ニ信賴ス爾將卒其益々奮勵セヨ
將卒之を拜して恐懼措く處を知らず、志氣昂然として必勝を期す。

九月三日午前三時、豫備隊たる第十一中隊を第一線に増加し、同時に聯隊に復歸せる第一大隊を豫備として西八里庄北方畑地に開進せしめ、又第二中隊を我が第三大隊と歩兵第三十三聯隊との中間に出して連絡せしむ。然るに當面の敵も亦、時を経るに従つて増加に増加し、其の火力漸次熾烈にして、死傷者續出し、容易に前進の機を捉へ得なかつたが、我が徒歩砲及び野砲並びに重砲火の効果漸く發揚するに及んで、午前十一時頃より敵兵動搖の色あり、機を逸せず第三大隊及び第一大隊（大石八尉指揮）は、逐次躍進を始めた。同時に敵の銃砲火は再び熾烈を極むるに至つたが、更に第四中隊を第一線に増加し、多大の損害を拂ひつゝ、堡壘前六百米突の地線まで肉薄し（敵の一部は堡壘前三百米突の處に在り）、散兵壕を構築しつゝ、夜に入り、徹宵斥候を派遣して敵狀を偵察してあつたが、午後八時彼我火力の交換、最も熾盛を極め、硝煙天を蔽ひ、轟々たる砲聲は百雷の落つるが如く、光景壯烈と言はむより寧ろ凄愴を極めた。應て十一時半汾陽大尉の報告に曰く
「斥候の報告に依れば、敵は漸次退却の模様あり」と。第一・第三大隊は即時追撃前進に移

り、聯隊長は豫備隊たる第八中隊を率ゐて續行し、四日午前一時三十分に至り、聯隊は全く敵壘を占領し、同時に斥候を遼陽停車場附近に派して敵狀を搜索せしめ、同夜は萬歲聲裡に夜を徹した。

四日午前七時同地を發して、遼陽西門前に開進し、更に正午ジャオシャソンに至り、第二大隊を第一線、他を豫備隊として同地西端に集合した。

此戰鬪に於ける損害

△戦 死 大尉丸山祐四郎。下士卒二十八名。

△負 傷 中尉堀ノ内直。伊東文雄。下士卒百九十二名。

△生死不明 下士卒二十二名。

九月六日更に左の優詔を拜す。

勅 語

遼陽ハ敵ノ兵略要地ト爲シ夙ニ防備ヲ嚴ニシ軍資ヲ集積シ全力ヲ竭シ死守セシ所今滿洲軍萬死ヲ冒シ百難ヲ排シ奮戰激鬪數晝夜ヲ連テ遂ニ之ヲ拔ク朕深ク其功烈ノ偉大ナルヲ嘉ス

惟フニ其畫策慎重ニシテ果斷其運動整齊ニシテ敏活而シテ爾將卒之ヲ貫クニ忠誠勇

武ヲ以テスルニ非サレハ焉ソ能ク此ニ至ルヲ得ン抑々作戰ノ前途ハ尙遠遠ナリ爾將卒其レ自愛堅忍更ニ全局ノ大成ヲ期セヨ

六、沙河附近の會戰

遼陽附近の會戰後、敵の主力は奉天附近に退却し、有刀なる部隊は渾河右岸に在り、我第一軍は榮臺附近に在りて敵と對峙し、師團はグリンズイ附近に宿營することとなり、聯隊はグリンズイに露營し、戰備を嚴にして太子河附近の敵に對しつゝあつたが、九月十六日より再び前進を開始し、朗家口・後葛斜泡・西黒山屯・商家基を経て浪子街に到り、同地に駐留すること約二旬、沙河の會戰に於て異常の殊勳を樹て、九州男兒の精華を發揮するに至つたのである。

是より先き補充員下士以下三百四十二名、岡本少佐、松下少尉原田特務曹長等着任して、從來の缺員を補つた。

乃ち(遼陽會戰後)に於ける職員表

聯隊本部 聯隊長、中佐吉弘鑑徳。副官、大尉副島一郎。旗手、少尉友野盛。

第一大隊本部 大隊長、少佐大島虎毅。副官、中尉古川三郎。三等主計大久保義太郎。一等軍醫宮城雄次郎。三等軍醫西村格。

第一中隊 長、大尉帖佐長吉。小隊長、中尉西郡清二。少尉深水間瀨也。松下貞幹。

第二中隊 長、大尉大石正之。小隊長、中尉酒井勇。少尉林辰喜代。特曹麻草熊八郎。

第三中隊 長、大尉齋藤現。小隊長、中尉猿木眞壽夫。中尉脇山甚作。少尉迎専八。

第四中隊 長、大尉貴島尙武。小隊長、中尉篠崎直家。少尉香月清司。特曹吉本松太郎。

第二大隊本部 大隊長、少佐木澤啓。副官、中尉石丸志都磨。三等主計北川三策。一等軍醫長濱友雄。

三等軍醫野崎盛行。

第五中隊 長、大尉林仙之。小隊長、中尉小田常喜。少尉渡邊芹人。蓮田默思朗。

第六中隊 長、大尉小宮山榮助。小隊長、中尉土井智清。少尉古城胤秀。特曹坂本榮助。

第七中隊 長、大尉原田齊次郎。小隊長、中尉竹下範國。少尉本田啓平。特曹白濱重平。

第八中隊 長、大尉北村吉雄。小隊長、中尉香椎浩平。少尉中原八郎。特曹二見源次郎。

第三大隊本部 大隊長、少佐岡本茂若。副官、中尉深澤友彦。三等主計岡留猪市。一等軍醫内野大享。

三等軍醫島原孫市。

第九中隊 長、大尉永谷清治。小隊長、中尉野田三藏。齋藤安貞。少尉田代傳吉郎。

第十中隊 長、大尉生源寺康禱。小隊長、中尉宮脇幸人。下田吉雄。少尉前田肇。

第十一中隊 長、大尉汾陽光二。小隊長、中尉山下兼隆。少尉古閑松太。田中嘉之助。

第十二中隊 長、大尉大島三郎。小隊長、中尉星村市平。堀吉彦。特曹堀佐市。

七、浪子街の戰鬪

十月十日聯隊(第一大)は東上岡子西端に集合し、奉天街路を南進する敵に對し、師團本隊の

先頭に在りて行進し、尖臺子・小東山堡を経て揚家灣に向つて前進し、午前八時四十五分頃より銃砲聲を聞きつゝ、午後四時前康家臺に開進し、五時五十分更に小東山堡に轉進して、夜半十時過ぎに至りて宿營に就き、十一日命に依り午前十時大東山堡に到る。

是時前衛は同地北方無名部落附近に在りて、揚家灣の敵と交戦中であつた。然るに午後零時四十五分聯隊長は、昨日來右側衛として二臺子に在りたる第三大隊が、第三師團の左翼が敵の逆襲を受けて退却を始め、之れと共に退却中なりといふ報に接し、命に依つて第二大隊を提げて増援した。是時已に敵は撃退せられて、其の歩兵線は英得牛糸より揚家灣附近に、砲兵は浪子街東端附近に陣地を占領しつゝあつたが、午後三時五十分頃揚家灣の敵は退却を始めた。乃ち聯隊長は第二・第三大隊を指揮し、師團の右側支隊として浪子街の敵を攻撃すべき命を受け、第二大隊を第一線、第三大隊を第二線として其右翼後に位置せしめ、歩兵第四十五聯隊の右翼に連なり、英得牛糸・浪子街の敵に對し停止して塹壕を構築し、戦闘準備の隊形を以て夜を徹した。

英得牛糸は是日午後四時半頃第三師團の左翼隊に依りて占領せられたる旨の通報を受けてあつたが、同夜尙は敵は同村を占領せるものゝ如く、屢々我右翼に小銃火を送り來たり、

又九時四十分頃左翼前面に當り、俄然猛烈なる敵の銃砲聲を聞いたが、間もなく其の射口は我が正面に移り、僅々三十分間を出でざる間に、二十餘名の死傷者を出すに至つた。

十二日聯隊(第一大)は騎兵一小隊・工兵一中隊を増加せられ、師團右翼隊となりて浪子街・チエンラウテンハゴウを経て拉木屯に向つて前進し、午前六時五十分敵前七百米突の地點に達するや、第三大隊(一中)を左翼、第二大隊(一中)を右翼第一線、第五・第十二中隊を豫備隊として攻撃を開始した。十時頃より彼我の火戦頗ぶる熾烈となり、死傷者續出す。正午頃に至れば我が第一線は已に敵線を隔つる三四百米突に近接し、互に決勝射撃を始めた。恰も好し此時歩二三の第三大隊我に増加せられて到着し、直ちに其の二中隊を左翼に延伸増加し、茲に我が火力は漸次敵を壓倒し、敵は午後一時頃終に動搖の色を現した。依つて聯隊は方に突撃に移らんとしたるに、敵は已に早くも退却を始めたので、突撃を中止して追撃射撃に移り、歩二三の第三大隊をして浪子街東北端を占領せしめた。

然るに英得牛糸西端に據れる敵兵尙は頑強に抵抗し、頻りに我が右側面を猛射せるを以て、第十二中隊を右翼に増加して此敵に向はしめ、第二・第三大隊亦全正面を以て東臺に對し攻撃を續行し、且つ此時増援の爲到着せる歩二三の第二大隊をして、敵を包圍する如

く運動せしめ、二時頃に至り敗退せる敵をして殆んど全滅に歸せしめた。
戦後英得牛塚及び浪子街に於て隊伍を整頓し、同夜同地に宿營す。

△戦 死 大尉汾陽光二 下士卒三十名

△負 傷 中尉土井知清、同古閑松太、下士卒二百四十二名

此戦闘に於て、滿洲軍總司令官及び第二軍司令官より左の感狀を授與せられた。

感 狀

第六師團

昨十二日浪子街附近ノ戦闘ニ於テ勇敢奮闘能ク頑強ノ敵ニ肉薄シ其陣ヲ奪取シ再度ノ逆襲ニ對シ猛烈ニ之ヲ撃退シ加之其大砲十六門ヲ鹵獲シタルハ頗ル勇壯ナル動作ト認ム仍テ感狀ヲ授與ス

明治三十七年十月十三日

滿洲軍總司令官

侯爵 大山 巖

感 狀

步兵第四十五聯隊
步兵十三聯隊第一大隊

沙河會戰中十月十二日二十家子及小東山附近ノ頑強ノ敵ニ對シ步兵第四十五聯隊ハ正面及右側ヨリ歩兵第十三聯隊ハ浪子街ヲ攻略シ剩ヘ敵ノ數回企圖セル逆襲ヲシテ徒爲ニ歸セシメ敵ヲシテ野砲十六門及數百ノ死體ヲ遺シテ潰走セシメタルハ壯烈ノ動作ト認ム依テ感狀ヲ授與ス

明治三十七年十一月 日

第二軍司令官

男爵 奥 保 鞏

〔白塘堡の戦闘〕 十三日敵の大縦隊は沙河堡東北方向約六吉羅米突の馬鞍樓を北に向つて退却し、又八家子東北方向高地附近の敵は黄家甸に約一師團の兵を留めて北方に退却を始め、師團は此の黄家甸附近の敵を攻撃する目的を以て、同日午後零時頃より前進を開始し、聯隊は第二大隊を前衛として師團の先頭に在り、夜を徹して前進及び陣地の構築を行ひ、十四日午前十一時馬鞍樓西方村落に到達し、同時第十二中隊をして馬鞍樓を占領せしめ、午後零時半豫備隊を増加し、白塘堡高地に向つて逆襲する敵の左側背に肉薄して激戦し、日没後聯隊は摺鉢山右方高地に互る線の守備を命ぜられたるに依り、第三大隊を摺鉢山に第一大隊を中央高地に第二大隊を左方高地と區署し、七時三十分第三大隊が守備地に向つ

て移動せんとする時、敵は第一大隊の守線に向つて猛烈なる射撃を開始すると共に、潮の寄するが如くに逆襲して来た。仍て第三大隊を一時高地に停止せしめて、第一大隊を收容せしめんとした。然るに敵の逆襲は、刻一刻と猛烈を極め、全線爲に頗る危殆に陥つた。聯隊長(中佐)は奮然自から第一線に立ちて指揮を執り、「各隊は最後の一人となる迄も、各其の守備線を死守せよ」と激励し、遂に此の優勢猛勇なる敵勢を撃退し、午後八時彼我の歩兵戦闘は全く止んだ。

△戦 死 下士卒五名(外行衛不明)
△負 傷 下士卒六十七名

十五日拂曉敵兵來襲の報に接し、各隊直ちに守備線に就いたが、敵遂に來たらず、午後一時キシンホウンに到りて師團の豫備隊となり、第三大隊は右翼隊に増加す。午後四時二十分聯隊長は第二大隊を率ゐる豫備隊として砲兵線下を右翼隊に續行し、同夜拉木屯に到りて村落露營し、爾後聯隊は拉木屯附近に防禦陣地を編成し、以て冬季の滯陣に入つた。此の會戰に於て、敵は最初心勝を期して攻撃して來たのであつたが、數晝夜に互る我軍の

勇戦健闘に、哀れや一萬二千の生靈は沙河河畔の鬼と化し、數萬の傷者を生じ、南卜の壯圖は空しく南柯の夢と消えて、一敗再び地に塗るゝに至つたのである。沙河の戦勝に對し、十月十六日左の優詔を賜ふ。

我滿洲軍ハ敵軍新銳ノ増援ヲ得テ大舉攻撃シ來ルニ對シ機先ヲ制シテ逆襲シ激戰數日多大ノ損害ヲ與ヘ遂ニ之ヲ沙河以北ニ潰走セシメ全ク其企圖ヲ挫折セリ
朕深ク爾將卒ノ忠勇克ク連日ノ勞苦ニ耐ヘ偉大ノ功績ヲ奏シタルヲ嘉ス

八、沙河附近の對陣

此の時に方り我軍は戰鬥力の恢復を待ちて更に追撃に移らんとしたが、敵は益々優勢となりて、再び攻撃し來らんとする状が見えたので之が對抗の策を取るに至つた。吾聯隊は范家屯に宿營して諸般の整頓に従事し奮つて分擔の事務に執掌し次に起るべき戰鬥の準備にとりかゝつた。我軍は到る處機關砲を据ゑ、掩蓋を設け塹壕を増し交通壕を開いて、半永久に近き防備を完成するに至つた。然ども敵と相隔ること遠きも千七八百米突、近きは三百米突にして、敵は不斷に銃砲火を我陣地に送つて來たが、我は自重して彈藥の節約に

努めた。斯る間に既に北地の冬は迫りて沙河の流も氷結し寒氣は愈々凜烈を極むるに至つたが、村落の家屋は概ね砲弾に破壊せられて雨露と寒さとを防ぐに由なきを以て、防禦線の直後に一害凡そ十人許りづゝ入るべきものを造り綿々相連り、防禦陣地を連絡し、一鼓直に戦闘配備に就き得る便に供へた。

十月二十日敵の重砲火を蒙りて聯隊本部火災を起し、山口中尉、村上特務曹長及び下士以下二名負傷した。

十一月三日及四日に互り、補充員として大尉貝塚豊藏、少尉森威克、見習士官山口仁平、下士以下三百二十六名到着し、尙ほ機關砲一小隊(三)を配屬せられた。

十二月九日、敵の歩兵約一中隊、我が前哨の下士哨を攻撃し、次で松林に砲撃を集中したるが、天明に至り之れに多大の損害を與へて撃退した。

同月三十日、皇后陛下より野戰病院の患者に巻軸繙帯を下賜せらる。

此の間各隊は兵力の休養及び補充兵の訓練に努力し、射撃は前面を徘徊する敵を目標として實弾を以て之を行ひ歩哨斥候等の勤務は之を敵前に實習せしめ防禦工事作業も亦彈丸雨注の下に教授し、唯密集運動のみは敵眼を避けて後方に於て教練せられた。斯く寧日なき

努力の結果は、就役僅に半歳に充たぬ補充兵も對陣の末期には平時三年の教練を受けたる現役兵に比して遜色なき伎倆を有するに至り、奉天會戰に曠古の偉勳を奏する素地は、實に此間に養成されたのである。

而して此の對陣中三十七年の天長節、三十八年の新年及び紀元節の三大祝日を迎へたが、特に一月元旦は熙々たる小春日和の空に一片の雲翳なく、日章旗は各客室の入口に翻り、

附近の士民相率ゐて慶賀を軍門に致すなど、滿洲の野は既に王化の治きを思はしめたのである。聯隊は是日拉木屯西端稍や高き處の、灰燼の間に只一軒残れる小家屋に新年祝賀式を行つた。

二日旅順開城の通報に接し、全線の志氣大いに昂る。

一月二十五日、極東第二軍を主力とせる十餘萬の大部隊は續紛たる飛雪を衝いて、突如我が守線の最左翼たる黒溝臺に來襲し、一時黒溝臺及び沈旦堡の線を敵手に委するに至つた

が、臨時立見軍が三日に互る猛烈果敢なる逆撃に依つて、死傷一萬三千といふ大打撃を加へて二十九日遂に之を撃退した。

二月三日、大元帥陛下には、侍從武官長岡澤大將(精)を、軍情慰問として戦地に特派せら

れ、總司令部に到着して、左記優渥なる御沙汰を傳達せらる。

御沙汰

滿洲軍ハ出征以來常ニ勁敵ヲ挫キ寒暑ニ耐へ着々其功ヲ奏シ兩陛下ニ於カセラレテハ頗
ブル御満足ニ思召サル尙戰爭ハ前途遠遠ナルヲ以テ各自自重自愛終局ノ勝利ヲ全フセヨ
トノ御沙汰デアリマス
同時皇太子殿下にも東京武官長 村木少將(雅)を差遣せられて、優渥なる命令を傳達せられ、
尋て二月十一日即ち紀元節に際し、兩陛下皇太子殿下より御下賜の煙草、菓子(傷病兵に)
分配せらる。將卒一同今更に聖恩の鴻大なるに感激した。

九、奉天附近の大會戰

黑溝臺附近會戰の後、我が前面の敵は、日夜防禦工事を繼續擴張し、其の警戒は日一日と
嚴密を加へたるのみならず、其右翼方面も漸次兵力を増加し、行動は日を追うて活氣を呈
するに至りたれば、我も亦全軍の力を舉げて一撃の下に曠古の大捷を博せんと上は將帥よ
り下は士卒に至るまで朝夕腕を扼して、總攻撃開始を待つて居た。斯くて二月二十二日大

山總司令官は一大決心を示して曰く、

近く目前に横はる會戰に於ては、我は日本帝國軍の全力を舉げ、敵は滿洲に用ひ得べき
最大の兵力と思はるゝ軍隊を提げ、以て勝敗を賭せんとす。是れ重要中の重要なる會戰
にして、此會戰に於て勝を制したるものは、此戰役の主人公となるべく、實に日露戰爭
の關ヶ原と云ふも不可なからん。故に吾人は此會戰の結果をして、全戰役の決勝となす
如く勉めざるべからず。従つて土地を略し、塹壘を陥るゝは此大作戰方針の主眼に非
ず。要は須く可成多大の損害を敵に與へ敵をして復起つ能はざらしむるに在り。然る
に諜報の傳ふる所に依れば、黑鳩禽大將は此度の會戰に於ては決して退却を許さず、退
却するものは、日本兵の武器に斃れずして退走を罰する刀劍の鏑となるべしと命じたる
由なり。果して信ならんか、彼も亦此度の會戰を以て、最後の決戰となすを知るべし。
而して敵の將卒にして、果して黑鳩禽大將の精神を以て精神となすときは、其交戰の頑
強なるべきこと、推して知るべし。否吾人は、此頑強なる敵に遭遇するの覺悟を以て
戰はざるべからず云々

〔小孤家堡子の戰闘〕 三月一日夜、聯隊(第二・第四中隊缺)は奉天街道西方堡壘より拉木屯東

日露戰役



一 斑 圖

日露軍
 日軍
 露軍

三十八年三月上旬 / 位置
 三十七年十月上旬 / 位置
 三十七年六月下旬 / 位置

鐵道
 圖上、畧符、師團、概略位置ヲ示ス



北に互る線を占領すべき任務を以て前進し、第一攻撃陣地を構成したる後、更に第二攻撃陣地の構築に着手し、第八・第十中隊は大孤家子方向より、第五中隊は沙河子方向より敵の斜射を蒙りたるも、銳意奮勵して工事に従ひ、二日午前四時三十分敵の下士哨を驅逐して、第二陣地の構成を終つた。同日聯隊は砲戰の結果を待つて、小孤家子堡壘に向つて攻撃を實施せんとしたるも、敵砲の威力頗ぶる旺盛にして、猛烈に我が攻撃陣地を亂射し、爲に聯隊は非常の窮境に陥り、聯隊長以下三百餘名の死傷者を出だすに至つた。

△戦死 少尉山之城純夫・池邊嘉一。特務曹長三原常太郎。下士以下七十四名

△負傷 中佐吉弘鑑徳。中尉前田肇・渡邊芹人・香椎浩平。少尉古城胤秀・外村長藏。特務曹長桑山周吉。下士以下二百四十五名

△行衛不明 下士以下五名

三日も状況は依然として變化なく、徒らに損害を受くるのみであるので、第一線部隊のみを残して、聯隊本部及び豫備隊は露兵の角面堡内に移つた。但し我が左翼隊方面の戦況は悉く有利に進捗しつゝ、あつたので、之れと策應して一度び攻撃前進を試みたが、敵狀變化なく、再び現在地に於て夜を徹した。是日軍司令官より左の訓示を受けた。

訓示

刻下ニ於ケル我滿洲軍ノ作戰ハ、我帝國ノ運命ヲ決スル所ノ一大快戰ニシテ堅忍力行軍隊最大ノ力ヲ發揚セサルヘカラサルノ時ナリトス、各官ハ宜敷此意ヲ體シ最モ猛烈果敢ニ其ノ目標線ニ向ヒテ攻撃前進ノ地步ヲ占メラレムコトヲ切ニ希望ス

將校以下其の責任の重大なるを感して益々奮起すと雖ども、七日迄我が正面の敵情に大なる變化なく、他方面の攻撃進捗を待つにあらざれば、又如何とも爲がたき情況であつた。

六日新聯隊長奥村中佐(猛信)着隊して聯隊の指揮を執る。

八日第一線大隊(第二)をして小孤家子堡壘に向かひ射撃を加へしめたるに、小數の敵兵殘留するのみにて、其の大部は已に退却せることを知り、大隊は直ちに之に向つて突入し、少數の守兵を驅逐して、午前三時四十分小孤家子堡壘を占領し、次で聯隊は北部沙河堡に集合して追撃に移り、南部深溝子に到り、至嚴の戦備を整へて夜を徹し、九日拂曉より更に追撃前進を開始したるも、黃木坎に在る敵歩兵は頑強に抵抗して容易に退却せず、加ふるに河家堡營盤附近より斜射を受けて、渡河することを得なかつた。是日烈風砂塵を捲き、天地爲めに黃變して咫尺を辨せず。これは退却する敵に不利にして、我軍の爲には却つて

有利であつた。夜に入るを待ちて、聯隊は夜襲に依つて黄木坎を攻略し、それより師團本隊に加はり、木廠を経て、夜半馬家橋に侵入した。

九日優詔は滿洲軍に降下した。

我カ滿洲軍ハ客冬沙河激戰以來銳ヲ蓄ヘ妄リニ動カス以テ戰機ノ熟スルヲ待チ一度意ヲ決シテ立ツヤ全線活動敵軍ヲ壓迫シテ既ニ能ク包圍ノ形ヲ占ム
朕ハ捷報ノ至ル毎ニ我カ戰勢ノ益々佳境ニ進ムヲ憚ヒ又汝將卒餘寒尙ホ酷烈ノ時ニ於テ數晝夜ニ亙ル艱苦ヲ察シ軫念太タ切ナリ其レ各々自愛シテ耐久ノ勇ヲ養ヒ光輝アル功績ヲ奏シ以テ朕及朕カ億兆ノ信賴ニ答ヘヨ
將士之を拜承して、全線の志氣大に振ふ。

十、魚鱗堡附近の戰鬪

三月十日午後一時三十分聯隊は陳家屯に開進して、二臺子東北より歩兵第四十五聯隊の右翼に展開し、魚鱗堡を経て奉天街道に沿うて急進し、第二・第三大隊は猛烈なる敵の銃砲火を冒して、最も勇敢に追撃し、多大の損害を與へ又多數の兵器軍需品を鹵獲した。又第三

大隊(中隊)は第七中隊と共に、奉天街道に沿うて大窪方向に前進し、同村南方約七百米突の高地に據れる敵歩兵約一大隊を驅逐し、更に午後五時三十分旅團命令に依り第三大隊大窪南方より追撃部隊となりて急進し、尠くも師團以上の敵に對し、熾烈なる側射を浴びせ、爲に該集團をして退却を中止するの已むなきに至らしめ、爾後其の收容隊らしきものと交戦しつゝ、夜に入りて聯隊に復歸した。

第三大隊が大窪南方より追撃前進を開始したると殆んど同時、聯隊(第三大)は右翼隊長より敵ノ大縱隊北部奉天ヨリ東北部ニ向ヒ我背後ニ突撃ヲ試ムルモノノ如シ、聯隊ハ直チニ魚鱗堡東南方松林附近ニ至リ其進路ヲ遮斷スベシ

との命を受け、直ちに第十二中隊を大窪南方高地に留め、第一(第一中)第二大隊・機關銃隊・第三大隊(中隊)の順序を以て前進した。然るに此時又もや砲兵第十四聯隊より、敵ノ大縱隊我カ放列ニ向ヒ突撃シ來ル、直ニ救援ヲ乞フ

との報に接したので、聯隊は後備歩兵第十聯隊と協力して、此敵に對して展開し、方に陣地を占領せんとするの際、敵は樂を奏し喊聲を擧げて來襲し、接近距離まで肉薄して猛烈なる銃火を送り、且つ機關砲を亂射したるが、我が將卒は固より毫も屈撓する所なく、沈

着して之を撃退し、敵は遂に多大の死傷者を遺棄して潰走し去つた。
同夜、聯隊は至嚴の配備をなして、同地に夜を徹した。
十一日午後二時、敵兵再び來襲したるも、直に之を撃退した。聯隊が此の二日間の奮闘は、
克く追撃の効を奏したるのみならず、我が軍をして奉天包圍の目的を達成せしむる上に、
多大の力あつたのである。

此戦闘に於ける鹵獲品

俘虜五十二名 銃二十二挺 小銃彈八十四萬八千發 其他の軍需品及材料多數
茲に前後十數晝夜に互れる大激戦は其の終局を告げ、敵は此の一戦に十數萬の將卒を損じ
て物質上多大の損傷を蒙つたる外、精神上にも癒すべからざる致命傷を負うて、遂に媾和
の伏線を爲すに至つたのである。奉天の會戦は帝國の陸軍に取りて振古未曾有の大戦たる
と同時に、實に我が國運は此一戦に賭せられたのである。乃ち奉天陥落せる三月十日を以
て陸軍記念日と定められた。

勅語

奉天ハ客秋以來敵軍茲ニ鞏固ナル防禦工事ヲ設ケ優勢ノ兵ヲ備ヘ必勝ヲ期シ衝ヲ爭ハム

トセシ所ナリ
我滿洲軍ハ機先ヲ制シ驀然攻進互寒氷雪中力戰健闘十餘晝夜ヲ連テ遂ニ頑強死守ノ
敵ヲ擊破シ數萬ノ將卒ヲ虜ニシ多大ノ損害ヲ與ヘ之ヲ鐵嶺方向ニ驅逐シ曠古ノ大捷ヲ博
シ帝國ノ威武ヲ中外ニ發揚セリ
朕深ク爾將卒ノ能ク堅忍持久絶大ノ勳功ヲ奏シタルヲ嘉ス尙ホ益々奮勵セヨ
此の戦闘に於て、第三大隊及び第二・第三中隊は功績拔群なりし爲め、軍司令官より感狀を
授與せらる。

感狀

歩兵第十三聯隊第三大隊(中隊缺)

明治三十八年三月十日奉天北方ノ追撃戦ニ於テ最モ猛烈果敢ニ敵ヲ追撃シ多數ノ兵器材
料ヲ鹵獲シ殊ニ鐵嶺街道ト鐵道線路トノ中間ヲ陸續退却セル敵ノ大縦隊ノ側面ニ迫リ多
大ノ損害ヲ與ヘ其ノ退却ヲ止泊シ且同日ハ奉天北方ヨリ魚鱗堡方向ニ突圍ヲ企テタル敵
ノ大部隊ニ對シ聯隊ノ第一線トナリ勇戰奮闘遂ニ之ヲ擊退シ敵ノ企圖ヲ挫折セシメタリ
其功績顯著ナリトス依テ感狀ヲ附與ス